
アヤカシ

赤夜叉

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヤカシ

【Nコード】

N8891T

【作者名】

赤夜叉

【あらすじ】

——さあ、余興の始まりだ——。人生の負け組へと堕ちた『俺』は、偶然訪れた京都で一人の黒い少女と出逢った。京の大妖怪・羽衣狐と落ちこぼれ人間・『俺』の奇妙な物語が始まる。

プロローグ（前書き）

勢いで書いた。

後悔はしていない。

ブローグ

この世に、幽霊、妖怪、宇宙人が本当に存在するかどうか訊かれたら、俺は多分こう答えるだろう。

いや、居ても居なくてもどっちでもいい。

正直、そんなモノが存在していようがいないが、心底どうでもいいって話だ。心霊現象や超常現象と言った非科学的な事は信じない方だが、結局のところどうでもいい。何故なら、俺には関係が無いからだ。信じてないけど、妖怪や幽霊が存在するってんなら別に構わない。俺に危害が及ばなければ、この世に存在して何処で何しようが好きにすればいいさ。

まあ、でも、ちよつと憧れたりしてる。某有名妖怪アニメの歌だと、妖怪には仕事も病気も何にも無い、と言う歌詞がある。仕事が無いと言う事は、つまり働かなくていいって事じゃねーか。更に病気にもかからないと言う、出血大サービスだ。自分でも考えてみても、妖怪には『死』と言う概念と言うか、イメージが浮かび難い。楽して生きたい俺にとって、ちよつと憧れる存在である事は否定出来ない。

まあ、でも実在はしてないだろう。妖怪なんて、所詮は人間の想像によって生まれた、空想の産物なんだからな。

しかし、そう思っていた二十二年の俺の人生は、ある日突然ガラリと変わる事になる。

プロローグ（後書き）

次回：余興

一ノ怪：余興

街中で、俺は溜め息をついた。

当ても無く、ダラダラと街中を歩いていく。周りの人達は、スーツを着て速足に歩いてたり、友達と仲良く話しながら学生が歩いてたり、騒がしいったらありやしない。サラリーマンは疲れた表情をして、学生は学校に行くのが面倒そうな顔をしてるが、皆には共通してる点がある。

どいつもこいつも、生きてるって感じてやがる。やる事があつたり、話相手が居たり、騒がしくて賑やかだ。

ああ、鬱陶しい。

今の俺にとつて、周りの人間は鬱陶しい以外の何者でも無かった。大学を卒業した俺は、就職活動に失敗して家に戻った。失敗つて言うより、何もしなかったのが正しいな。就職出来なきやバいつてのは解つてたんだけど、どうにもやる気が出なくてさ。更に就職氷河期なんて時代つて聞いて、余計にやる気が削がれた。

怠惰。

俺の心は、怠惰が占めてた。そんな訳で、俺は家族のお荷物として家に帰ってきた。けど、家での生活も長くは続かなかった。帰つてからも家に引き籠もってる俺の酷い状態を見て、親は強硬手段に出た。俺を家から追い出し、就職するまでは帰る事を許さないと言われた。銀行から下ろされ、渡された僅かな金を手に俺は街中をブラブラダラダラと歩いてた。

何処に行こうかな、と俺はボーっとした頭で考えた。とりあえず、遠くに行きたいと思った。少し遠出でもすれば、多少なりとも気分が晴れると思つたからだ。

——それはそれで、何処に行こう？

根本的問題の解決にならず、俺は再び頭を悩ませた。

その時、ふと一つの言葉が脳裏を過つた。

「そうだ。京都行こう」

テレビのCMの台詞を口にした俺は、即行動に移った。

*

何度か電車を乗り換え、俺は宣言通り京都にやってきた。

懐かしいな、と駅から京都の街を見渡す。久しぶりの京都だな。確か高校……いや、中学の修学旅行の時からだ。まあ、ホテルで夜遅くまで起きてて、友達と話してた事くらいしか覚えてないけどね。その時、何故か『妖怪・間』の歌を友達と歌って盛り上がったのを、よく覚えてる。

——俺も、立派とまでは言わないけど、普通のまともな人間になりてえ。ああ、何か『妖怪・間』歌いたくなってきた。

そんな事を思いながら俺は、京の街中を歩いた。遠くの街に出れば、それなりに気晴らしになるかと思っただけ、そうでも無かった。周りの奴等が、どういつもこいつも幸せそうな顔してて、人生転落中の俺のテンションは更に下がる結果になった。特にカップルを見ると、憂鬱と共に黒い嫉妬心も込み上げてきた。

——チツ、テメー等みんな死ねばいいのに……。

理不尽な憎しみを抱きながら俺は、京の街中を進んで行く。

街中を歩きまわっても、他人の幸せに嫉妬し、落ち込むだけと判断した俺は、ホテルで部屋を取って寝る事にした。朝から歩きっぱなしで、いい加減疲れたしな。

疲れた表情で、振り返った時だった。

思わず息を呑み、目を丸くして固まった。

沢山の人混みの中に、その女は居た。

一言で表すなら、黒。

長く艶やかな黒髪、黒のセーラー服、黒のタイツ、黒の靴、黒の靴。透き通るような白い肌以外、漆黒を思わせる黒一色の女が立っていた。全身真っ黒な事にも驚きだが、一番衝撃を受けたのは女の容姿だ。

メチャクチャ綺麗だ。

今まで、テレビで色んな女性芸能人を見てきたけど、正直比べ物にならない。本物の『美人』ってヤツを、この目で見た気がする。生まれて初めて、俺は女に見惚れた。

しかも、黒の女生徒と目が合った。

いつもなら、俺は視線を外しただろう。美女と目を合わせてるなど、小心者の俺には出来ない。根性無いと言われても、そうなのだから仕方ない。

けど、この時は違った。

どういう訳か、黒の女生徒から視線を外せない。いや、視線どころか体を動かす事も出来なかった。まるで、金縛りにでもあったように、ピクリとも動かない。動かせない。自身の異変に、心臓の音が高鳴る。鼓動が早鐘のようになり、額から嫌な汗が流れる。

すると黒の女生徒が、ニコリと笑った。

その瞬間、背筋がゾクリと凍った。黒の女生徒の笑みは、妖艶で綺麗だけど、同時に得体の知れない恐怖を感じた。

いまだ動けない俺に、黒の女生徒が歩み寄ってきた。カッソカッソ、と靴を鳴らして人混みの中を突き進んでくる。

怖いけど、綺麗な女生徒が近づいてきて、興奮も高まってきた。ビビりでも、男なんだよ。

歩み寄ってきた黒の女生徒は、俺の目の前までやってきた。至近距離で黒の女生徒と顔を合わせて、顔が熱くなる。

黒の女生徒は、肩にかかった長髪を払い、言った。

「お前で良い。余興として、妾^{わらわ}を楽しませるがよい……！」

吐息が鼻にかかる程の至近距離で、黒の女生徒の言葉を聞いた直後、俺の意識は闇に堕ちた。

*

目を覚ますと、ソコは見知らぬ場所だった。
薄暗くてよく見えないが、何処かの部屋のように、かなり広い。
天井に付けられてるシャンデリアや高そうな絵が飾られてる内装から察するに、どこぞの金持ちの屋敷のように思える。

「どうなってるんだ……？」

頭を掻きながら俺は、体を起こして室内を見渡す。足元には、俺の荷物が置かれてある。

思い出せ。行く当ての無かった俺は、気分で京都にやってきた。
ブラブラと街中を歩いてたら、メチャクチャ綺麗な女子高生と目が合って……ダメだ。そこから先が思い出せない。

「ようやく目が覚めたか」

不意に、後ろから声が上がった。

ビビった俺は、反射的に後ろを振り返った。薄暗い部屋の奥から、足音を鳴らして人影が近づいてくる。薄暗い闇から現れたのは、例の黒の女生徒だった。

「あ……」

何か言おうとしたが、上手く言葉が出せなかった。声が掠れてる事に気付いて、俺は言い直す。

「あの……貴女は……？　ココは、何処なんですか……？」

年下相手に敬語を使うのも何だかおかしいが、黒の女生徒からは妙な威圧感が放たれてる気がして、自然と敬語になってしまう。

俺の問いに、黒の女生徒は微笑んで答えた。

「妾は、この家の主じゃ」

黒の女生徒の言葉を聞いて、ハアと俺は頷いた。

「えっと……貴女が、俺をココに……？」

「そうじゃ」

そうですか、と俺は言葉を返した。

二つの回答から考えれば、俺はこの女の家に来て来られたと言う事になる。俺本人の意識が無い内に連れ込んだから、半ば誘拐のようなモノだな。いや、俺なんか誘拐したって意味なんか殆ど無い。身代金を要求したって、たかが知れてる。それに、目の前の黒の女生徒は金に困ってる風には見えない。

どっちにしろ、ココは長居するような場所じゃないな。素直に帰してくれるか不安だが、一応訊いてみるか。

「あの……俺、そろそろ帰ってもよろしいでしょうか……？」

とことん低姿勢だが、臆病な性格なんだから仕方ない。

もし相手が、本当に金持ちの娘とかなら、下手に強気に出るのはダメだ。金持ちを怒らせると、厄介な事になりそうだしな。つか、

現状が既に厄介な事なんだよな。

「まあ、そう急ぐでない。少し、妾の余興に付き合ってはくれぬか？」

「余興？」

黒の女生徒の言葉に、俺は片眉を上げた。

どうでもいいけど、古い言葉遣いだな。まあ、妙に合ってるからいいけどさ。

それよりも、余興って何だ？

「妾を満足させる事が出来れば、お前に何か礼をしてやろう。ちなみに、お前に拒否権は無い」

「えっ!？」

——なん……だと……？

驚きのあまり、某死神主人公の台詞を呟いてしまった。

この女、かなり美人だからって調子に乗りやがって。そっちがそうくるなら、こっちにも考えがあるぞ。心の中で、ありったけの文句を言っただけ。え？ やる事が小さ過ぎるって？ コレが臆病者の限界なんだよ。悲しいけど、コレ現実なのよね。

それにしても、余興って本当に何なんだろうな？ ゾクリと背筋が凍るような笑みから推測するに、SMプレイって可能性も無くはない、ような気がする。考えても解らないけど、何だか嫌な予感があるってのは確かだ。

この家つつーか、部屋の空気が何か不気味なんだよ。スゲー不安な気持ちになって、心臓を掴まれてるように苦しい。

そんな俺の心境も知らず、黒の女生徒は笑顔を絶やさずにいる。何がそんなに楽しいんだろう、と思った時だった。

室内に、ズシンズシン、と大きな音が鳴りだした。しかも、段々

こっちに近づいてくる感じだ。

そして、音の正体が出やがった。

ソイツを見た瞬間、俺は体が硬直した。我が目を疑う、なんて事はしなかった。その時の俺は、信じられないモノを目にして、完全に脳がフリーズしていた。

黒の女生徒の後ろに現れたのは、鬼だった。二メートル近くある巨体、赤い肌、頭には二本の角、口には鋭い牙がある。金棒は持っていないが、コレを鬼と呼ばず何と呼ぶ？

目の前に現れた鬼に度肝を抜かす俺を見て、黒の女生徒は愉快そうに笑った。

「はっはっはっ！ さあ、余興の始まりだ。人間よ、妾を楽しませておくれ？」

妖怪や幽霊が、この世に実在するかどうかは正直どうでもいい俺にとって、神の存在にも関心は無かった。世界の中には、本気で神の存在を信じてる人間がいる。

正直、俺はどうでもいいと思ってるが、もし神なんてモノが存在するなら、この時の俺は確実に恨んでた。転落人生に突入したかと思えば、怪しい女子高生に誘拐され、空想の怪物である鬼が目の前に現れ、絶体絶命の危機に陥ってしまったんだ。在もしない神を恨みたくもなる。

しかし、後に俺は神に感謝するのかもしれない。

コレが、京の大妖怪・羽衣狐と平凡凡人な俺との出逢いだった。

一ノ怪：余興（後書き）

次回：奇策

「どうすればいい……？ どうすれば……？」

「無様に逃げ回る姿は、実に愉快じゃな！」

二ノ怪：奇策

俺の人生は、実に面白味の無いものと自負してる。

友達は少ないし、当然の事だが彼女だって居ない。女の手を握るなんて、中学の時のフオークダンスで触れた事しかない悲しい男だ。それまでずっと彼女居ない歴を更新してきた俺は、まるで逃げるように二次元にハマってしまった。可愛い美少女が出てくるってのもあるが、現実の日常じゃあり得ない刺激的な展開に魅力を感じたってのもある。その中で一番魅力的でハマったのは、『ド●ゴ●ボール』だ。連載が終わった今でも高い人気を得ていて、グッズやらゲームが発売されてる大人気作品である。ガキの頃は、『か●は●波』の構えをよく真似たモノだ。

何が言いたいかと言うと、俺は非現実的世界に憧れてたって事だ。ああ、確かに憧れてたよ。

憧れはしたが、死亡フラグを望んだ覚えは無い。

恐怖のあまり声も出せず、半ば茫然自失になってる俺の前には一匹の鬼が佇んでいる。しかも額に三つ目の眼球があって、怖さ倍増と言っいたらんオマケ付きだ。鬼なんて非常識な空想上の怪物が、目の前に居るなんて信じられなかった。

だが、俺は目の前の鬼が本物で実在してる事を、感覚的と言うか本能的に確信していた。鬼から伝わる迫力から、夢や幻覚ではあり得ないリアリティーを感じたからだ。そして、高速で足を震わせる俺のビビりっぷりが、何よりの証拠でもある。

俺が声も出せずビビっていると、俺をココに連れ込んだ張本人の黒の女生徒が口を開いた。

「今からお前に、この鬼と遊んでもらうぞ。これは余興じゃ。せいぜい妾を楽しませておくれ」

『戦い』と言わず『遊び』と表す辺り、この黒の女生徒が余興として楽しもうと言う気持ちがうかがえる。

しかし、今の俺に黒の女生徒の心中を察する余裕など微塵も無かった。脳をフリーズさせて、現実逃避するのに精一杯だった。

「は、はは。なるほど……コイツは夢だ。じゃなきゃ幻覚……幻だ……。そうさ、現実が漫画みたいに非常識な訳が無い……。全部俺の妄想……」

やっとの思いで絞り出した声で、俺は目の前の現実を全力で否定した。

俺の様子を見て、黒の女生徒が可笑しそうにクスクスと笑った。

「なら、これでどうじゃ？」

次の瞬間、俺の横を何かが通り過ぎた。一瞬の出来事で、何が起ったのか理解出来なかった。

ふと左頬に、痛みを感じた。左頬に手を当てると、液体に触れる感触がした。手を戻して、付着してる赤い液体を見て、初めて自分が怪我をした事に気付く。

そして、恐る恐る顔を左側に向けた。ソコには、太く大きな塊があった。薄暗い室内で、綺麗な金色の毛に覆われた太い塊が、生き物のようにユラユラと動いてる。俺は視線を移して、塊の先を見た。その塊は、黒の女生徒のスカートの中から生えていた。

「どうだ？ 目が覚めたか？」

相変わらず、黒の女生徒はニツコリと笑っている。

その瞬間、俺の幻想は粉々に打ち砕かれた。コレは夢でも幻覚でも何でもない、紛れもなく現実。現実逃避などしても意味は無いし、

その道は黒の女生徒によつて断たれた。

「もう待つのは飽いた。そろそろ始めるぞ。ほれほれ、ブーツと突っ立っていては早死にするぞ？　それではつまらぬ」

黒の女生徒の声を合図に、後ろに控えてた鬼が動き出した。ズシンズシン、と心臓に悪いデカイ足音を立てて、こちらに近付いてくる。

「あ、あ……！」

近付いてくる鬼を見ながら、俺は震える足を叩いた。ビビって、足が竦^{すく}んじまったんだ。

——ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！

俺はもう泣きそうな顔で、必死に足を叩き続けた。

ココで逃げなかったら、間違いなく死ぬ。殺される。

——動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け動け！

そうしてる間にも、鬼は迫ってくる。俺を潰し殺そうと、デカイ拳を振り上げる。アレでぶん殴られたら、トマトみたいにグチャツと潰されちまう。

「動けエエエエエエエ！」

俺の必死な思いは、ついに声となって出た。

鬼の拳が振り下ろされたのと俺の足が動いたのは、ほぼ同時だった。咄嗟に横に跳んだ俺は、間一髪ギリギリで鬼の拳を避けた。直後、硬い物同士がぶつかる重い音が鳴った。床に倒れた俺は、慌てて後ろを振り返る。鬼の拳は壊れず、硬い床にヒビを走らせた。鬼がこっちを向いて、目が合った。

「わわっ……！」

俺は四つん這いの体勢から、何とか立ち上がって走り出した。

巨体の鬼も、デカイ足音を鳴らして追いかけてきた。

——恐エエエエエエエ！ バ・オ３のネ・シスカよ、アイツ！
追跡者に追われるキャラクターの気持ちだが、嫌と言う程解った。

「はっはっはっ！ 無様に逃げ回る姿は、実に愉快じゃな！」

鬼から逃げる俺を見て、傍観してる黒の女生徒は楽しそうに笑ってた。

——あのクソガキ、絶対ぶっ殺す！ でも、その前に俺が殺されそうだよ、コンチクショー！

一瞬、黒の女生徒に意識を向けるも、すぐ逃げに集中した。背後からビビシと死の気配を感じて、心中は恐怖で一杯だった。

走りながら出口を探すが、それらしき扉が見つからない。部屋が薄暗いのと、冷静さを欠いてるのが原因かもしれない。本当は出口があるのに、見落としてる可能性もあるのだ。

恐怖に心臓を締め付けられ、呼吸が苦しくなる。体力は平均的だから、長く逃げ回る事は出来ない。つまり、俺がやってるのは、ほんの僅な延命行為。無様な悪あがきだ。

更に悪い事に、俺は間抜けにもコケてしまった。

もう逃げられない、助からないと俺は悟った。

「はは……ははは！ 何だコレ？ ははは！ もう笑えてくるぞ！」

ココまで絶望的状况だと、逆に笑えてくる。自分の不運不幸さに、俺は狂ったように笑った。

もついいや、と俺は完全に諦めた。どうせ生きていたって、ロク

な人生じゃないんだ。自殺する勇氣すら無いビビりの俺には、有り難いこった。

床に腰を落としてる俺に、鬼が吼えながら襲い掛かってくる。終わった。

そう思った時だった。

「待てっ！」

突然、室内に声が上がって、鬼の動きがピタリと止まった。

驚く俺は、声の出所に顔を向けた。ソコには、傍観していた黒の女生徒が居た。ただし、彼女の顔から笑顔は消えていた。

「つまらぬ」

一言言った。

一切の関心が失せた顔で、俺達を見ている。俺が逃げるだけで何もしないから、飽きたようだ。同じ場面しか映らない映画を観てるようなモノだからな。

けど、観る側としては退屈でも、実際に逃げてる俺は命懸けなんだよ。

余興に飽きた黒の女生徒は、ややあって何か思いつき、口を開いた。

「人間。お前に一分だけ時間をやろう。その間に、何か策でも考えておけ。鬼よ、離れよ」

は？ 何を言い出すんだ、この女は？

黒の女生徒の命令に従って、鬼は俺から離れた。

「頼むぞ。今度こそ、妾を楽しませるのじゃぞ」

最後に笑みを作り、黒の女生徒は身を翻して離れていく。

——いやいやいや、たった一分つてどうしろってんだよ！？ いや、そう考えてる時点で、時間の無駄遣いだ！

黒の女生徒から生き残りのチャンスを得た俺は、必死に思考を働かせた。追い詰められた時は簡単に命を諦めたけど、今は逆に助けたい一心で考えてる。環境や状況次第で、人間はコロコロ心境や考えが変わるのだ。

残り、約四十秒くらい。

「どうすればいい……？ どうすれば……？」

こういう非常識な危機的状況を切り抜ける為に、普段使わない頭をフル回転させる。

何でもいいから、生き残る術を見つけるんだ。まともに闘り合って勝てる相手じゃないし、だからと言って逃げ回っても疲れたところを潰されて終わりだ。つか、鬼相手にして生き残るつてのが無茶な話なんだよ。弱点とかあるなら、まだ希望があるのにさ。

——嫌だアアアア！ 童貞のまま死ぬのは、絶対に嫌だアアアアア！

頭を抱えて、俺は天井を見上げた。

残り時間、約二十五秒。

——だあああああ！ マジでヤベエエエエ！ シヤレにならねーよ、チクシヨー！ 何でもいいんだよ！ ホント何か弱点とか急所とかねーのかよ！ って、弱点と急所って同じような意味じゃねーかアアア！

グシャグシャに髪の毛を掻き乱して、俺は俯いた。混乱の極みに達した脳だったが、奇跡的にも起死回生の策を閃いた。

その瞬間、俺はピタリと動きを止めて再び考え込んだ。

——あれ……？ コレって、意外にイケるんじゃない？ いや、そ

りやまあイケるっちゃイケるかもしれないけど……この策は、人としてどうよ……？ 多分、いやきつと最低の行為と批難を受けるだろうな……。生き残る為とは言え、ロクな戦略じゃねえよ。いや、違う。生き残る為だからこそ、こういう手も使わなきゃダメなんだ！ サバイバルに、最低もクソも無い！ よゝし、やってやるぞ！ 黒の女生徒と鬼！ この俺に時間を与えた事を、後悔させてやる！

「時間切れじゃ」

俺が意を決したのと、時間切れは同時だった。

背後に鬼を引き連れ、黒の女生徒が戻ってきた。二人を見て、また恐怖がぶり返してきた。ヤベツ、恐くて失禁しそうだ。ソコを耐える俺って、何気に凄くて偉くね？

薄暗い室内で、俺と鬼は再び対峙する。

「では、余興の再開だ……！」

腕組みをする黒の女生徒の言葉で、鬼が一步步近づいてきた。ついに、この時が来ちゃったな。喉を鳴らして唾を飲み込み、鬼と対峙してる俺は、魔王に挑む勇者のような心持ちだった。逃げた気持ち在必死に抑えて、鬼と正面から向き合う。

俺と鬼の距離は、二、三メートルと言ったところか。

頃合いだな。

さあ食らうがいい、哀れな鬼よ！ この俺様の、素晴らしき妙手奇策を——！

「あああああああああ！」

腹の底からありったけの声を上げ、俺はあらぬ方向を指差した。一瞬驚いた後、鬼は俺が指差した方角を見た。後ろで傍観してい

る黒の女生徒は、全く動じず顔の向きも変えていない。

やっぱり、黒の女生徒は馬鹿じゃない。

だが、鬼は違った。

「何も無いわ、ボケエエエエエエ！」

思いつきり床を蹴って、鬼の懷に潜り込む。

そして、がら空きな鬼の股間を全力で蹴り上げた。

「グアアアアアアアアア！」

股間を思いつきり強打された鬼は、この世のモノとは思えない悲鳴を室内に響かせた。

あまりの音量に、たまらず俺は両耳を塞いだ。悲鳴に耐えながら追撃を放とうとしたが、相手は股間にある息子を抑えてガードしてやがる。

しかし、ソレも計算の内だ。

「目潰し！」

「おうつ！？」

股間を抑える為に前屈みになった鬼の三つの目に、俺は指をぶつ刺した。目をやられた鬼は、股間から手を離して今度は目を抑えた。そしてがら空きになった鬼の息子に、再び蹴りを食らわせる。目潰し息子殺し、目潰し息子殺し、目潰し息子殺し、とコレを何度も繰り返した。

そう、俺が閃いた策とは、急所狙いである。とにかく急所ばかりを狙って狙って、狙いまくって倒す。不良同士の喧嘩でも、急所だけは狙わないと言う暗黙の了解があってやらないだろうけど、俺は実行した。

罪悪感？ んなもん知るかボケエエエ！ こちとら、生きるか死ぬかの瀬戸際なんじゃアアア！ それになあ、卑怯汚い最低なのが人間の本性なんだよ！ ぶっちゃけ、鬼を攻めてる今メチャクチャテンション上がってます！

容赦無い俺の急所狙いは、ある意味“鬼の行為”とも言えるだろう。そんな俺の攻撃に耐えられず、とうとう鬼は目の前でノックダウンした。口から泡を吹きながら、巨体を痙攣させている。終わってから、ちよつと罪悪感が芽生えた。

「やった……」

しかし、手段はどうあれ俺は欲しかった結果を得た。

「やった……！ 勝った！ やったアアアア！」

倒した鬼の前に、俺は両手を天井に向かって突き上げた。

俺は、鬼に勝ったのだ。まともに喧嘩すらしてこなかった俺が、メチャクチャおっかない鬼に勝ったんだ。嬉しさのあまり、自然と涙が出てきた。

「面白い奴じゃ。意外にも、なかなか楽しめたぞ人間」

笑みを浮かべた黒の女生徒が、近付いてきた。

あれ？ そう言えば、勝ったはいいいけど俺どうなるんだ？

興奮が収まってきた俺に、黒の女生徒は続けた。

「うむ。もうしばし、お前を側に置く事にしよう。人間、お前を妾の百鬼夜行に加えてやるう……！」

「は……？ ひゃっ、百鬼、夜行……？」

百鬼夜行って、妖怪の群れのようなモノだよな？ いや、俺をそんな恐ろしい群れに加えて、どうしようってんだよ？ 今度こそ死ぬぞ、俺？ って言うか、他にも化け物が居るのか？

「まあ、加えると言っても雑用係のようなものじゃが」

そして俺の位置が、おっそろしいまでに低いな。

ちよいと気になる事があったので、俺は訊いてみる事にした。まあ、答えは予想出来てるけどね。

「あの……ちなみに、拒否権は……？」

「ある訳なかるう」

ですよねー。そんな事は、分かってましたよ。

俺が軽く落ち込むと、顎に冷たい感触がした。見ると、黒の女生徒が眼前に居て、俺の顎を指で触れていた。異性どころか同姓まで虜にしそうな妖艶な笑みを浮かべ、底が見えない惹き込まれそうな黒い瞳で俺を見つめてくる。

「お前は、妾の側に居るのが嫌か？」

「いや、そんな事ないです……！」

熱くなった顔で、俺は答えた。

逆らうような回答をすれば、危ないと言う本能の知らせもあった。けど、俺は心の底では、この女の側に居たいと思ってた。得体が知れない怖い女だけど、それでも少しでも長く一緒に居たいと望んだ。

「そうか」

俺の答えに、黒の女生徒はニコリと穏やかな笑みを浮かべた。

思わず俺は、顔を逸らした。あんな綺麗な笑顔を直視なんて出来ない。ああ、顔が熱い。そして、ヘタレな自分が憎い。

「ふふふ。お前は、初心ついでな反応をする愛い奴じゃのう」
「うつ……！」

な、何が愛い奴だよ。アンタが変な事言うから、余計に顔が熱くなってきたじゃねーか。くっそ、恥ずかしい。

「あつ」

そう言えば、訊き忘れてた。

非常識な展開の連続で、スツカリ忘れてた。

「あの……」

「何じゃ？」

黒の女生徒の顔は、まだ近い。指も、俺の顎に触れたままだ。

美女とこんな超至近距離で話すのは初めてだから、緊張と興奮でどぎまぎする。

「貴女は、名前は何て言うんですか？」

「妾か？ 妾は羽衣狐はねころもねじゃ……！」

お父さん、お母さん、ついでに弟よ。俺は、羽衣狐の百鬼夜行に就職しました。

二ノ怪：奇策（後書き）

次回：対面

「人間を百鬼夜行に入れるなど、正気ですか羽衣狐様!？」

「何あの目玉オヤジ!? キモ恐っ!」

「この人間は、妾の下部じゃ。手を出す事は許さんぞ……!」

三ノ怪：対面

鬼との壮絶な死闘を終えた俺は、黒の女生徒——羽衣狐の後を歩いて廊下を進んでいた。

さつき居た部屋を見た時にも思ったが、この家は相当な金持ちが住んでるようだ。いや、部屋や廊下の広さと内装から察するに、屋敷と言った方が正しいか。床は赤いカーペットで、幅広く長い廊下の壁には高そうな額縁に様々な絵が飾られてる。俺は芸術には疎いが、多分凄いだろ。どうでもいいけど。

え？ さつきの部屋で戦った鬼は、どうしたかって？ 部屋に置き去りにしてきたよ。いやいや、俺じゃなくて羽衣狐が「放っておけ」と言ったから、鬼を残して部屋を出たんだ。一応、俺が加害者で罪悪感もあったから、大丈夫なのか訊いてみた。すると羽衣狐は、「放っておけば勝手に回復する」と何とはなしに言った。いやいや、アンタは女だから解らないだろうけど、キ・タマ潰されるのってメチャクチャ痛いんだぞ？ 潰した本人の俺が言うのもなんだが、少なくとも同じ男として奴の痛みは解る。俺もガキの頃、鉄棒にキ・タマぶつけて想像を絶する激痛を味わったからな。急所をやられて重体な鬼を放置プレイするなんて、羽衣狐はドSだな。

——鬼さん、ごめん。

俺は心の中で、いまだ苦痛に悶えてるであろう鬼に謝った。

それから俺は、前を歩く羽衣狐に声をかけた。

「あの、羽衣狐様」

「何じゃ？」

振り返らず、前を向いたまま羽衣狐は返事をした。

「その、何処に行くんですか？」

「広間だ。これから妾は夕食だからのう。お前も腹が空いたろ？」
「は、はい」

そっぴや、夕食まだだったな。

食わしてくれるなら、有り難く頂くとするかね。

それから少し歩いて、突き当りに扉が見えてきた。あそこが広間か、と思つてると羽衣狐が扉を開けた。しっかし、扉も派手と言うか豪勢なデザインだな。俺だったら、そんな扉作らせるより別な事に金使うね。

開かれた扉から中に入ると、中は薄暗かった。さっきの部屋といい、何で充分な明かりを点けないんだよ。妖怪だから、暗い所が好きなのか？

俺が、そんな疑問を抱いた時だった。

「フェツフェツフェツ……！ 羽衣狐様、お食事の用意が出来ております」

「うおおっ！？」

部屋の奥から聞こえた声の主を見て、俺は驚愕して後ずさった。薄暗い部屋の奥に、とんでもなく不気味な奴が居るのだ。縦長に大きな頭に大きな目を備えた、異形の老人だ。顎に生えた白い髭を弄り、幾つか歯の欠けた口を開いて、しおれた笑い声を出してる。

「何あの目玉オヤジ！？ キモ恐っ！」

キモ恐老人を見て、俺は声を上げた。

いや、マジでキモくて恐いんだって！ ホラー映画に出て来る化け物を具現化させたような奴でさ、ぶっちゃけた話、さっきの鬼より恐い。あんなのが存在するなんて、マジであり得ない。絶対認めねえ！

「塵地蔵か」
みちじじいぞうじ

動揺しまくる俺の前で、羽衣狐が呟いた。

塵地蔵——ソレが、あのキモい老人の名前か。つーか、あの見た目マジでどうにかならねーの？ 正直、吐き気がするんだけど。ここまで他人をキモいと思ったのは、生まれて初めてだ。

物凄く俺が引いてると、キモ老人が俺に気付いた。

うわっ！ 目が合っちゃまった！ キモッ！

「おや？ 羽衣狐様……その男は……」

「余興に捕えた人間だ。なかなか面白いのでな、妾の百鬼夜行に加える事にした……！」
わらわ

「フエツ!？」

羽衣狐の言葉に、キモ老人は驚いて変な声を出した。

いや、驚く気持ちは解るけどな。俺だって、何の取り柄もない人間を妖怪の群れに入れて、何の意味があるのか疑問に思ったからね。うん、アンタが驚くのは解るけど、キモいから消えてくれ。

「羽衣狐様!」

「うおわあああああああつ!？」

突然の声パート2に、俺は驚いて尻餅をついた。

いや、正確には声ではない。俺が度肝を抜かしたのは、声と共に出てきた“モノ”に対してだ。その出てきた“モノ”ってのは、広間を埋め尽くさんばかりの沢山の妖怪達だ。大小、様々な形をした妖怪達が、所狭しと広間に集まっている。

信じ難い光景に、俺は圧倒され、頭は混乱して口を金魚のようにパクパク動かしてた。ここでも失禁しなかったのは、まさに僥倖だ。
けうじやう

ろ。自分で自分を褒めてやりたいが、今の俺にそんな余裕は全く無かった。

つか、お前等どっから湧いて出た？

「人間を百鬼夜行に入れるなど、正気ですか羽衣狐様!？」

群れの中の一体の妖怪が、俺を加える事に異を唱えた。

「妾が決めた事だ。意見する事は許さん」

「人間など、喰らうてしまえばよいではないですか！」

「女では無いが、羽衣狐様の為にその生き肝を奪つてやるつぞ！」

羽衣狐の言葉を無視して、大多数の妖怪が俺を殺そうと殺気立ってる。

「ヒイイイ！」

俺は涙目で、情けない悲鳴を上げた。身を震わせて、体全体で怯えを表す。妖怪の群れを見た時に腰を抜かしたから、逃げる事も出来ない。

——殺される殺される殺される殺される殺され
る殺される殺される殺される！

受け入れられない“死”を悟った俺は、心中で叫び続けた。恐怖と絶望で、胸中は荒れ狂ってた。

食事の内容は、俺のようだ。俺は生贄として、妖怪達に喰われるんだ。

キツく目を閉じて、迫りくる妖怪を視界から消した時だった。

「やめんか！」

一際大きな声が、広間に上がった。

いつまで経っても“死”が来ないので、俺は恐る恐る目を開いた。目の前まで迫ってた妖怪が、怯えた様子で後ろを振り向いてる。妖怪の視線を追うと、羽衣狐が居た。

腰に手を当て、威圧感を発して妖怪達に言った。

「この人間は、妾の下部しもへじゃ。手を出す事は許さんぞ……！」

鋭い眼光が、手下の妖怪達に向けられる。

「は、はい……！ も、申し訳ありません……！」

俺を襲おうとしてた妖怪が、蒼ざめた顔で身を引いた。その様子は、さながらベ●ータに怒鳴られたナ●パのようだった。

周囲を見回すと、他の妖怪達も沈黙して室内は静まり返っていた。羽衣狐の睨みと言葉だけで、広間に居る妖怪は全員おとなしくなったのだ。

流石、百鬼夜行の主なだけある。頂点に立つ貫禄ってヤツを見た気がする。

——カ……カッコイイ……！

沢山の妖怪を黙らせた羽衣狐を見て、俺は感動した。美人でカッコイイ女って、ホンット憧れちゃうよ。

妖怪達に背を向け、羽衣狐が手を差し伸べてきた。

「驚かせてすまなかったのう。立てるか？」

「は、はは、はい」

ヤッベ、嬉しさのあまり涙が出そうだ。差し伸べられた手を掴んで、俺は何とか立ち上がった。

俺を助けてくれた羽衣狐が、まるで天使のように見える。

「あ、あの……ありがとうございます……！」
「礼など要らぬ。先ほども言っただろ？ お前は、妾のおも——いや、大事な下部じゃからな」

——オイイイイイイ！ 今この人、おもちゃって言いそうになったぞ！ 明らかにおもちゃって！ アレか？ 余興のおもちやですか、コノヤロー！ さっきの俺の感動返せっ！
激しい怒りを憶えたが、何とか口には出さずに抑えた。理由はどうあれ、羽衣狐は俺を助けてくれた命の恩人だし、妖怪のボス相手にツツコミをする度胸も無い。ツツコんだ瞬間に殺されるのがオチだ。

「さて、それでは食事にするぞ」

はい、と頷いて俺は羽衣狐の後をついていった。

*

——たまんねえ。

異議を唱える妖怪達を黙らせた後、俺と羽衣狐は夕食を始めた。
飯食うのはいいんだけどさ、部屋の空気が最悪なんだよ。

この部屋の空気、雰囲気、マジでたまんねえ。席に着いてる俺達を囲むように、妖怪達が広間にまだ居やがる。羽衣狐と一緒に食事してる俺を、目を鋭くさせてガン見してんだ。隠そうともしないで敵意剥き出しにして、俺を威圧してきやがる。連中の敵意が、肌にビシビシと嫌でも伝わってきやがるんだ。

ダメだ。ダメダメ。まるでダメ。こんな空気は、とてもじゃない

が耐えられねえ。まるで、ライオンの檻の中に武器も何も無しに放り込まれたようなモンだ。いや、今俺を囲んでるのはライオン以上におっかない妖怪の群れだ。ライオンの方が、まだ可愛いかもな。

妖怪は、人間の事を見下してる。その人間が、妖怪の群れである百鬼夜行に加わっただけでも気に食わないだろくに、羽衣狐が俺を庇った事で、更に嫌悪感が増してるに違いない。向こうは、間違っても俺を仲間だなんて思っちゃいない。寧ろ、その逆だ。鬱陶しい邪魔者、と睨んでるだろうな。元々他人と接するのが苦手な俺だ。連中との間にある溝を埋めるなんて、絶対に無理だ。

こんな状況じゃあ、食い物も喉を通らない。連中に睨まれ続けて、食欲も失せちゃった。これなら、食堂で一人ボソボソと飯食ってる方が遥かにマシだ。一人で居る方が、楽だ。

「ん？ どうした人間？ 食が進んでおらんぞ？」

「え？」

手が止まってる、隣の席に居る羽衣狐に声をかけられた。

「お前の口には合わないか？」

「ああ、いえ、そんな事は……っ!？」

羽衣狐と喋ってる時、俺は寒気を感じた。

妖怪の中には、別の理由で俺を疎んでる奴等が居る。

ソレは、俺が羽衣狐と隣同士で食事してる事だ。要するに、俺に嫉妬してんだよ。いきなり現れた人間に、羽衣狐の隣を奪われて不愉快に思ってるんだ。特にどす黒い気配を漂わせてるのは、あのガキだ。両手で髑髏を持った女の子。小柄だけど、髑髏持ったり、目が蛇つぽかったり恐い要素があるんだよ。しかも、さつきから「お姉様を汚らわしい人間なんか汚らわしい人間なんか汚らわしい人間なんか汚らわしい人間……」と呪文のようにブツ

ブツ咥いてんだぜ？ 超恐えよ！ 何？ ヤンデレ？
歸りてえ。俺とコイツ等とじゃ、住む世界や種族やら何から何まで違い過ぎる。

無理だ。個性的と呼ぶには、あまりに強烈過ぎる妖怪達と一緒に過ごすなんて絶対に無理だ。

嗚呼、ガキの頃の給食の時間が物凄く恋しい。

*

「殺されるかと思った……」

「ははは！ お前は本当に恐がりな奴じゃのう！」

お言葉ですが、羽衣狐様。いきなり大勢の妖怪に囲まれて、ビビらずに飯食える人間なんて何処探しても居ないと思いますよ？ つか、もしかして羽衣狐って、俺が怯えてる様子見てて楽しんだた？ この女なら可能性あるぞ。

夕食を終えた俺と羽衣狐は、広間を出て廊下を歩いてる。広間を出る瞬間まで、妖怪達に睨まれて超恐かった。よくぞ生き残った！ 凄いで！ 偉いで、俺！ 皆も褒めてくれていいよ？

足音を響かせながら、俺は羽衣狐に続いて階段を上がっていく。途中、屋敷のメイドらしき女性と出会った。羽衣狐には劣るが、なかなかの美人だ。軽く会釈をして、二階に上がった。また廊下を歩き、一つの扉の前に着いた。

先頭の羽衣狐の手で、扉が開かれた。この部屋も、中は薄暗い。まあ、薄ら予想はしてたけどね。薄だけに……くだらね！。

「入るが良い」

羽衣狐に促され、俺も入室した。

それなりの広さで、部屋の中にはベッドが一つ置かれていた。天蓋付きのシングルベッドで、囲むカーテンも全てが黒一色に染まってる。お姫様ベッドと言われるヤツの黒バージョンだ。

「この部屋に人を招き入れるのは、お前が初めてじゃな」

「あの、ココは……？」

「ココか？ ココは妾の部屋じゃ」

「えっ！？ は、羽衣狐様の！？」

言われて俺は、ベッドに目を戻した。

確かに、あの黒のベッドは羽衣狐が使いそうなデザインだ。ヤベッ、美女の部屋と解った途端に何か緊張してきた。

そんな俺の様子を見て、羽衣狐は小さく笑いを零す。

「ふふふ。やはりお前の反応は面白いのう。見てて飽きぬ」

「ぐっ……！！」

この女狐め、さては俺の困った様子を見る為に自分の部屋に連れて来たな。

「そう怒るでない。お前を、妾の部屋に泊まらせてやるのだからな」

「は、はあ！？」

な、何だって！？ こ、この女、今何て言った？ 妾の部屋に泊めてやるだと？ ふ、ふんっ！ もう、そんな手には引く掛からんぞ！ そう言つて、俺の動揺を楽しもうって魂胆だろう。

お前の考えは、全てズバツと来世までお見通しだ！

「お前用に部屋を用意してもよいのじゃが、まだ納得しておらん者

もある。一人にさせたら、あ奴等に殺されてしまつかもしれんからのう」

「は、はは……。なーる……」

そっという事かい。

そりやまあ確かに、俺の事を快く思つて無い奴は沢山居るだろうよ。それに、消そうと思えば俺なんか簡単に消せるし、ごまかす事も出来るだろうしね。事故に見せかけるとか、事故に見せかけるとか、事故に見せかけるとか……事故に見せかけるとかさ。

「じゃが、妾の側に居ればあ奴等も手は出せぬ。安心するがよい」

「は、はい。つて言うか、そもそも羽衣狐様が俺を連れて来なきゃ、こんな事には……」

「何か言つたか？」

「いいえっ！ 何にもございせんっ！」

笑顔でごまかして、何とか命を繋げた。

——危ない危ない。危うく自分から殺されに行くところだったぜ。

「つて何やってるんですか!？」

「ん？」

安堵の溜め息をついた俺の前で、羽衣狐がとんでもない行為をしていた。

男の俺の前で、着ている黒のセーラー服を脱いでるのだ。しかも、涼しい顔でな。

「今日はもう寝るから、服を脱いでおるのじゃ」

——ヤバいやバいやバいや！ 何がヤバいって、黒のセーラー服を脱いだ事で羽衣狐の白い素肌が露になつてんだよ！

幸い下着はまだ付けてるから大事な所は隠されてるけど、ソレ以外は全部曝け出してる。細い四肢に、綺麗なくびれ、程良く膨らんでる二つの胸、窓から入ってくる月明かりに照らされた身体は芸術の域に達してると言っても過言ではない。黒のセーラー服を脱いだ事で、膝の位置まで届きそうな黒の長髪が妖しく映えている。妖艶な雰囲気と共に、神秘的な魅力すらも醸し出してるように見えた。こんな事言うのは柄じゃないけど、この世のモノとは思えない美しさに、俺は完全に見惚れていた。

すると羽衣狐は、ブラジャーとパンツまで外した。

「いいっ！？」

落ちたブラジャーとパンツを見て、思わず俺は声を上げた。

そして、俺に背中を向ける羽衣狐を見る。ブラジャーとパンツが外されたと言う事は、つまり大事な部分を隠す物が無くなったと言う訳だから……。つまり、全裸！ 美女の全裸っ！ ヤバいやバいや！ マジでヤバいや！

羽衣狐は顔だけ振り向いて、興奮高まる俺を見てニヤリと笑った。

「そんなに見つめるでない、この助平が」
「ぐあっ！」

自分から服を脱いどいて、それはないんじゃないの？ そんな事されたら、男だったら誰だって釘付けになるっつーの！ でも、顔が可愛いから許す！

「妾はもう寝る。人間、服と下着を片付けておけ。ふあ」

欠伸を一つして、羽衣狐はベッドの中に潜り込んでしまった。

俺は羽衣狐が脱いだ服の前で、半ば茫然と立ち尽くしてた。

「ややあつて、俺は疲れを吐くように溜め息をついた。まったく、ど
このお嬢様だよ。」

仕方なく俺は、言われた通りにセーラー服を片付ける事にした。

床に脱ぎ捨てられたセーラー服を拾い、俺は無言で眺める。心の奥底から、何かの衝動が湧き上がってくるのを感じた。今さっきまで羽衣狐が着てたセーラー服を見つめ、ゴクリツと生唾を飲み込む。一度ベッドに目を向け、羽衣狐が寝てるのを確認した。

——ちよつと……ちよつとだけだ……！

自分に言い聞かせながら俺は、セーラー服に顔を近付けた。

「っおおおっ！ スゲー良い匂い……！」

いい匂いに顔が緩んで、羽衣狐のセーラー服を堪能する。こんな良い匂いを俺は、今まで嗅いだ事がない。

そう思った時だった。

何かの気配を感じた俺は、ハッと我に返った。

一気にブワツと冷や汗を流し、油の切れたロボットのような鈍い動きで、恐る恐る後ろを振り返った。

視線の先には、ベッドから顔を覗かせる羽衣狐が居た。

目が合った瞬間、俺は頬を引き攣らせた。多分、この世の終わりのような顔をしてるだろう。

対する羽衣狐は、悪魔のような笑みを浮かべ、言った。

「この変態め」

——くおおおおあああああああああああああああ
あああああああああああああ！　嵌めやがったな、女狐
エエエエエエエエエエエエエエエエ！　利用したな
！？　俺の男心を利用したな！？　女狐なんて生ぬるい！　この女
は悪魔だ！　悪魔悪魔悪魔！　くつそオオオオオオ！　帰る！

僕もう阿部君の家に帰るっ！

俺が人としての道を踏み外し、悶えた夜だった。

明日、俺を快く思っ
て無い妖怪に自分を殺してもらおう、と思っ
た。

三ノ怪：対面（後書き）

次回：相剋

羽衣狐の進撃に初参加する『俺』

封印の地で会うは、陰陽師と最大の妖怪！？

四ノ怪：相剋

次第に意識が覚醒してきて、俺は目を覚ました。

眠い目を擦り、欠伸をかきながら上体を起こす。寝起きで、まだ少し頭がボーッとしてる。ボリボリと頭を掻き、自分が居る場所を見回して俺の部屋じゃない事に気付いた。

「あれ？ 何処だココ？」

首を傾げ、昨日の記憶を辿る。

自堕落な生活を送ってたら、就職するまで帰ってくるなと家を追い出され、思いつきで京都に来て、街中で羽衣狐に出会って、何故か鬼と戦って、何とか生き延びた俺は羽衣狐率いる百鬼夜行の一員になってしまった。ああ、こんな感じだったな。つーか、マジで夢オチじゃないのか。夢にしちゃあ、感覚や意識がハッキリしてたからな。

ここは落ち込むべきか、別に気にしないべきかどっちだろう。妖怪軍団の仲間入りなんて、デンジラス以外の何物でもない。でも、羽衣狐と一緒に居られるのは悪くないんだよな。

あ、そう言えばココ、羽衣狐の部屋だった。俺一人じゃ危ないって事で、一緒に部屋に泊まったんだっけ。んで、羽衣狐は先にベッドに入ってセーラー服を片付けようとして……ああ、いや、これ以上は思い出さないようにしよう。確か、悲劇しかなかったような気がする。

過去の悲劇を記憶の奥底にしまって、俺はベッドに顔を向けた。ベッドの膨らみを見ると、羽衣狐はまだ寝てるようだ。

うーん、やる事が無くて暇だ。眠気も失せたし、二度寝はちょい無理かな。だからと言って、部屋を出るのは危険だ。部屋を出た瞬間、妖怪に殺される恐れがあるからな。

どう暇を潰そうか悩む俺は、もう一度ベッドに目を向けた。

羽衣狐の寝顔——超見てえ。

昨夜、俺は女狐の策略に嵌められてしまった。あの時は、マジで死ぬ事を考えたよ。でも、やっぱり死ぬのは嫌なんで、とりあえずもうちよい生きる事にした。

生きている内にしか出来ない事があるからな。

例えば、羽衣狐の寝顔を見るとかね。

——よしっ！ 昨夜のささやかな仕返しも兼ねて、『羽衣狐の寝顔覗き作戦』を決行するぞ！

決意を固めた俺は、早速行動を開始した。抜き足差し足忍び足で、足音を極力殺して羽衣狐が寝てるベッドに歩み寄る。気分は、敵地に潜り込んだスパイだ。ある意味、今までで一番緊張してるかもな。つか、羽衣狐に言われたように俺、変態になってねーか？ ヤベツ、ちよつと落ち込む。元々自分の事が嫌いなのに、変態の疑いが出た事で更に嫌悪感が増してきたよ。

ああ！ もう止め止め！ 朝っぱらからこんなテンションでどうすんだよ！ アレだ！ 羽衣狐程の美人の寝顔を見たいと思うのは至極当然の願望だ！ 俺は何も悪くないし、何も間違ってるない！

無理矢理、自分を正当化させて俺はミッションを再開した。気を取り直して、ベッドに静かに接近する。近付くにつれ、緊張と興奮が高まって心臓の鼓動も早まる。早鐘のような鼓動音で、羽衣狐が起きるんじゃないかと若干不安になった。だが、羽衣狐が起きる様子は無い。まあ、普通は心臓の鼓動音で起きたりしないよな。

緊張のせいかな、不安になりすぎてたようだ。不安を振り払うように、俺は小さくかぶりを振った。

そして、とうとうベッドの真横に辿り着いた。ここまで辿り着くのは、大変だった。主に気持ちの面でね。相手は、あの羽衣狐だから内心バレやしないかと不安だったよ。

しかし、ここまで来たらもう俺のもんだ。その寝顔、覗かせていただきやす。

それにしても、小心者の俺が寝顔とは言え、よく覗きなんて実行したな。人間の願望ってヤツは、凄いな。今回は衝動を抑えられなかったよ。あつ、昨夜もか。

まあ、昨夜の事は置いて、早速羽衣狐の寝顔を見ようじゃないか。失礼します。

ベッドを囲む黒カーテンの隙間から、中を覗いた。

ソコには、黒髪の少女が眠っていた。小さな寝息を立てて、気持ち良さそうに寝ている。

——ヤツベ、マジ半端ねえ！ 羽衣狐の寝顔たまんねえ！

女の寝顔って、皆こんなに可愛いのか？ 否、羽衣狐だから可愛いんだ！ 何かもう、可愛いと綺麗が合わさった新しい魅力がうまく出てるんですけど！ 写メ撮って永久保存してエエエ！ ケータイ何処だ？ ケータイ！

羽衣狐の寝顔に興奮する俺は、急いで携帯電話を探す。が、服のズボンには無かった。そうなるに残る場所は、一つしかない。荷物を入れてあるバッグだ。

俺が寝てた場所に、バッグが置いてあるのが見えた。

羽衣狐の寝顔を撮りたい欲望に突き動かされ、一旦ベッドから離れようとした時だった。

「何をしておる、人間？」

声を聞いた瞬間、サーツと顔から血の気が引いた。顔は苦笑いで固まり、恐る恐るベッドを振り返る。

体を起こし、黒の掛け布団で白い肌を隠して、妖しい笑みでこちらを見てる羽衣狐が居た。

何？ このデジャヴ？

「女子おんなの寝顔を覗くとは、なかなか良い趣味じゃのう……変態」

——「つぎやああああああああ！ ま、ま、また嵌められたアアアア！ こんな都合よく起きる訳ねーもん！ この女狐！ 女狐のくせに、狸寝入り決め込んでやがったな！ ファツキン！ 羽衣狐の二度目の策略に嵌まり、俺は頭を抱えて悶えた。こんな辱しめを受けたのは、生まれて初めてだ。それにしても俺って、昨日の今日で全然学習してねえな。馬鹿だよ、馬鹿。」

「変態。いつまで悶えている？ 早く妾わらわの服を持ってこぬか」
「呼び名が人間から変態に！？」

ちよっ……それは無いでしょう！ それはあんまりですよ、羽衣狐様！ 人として、ソコまで堕ちたくねえっす！

「朝から騒ぐでない。早く妾の服を持ってまいれ」
「……はい」

ちくしょう。やっぱり覗きなんかするんじゃないかった。良い子の皆は、寝顔だろうが風呂場だろうが、覗きなんかしちゃダメだぞ？ 絶対ロクな目に遭わないから。俺との約束ね？ 特に、黒髪ロングの美人には気を付ける。

またも上げて落とされた俺は、トボトボと羽衣狐の着替えを取りにいった。壁にハンガーでかけられてるセーラー服を取り、下着も用意して羽衣狐の元に戻る。俺って、マジに雑用係だね。

「はい。着替えをお持ちしました」
「うむ。では、着せるがよい」
「はい？」

羽衣狐の言葉に、俺は耳を疑った。
片眉を上げる俺の前で、羽衣狐は笑みを崩さず言う。

「妾に服を着せよ、と言ったのだ。変態のお前には、この上なく嬉しい仕事じゃろう?」

「ええええ!?!」

――マ、ママママ、マジでかアアアアアアアアアア!?

衝撃の内容に、俺は内心にシャウトした。俺の聞き間違いなんかでは無かった。

「い、いい、いいんですか?」

「妾がしろと言っている。ほれ、早くするがよい」

羽衣狐は、ベッドから降りて俺に背を向けた。

無防備に背中を向ける羽衣狐。メチャクチャ興奮するじゃねーか! 俺の息子も、さっきからビンビンよ? あっ、ヤベツ、下ネタ。テンション上がる俺だったが、ハツと思った。もしかしたら、コレも俺を嵌める罠じゃないか?

「変な邪推はよせ。早く着替えさせてくれねば、妾は風邪を引いてしまう」

コ、コイツ、俺の心が読めるのか? いや、いつまで経っても着替えをしないから、俺が戸惑ってる事を察したのか。

ええい、上等だよ! やってやろうじゃんか! 確かに、この上なく嬉しい仕事だよ! 羽衣狐の着替えが出来るなら、変態って呼ばれても構わねーよ! この時だけはね!

決意を固めた俺は、最高に緊張しながらも羽衣狐を着替えさせた。

着替えは、終始落ち着かなかった。セーラー服なんて手に取った

事も無いから、結構苦戦したよ。着替えの間、俺の様子を見てた羽衣狐はクスクス笑ってたしさ。興奮と恥ずかしさ、緊張等々、色んなモノがごちゃ混ぜになって、あんまり羽衣狐の身体を堪能出来なかった。

残念無念。

「お前は本当に可愛い奴じゃのう」

着替えの時の俺を思い出して、羽衣狐が笑う。

お願いだから忘れて下さい。僕もう、ホント恥ずかしいですから。それから、僕は全然可愛くないです。

艶やかな髪を翻して、羽衣狐は扉に向かう。

「さて、食事を済ませたら行くぞ」

「え？ 行くて何処にですか？」

羽衣狐は足を止め、振り向いて俺に言った。

「京を闇で包む余興じゃ……！」

影のかかった羽衣狐の妖しい笑みを見て、背筋に悪寒が走った。

この時、初めて羽衣狐の妖怪としての恐ろしさを垣間見た気がした。

*

夜となった京都は、今とんでもない事になってます。

羽衣狐率いる百鬼夜行が向かったのは、相剋寺そうこくじと言う場所だ。何

でも、陰陽師が仕掛けた四百年続く結界を破る為とかで、百鬼夜行率いて攻め込んでる。

酷^{ひで}え。

こいつは戦いなんかじゃなくて、一方的な虐殺だ。相手は陰陽師で特別な術を使ってるけど、どうも防御のみのようで攻める様子がまるで無い。しかも、妖怪側には何故か武器を持った陰陽師が居て、侵攻に参戦してる。言葉じゃ上手く表現出来ない禍々しい大きな剣のような武器を持ってるのだが、その使い手も姿が恐ろしい。本来は普通のイケメンなんだろうが、手に持つ武器のせいか顔や体に不気味な筋のようなモノが浮き出でて気持ち悪い。妖怪以上に妖怪みたいな奴だ。羽衣狐に話を訊くと、ココを攻める前の鹿金寺^{ろくぎんじ}って封印の地で相手した陰陽師だそうで、塵地藏って例のキモ老人に心の闇に浸け込まれたそう。要するに、憑りつかれて利用されてんだ。あんなキモ老人に憑りつかれるなんて、想像しただけで鳥肌もんだよ。

というか、目の前の惨状が既に鳥肌を超えて、

「オボエエエエエエエエ！」

我慢出来ずに、とうとう吐いちゃった。胃の中の物が、ドバドバと床にぶちまけられる。

気持ち悪い。

「大丈夫か、人間？」

側に居る羽衣狐が、顔を覗かせてきた。

こんな惨状目の当たりにして、大丈夫な訳ねーだろうが。人が死ぬのを、殺されるのを初めて見た。今までの人生で、最高に気分が悪い。

「だ……大、丈夫、じゃ、ない……です……」

「そうか。一緒に余興を楽しもうと思って連れてきたのだが、お前には刺激が強過ぎたか」

残念そうに言う羽衣狐を見て、初めて嫌悪感を抱いた。

他人とは言え、人が目の前で惨殺されるのを見て楽しめる訳ねーだろ。刺激が強いとか、そういう問題じゃない。

妖怪と人間の違いだ。コイツ等は、人間を殺す事に何の躊躇も無いし、人間をゴミのようにしか見てない。だから平然と、中には楽しそうに殺しが出来るんだ。

ああ、気持ち悪い。

[illegible]

俺達人間とコイツ等妖怪は、世界が違う。

ちよつと前まで、浮かれてた自分が馬鹿みたいだ。情けなくて殺したくなる。

「塵地藏……勝手に出る事は許さん……。滅多に見られん陰陽師同士の対決じゃ……。幕をおろすなら、キツチリとトドメを刺せつ……。！」

俺が気分を悪くさせてる間に、憑りつかれた陰陽師に異変があったようだ。

見ると、陰陽師同士が戦ってたみたいで、片方は黒髪の男だ。目

つきが悪くて不良のような陰陽師だ。どうやら足をやられて、上手く立てないらしい。

憑りつかれてる方の陰陽師は、体から塵地蔵の顔が左肩付近から出てる。相変わらず気持ちの悪いジジイだ。ただでさえ現状に気分悪くしてるのに、お前のせいで吐き気が戻ってきやがる。頼むから、陰陽師の代わりにお前が死んでくれ。

憑りつかれてる陰陽師に目を戻すと、口から血らしき液体が垂れてる。外傷は特に見られないから、内臓の何処かに痛手でも負ったか？

そんな陰陽師を操って、ジジイが黒髪の陰陽師にトドメを刺そうとした時だった。

「またんかい！」

声が上がリ、皆の動きが止まった。

誰かと思って声の出所に顔を向けると、女の子が居た。短い黒髪で、陰陽師の格好をしてる。こんな若い娘も陰陽師なのか？ 恐い顔して、完全に怒ってるな。

「今すぐ、秋房義兄ちゃんから出てけっ！」

叫ぶや女の子は、複数の札を周囲に出した。指先を少し切り、傷口から出る血を札に滲ませる。

「式神破軍っ！」

女の子が発した言葉を聞いた瞬間、俺以外の全員の顔つきが変わった。羽衣狐の顔からも、笑みが消えた。

そして、女の子の背後にソレは現れた。陰陽師の服に身を包んだ沢山の骸骨が、煙の中で立ち尽くしてる。コレも陰陽師の術なのか

？ それにしては、何か不気味な術だな。

「いくで！ 式神破軍！」

とうとう女の子が出した得体の知れない術の攻撃が始まる……と思ったが、何も起こらない。

「えっ！？」

術者の女の子も、慌てて後ろを振り返る。背後に並んでる骸骨集団は、全くの無反応でピクリとも動かない。理科準備室に置かれてる模型のように、ただ突っ立ってるだけだ。

「ちよっ……なんでや！？ 何で動かんのや！？ 動けや破軍！」

ああ、ああ、予想外の展開に完全に焦っちゃってるよ。

って、暢気に観察してる場合じゃねーだろ！ あの娘もあの娘で、敵に後ろ見せちゃダメだろ！

「危ない、後ろ！」

「えっ！？」

慌てて俺が上げた声に反応して、女の子が前に向き直る。

目の前には、武器を振りかぶる憑りつかれた陰陽師が迫ってた。

「うわっ！」

身を低くして、間一髪で女の子は憑りつかれた陰陽師の横薙ぎの一撃を避けた。

あつぶねー！ 見てるこっちまでハラハラしちまうぜ！

「おい、人間……！」
「ハッ……！」

後ろからドスの利いた声をかけられ、俺は自分がしでかした行為を後悔した。

恐る恐る振り向くと、一体の妖怪が居た。顔左半分を卒塔婆のような板で何枚も重ねて隠してる妖怪——茨木童子^{いはらぎどうじ}だ。鋭い隻眼で、射抜くように俺を睨みつける。

「なに陰陽師のガキを助けてんだ……？ ああ？ 殺されてえのか、カスムシ野郎……！」
「いえ、その……！」

殺される！ 今度こそ、完璧に殺される！
そう思った時だった。

「止せ、茨木童子」
「羽衣狐……」

側に立つ羽衣狐に制止され、茨木童子も一旦動きを止めた。

「簡単に死なれては、折角の余興がつまらなくなってしまう。今回の人間の行為は、見逃してやれ」

妖怪の主である羽衣狐の言葉とあつては、茨木童子も逆らえないようだ。納得いかない様子ながらも、身を引いた。

俺は京都に来て、何回死にかけた？
安堵の溜め息をついた直後、大砲でも撃ったような轟音が響いた。全員の注目が、音の出所に集まった。さっきの女の子の陰陽師が、

左手に髑髏をハめてる。その先には、憑りつかれてた陰陽師が倒れてる。よく見ると、ついてた塵地蔵が無くなってる。さっきの轟音と現状から察するに、あの女の子が倒したようだ。

「何があつたんだ……？」

俺が驚いてると、羽衣狐が前に出てきた。

「その顔……四百年間、片時も忘れはしなかったぞ……！ 秀元っ……！」

秀元って誰だ？ と思った時、女の子の方から返事がきた。男の声で――。

「羽衣狐か……。これはお久しゅう。えらいカワイらしい寄り代やなあ……」

女の子の後ろに、骸骨陰陽師と同じ恰好をした男が居た。一言で表すなら、イケメン陰陽師だ。骸骨集団の中で、唯一人間らしい外見を維持してる。

羽衣狐の言った四百年って言葉が気になるが、何者だ？ まあ、友好的な関係じゃない事は、場の重苦しい空気で解るよ。

「どうや？ 人と妖の四百年ぶりの再会を祝って、盃でも酌み交わしたりは……」

秀元と呼ばれた男の誘いに、羽衣狐は無言で返す。そのせいか、場の空気が更に重圧を増した気がする。正直、居合わせてる俺は息苦しいです。

「しないか、やっぱり」

羽衣狐の反応は、秀元も予想してたようだ。つか、こんなおつかない女を酒に誘おうとするなんて、アンタ良い度胸してるよ。尊敬する。

「どという小細工だ？ 人の寿命などせいぜい八十年……四百年後の未来で再会など、ありはしないのだ」

なるほど。頭の悪い俺は、ようやく理解した。あの秀元って男は、四百年前に死んだ人間なんだ。つまりは、幽霊ってヤツだ。って、ゆゆゆ、幽霊！？

幽霊と解った途端、俺の中で恐怖が込み上げてきた。臆病者にとつて、幽霊は天敵なんだよ。

「そうか。コレはお前等の術だな？ 四百年前の妾を捕えたのも…

…」

「そうや。コレが召喚式神“破軍”……！ キミを破滅に導いた陰陽術や」

はーん、なるほどね。また一つ謎が解けたぞ。羽衣狐と秀元が友好的じゃないのは、単に妖怪と陰陽師って関係じゃなくて、それよりも深い因縁があるんだ。昔、秀元に倒されたとか、そんな感じだろう。

俺が一人で納得してると、秀元と目が合った。

「おや？ キミ、妖やのうて人間やね？」

「え！？ は、はあ、まあ……」

うおお！？ コイツ、この妖怪の群れの中で、一発で俺を人間と

見抜いたぞ！ 凄くね？

「驚いたで。まさか妖と人が一緒に居るとは……しかも、あの羽衣狐と一緒にとは意外やな」

そりやそうでしょうね。俺自身も信じられないし、よくまだ生きてるなって自分に感心までしてますよ。

掴みどころの無い笑みを浮かべて、秀元は羽衣狐に向き直った。

「どういつ風の吹きまわしや？ あんなに人間嫌ってたキミが、側に人を置くなんて……明日は雨、いや、槍でも降るんちゃうか？」
「余興に置いておるだけだ。深い意味は無い」

ですよねー。気まぐれに見つけて、俺を弄って遊んで楽しんでるだけですもんね。

ちよいと悲しい気分になった時、辺りを突如白い煙が覆った。出所は、術者の女の子だ。

「キミとやつても勝てん。ここは退かせてもらうで、狐ちゃん。人間の兄さんも元気だな」

イケメンスマイルで、仲間を連れて離脱する秀元。

逃げたのに、何かカッコイイじゃねーか。まあ、何はともあれ今夜の侵攻はコレで終わりだろう。正直、コレ以上目の前で人が死ぬのを見るのは、耐えられそうになかったからな。その点で言えば、秀元が陰陽師を引かせたのは有難かった。

「フェツフェツフェツ……！ 陰陽師の奴等、またアッサリと明け渡しましたなあ……！」

「うおおおおっ！？」

こ、この人を不快にさせる不気味な笑い声は！？

振り返った先には、地面から植物のように頭を生やしてくる塵地蔵が居た。うえゝ！ 気持ち悪っ！

「塵地蔵……生きていたのか。気持ちの悪い奴だな」

「チツ」

「貴女が死ぬまで、死ねませぬ。それはそうと人間、お主、今舌打ちしなかったか？」

「え？ そんな事してませんよ！ する度胸ありません」

ああ、舌打ちしたよ！ 何で生きてんだよ、キモジイ！ 一番死んでほしい奴が、気持ち悪く復活しやがってよお！ これほど他人の無事を残念に思った事はない。マジで残念だ！

塵地蔵の復活を非常に残念に思いながら俺は、羽衣狐達についていった。一つの建物に入ると、土が剥き出しの地面に杭のような物が刺さってるのを見つけた。アレが封印のようだ。ソレを羽衣狐が抜きとる。

今更だけど、俺って大変な事に加担してない？ いや、実際に何か協力とかした訳じゃないけどさ。

その時、杭を抜いた地面がモゴモゴと揺れ出した。揺れが大きくなっていき、穴から手足が出てきた。

「うおっ！？」

俺だけじゃなく、全員の注目が穴から出てきた手足に集まる。

「誰か封じられておったか」

一体の妖怪が言葉を発した直後、ソイツは出てきた。

穴から出てきたのは、巨大な化け物だった。まず目に飛び込んできたのは、腕だ。筋肉質な極太で、左右に二本ずつの計四本もある。そして般若のような顔、歌舞伎役者のような長い毛を垂らし、恐ろしさを体現したような化け物だ。コイツにこそ、妖怪と呼ぶに相応しいだろう。

穴から出てきた化け物に物怖じもせず、羽衣狐が近づいた。

「土蜘蛛つちぐもか……久しぶりだな」

土蜘蛛って妖怪か。いや、俺が見た限りじゃ土蜘蛛って言うより、鬼蜘蛛って方が合ってると思う。

だって、どう見ても顔が鬼なんだぜ？ メチャクチャ怖いよ。ヤツベ、小便ちびりそう。正直、今すぐにでも逃げ出したい。恐すぎて、逆に逃げれ無いんだけどね。

「あ？」

土蜘蛛が大きな目玉で、ギロリとこちらを睨んでくる。

——恐エエエエエエエエエエエエエエエエ！ 睨まれただけで、殺されるような感覚だよ！ コイツは、マジでヤバい奴だつて！ 絶対怒らせないようにしよう！

俺が心の中で、固く誓った時だった。

「デメエ……人間か……？」

「え……？」

人間と言う言葉で、俺は顔を上げ、土蜘蛛と目が合ってしまった。その瞬間、見えない重圧が降りかかり、足の力が抜けて膝が地面に着いた。

「人間……陰陽師……テメエ、よくもオレを封じやがったなあ」

「.....?」
「H H H H H H H H!?!」

オイイイイイ！　何か知らんが、コイツ勘違いしてないか？　俺は確かに人間だが、陰陽師じゃねーし、アンタを、いや貴方様を封じた覚えもございませんよオオオオ！

「待て、土蜘蛛！　そ奴は……！」

「オレの前に出るとは、イイ度胸だあ……！」

羽衣狐が制止しようと声を飛ばすが、土蜘蛛はまるで聞いてない。怒りで我を忘れた感じか？

もしかして、キレてらっしやる？

「潰してやるぜ、
ひきょうもん
陰陽師がアアアアアアア！」

「あああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ！」

完璧にキれてらっしやるウウウウウ！

拝啓、お父様、お母様、ついでに弟よ。

俺は羽衣狐の百鬼夜行に就職して、僅か二日目で殉職しそうです。

四ノ怪：相剋（後書き）

次回：間隙^{かんげき}

封印が解け、復活した巨大妖怪・土蜘蛛！

陰陽師と間違われた『俺』の運命は！？

五ノ怪：間隙

[illegible]

絶叫のような悲鳴を上げる俺に、巨大妖怪・土蜘蛛の拳が頭上から押し潰さんと迫りくる。

逃げたいが、先ほど睨まれた時に足が爆笑してて使い物にならない。例えば足の状態が正常だったとしても、迫りくる拳の速さと俺の足の速さじゃ相手の方が上なのは明白だ。

つまり、**完全な詰み。**
チエックメ

絶望に満ちた俺は、自分の死を悟った。今度ばかりは、助からな
いと思った。

しかし、俺に死は訪れなかった。

体に何か巻き付いたかと思つたら、急に後ろに引つ張られた。直後、土蜘蛛の拳が地面を突いた。小さな地震並の揺れが起きて、建物も衝撃でグラグラと揺れてる。

「おおおおおおお！？」

間一髪で助かった俺は、あまりの恐怖に完全に混乱してた。まともな思考が出来ないので、助かった自分の身に何が起こったのかも解らなかった。

そんな俺を正気に戻したのは、一人の女の声だった。

「やれやれ。手間のかかる下部だ」

「は、羽衣狐様！？」

振り向いた先に、羽衣狐が居た。スカートの中から伸びてる複数

の尻尾の内の一本が、俺の体に巻き付いて掴んでる。さつき俺を助けてくれたのは、羽衣狐だったのだ。あの一瞬で尻尾を伸ばし、体に巻き付け、引き寄せると言う一連の動作を目にも止まらぬ早業でやってのけ、俺を窮地から救ってくれたのである。

助かった安堵と救われた感謝から、俺は目から滝のように涙を流した。

「羽衣狐様あゝ！　ありがとうございます〜！」

「礼など要らぬ。妾のおもちやを他人に壊されるのが嫌なだけじゃ」
「もうこの際、理由なんてどうだっていいです！」

命が助かった事が大事なんだ！　今は、ソレ以外の事は求めねえ！

「それに安心するのは、まだ早いぞ」

「へ？」

「羽衣狐様！　建物がもちませぬ！　早く外へ！」

る●剣の般若のような奴が、外に出るように促す。羽衣狐に続いて、全員が建物の外に急いで出る。

その直後、建物の壁が轟音と共に壊れた。いや、中に居る奴に破壊された。埃や土煙が舞う壁穴から、土蜘蛛が姿を現す。口から白い息を吐き、不気味な存在感を放っている。

「逃げんじゃねえぞ、コラアアアアアアアア！」

土蜘蛛の大声は、獣の咆哮のように夜空に響き渡った。
大気を震わせる程の声で吠える土蜘蛛に、初めて羽衣狐は表情を険しくさせた。

「全く……お前も厄介な奴に目をつけられたのう」

「な、何なんですか、アイツ？」

「土蜘蛛……強者と闘う事のみを望む妖じゃ……！ 妾でも、あ奴を黙らせるのは骨が折れるぞ」

陰陽師との戦いでも常に余裕の態度をしていた羽衣狐が、この時は真剣な顔になっていた。それ程、土蜘蛛はヤバい奴なのだろう。実際、威圧感だけなら羽衣狐より上かもしれない。

珍しく羽衣狐が難しい顔をしてると、別の妖怪がやってきた。白髪に白髭で、黒の服を着こなした威厳たつぷりの男だ。腰には日本刀を差してある。

「鬼童丸か」
きどうまる

「羽衣狐様。その人間を土蜘蛛に殺させれば、この場は収まります。余興の道具ならば、また我等で探してまいります」

おい、待てやコラ！ この鬼童丸とか言うオッサン、何言いやがった！？ 俺を見捨てるつもりか？

「鬼童丸の言う通りだ。元々、人間のソイツが陰陽師と間違われたのが原因なんだしよ。切り捨てるいい機会だ」

茨木童子！ お前もか！？

幹部妖怪が余計な事を言い出したから、周りの妖怪どもも頷いて激しく同意してやがる。この調子でいくと、俺は土蜘蛛の暴走を止める為の生贄にされちまう。それだけは何としても阻止したいが、いかんせん俺が暴走の原因である事は事実だから意見する事が出来ない。

——ヤバい……！ 今度ばかりは回避不可能か？ このままだとマジに土蜘蛛の餌食になっちまう！ 嫌だアアアアアアア！ 死ぬにしても、せめて童貞を卒業してエエエエエ！

心中でシャウトする俺は、頭を抱えて夜空を仰ぐ。

「おらあ！」

そうこうしてる間にも、土蜘蛛は暴れ回ってる。奴を押さえようと妖怪が束になってかかっているが、まるで歯が立ってない。巨体に似合わない素早さで、腕を振り回せば妖怪が宙を舞って地面に落ちていく。

「雑魚に用は無え！ 陰陽師イイイイイ！」

怒りと闘争本能に任せて、土蜘蛛が突っ込んでくる。雑魚妖怪を蹴散らし、暴走列車の如く勢いで迫りくる。

見かねた鬼童丸が、腰の刀を掴んで駆け出した。

「チッ！ やめんか、土蜘蛛！」

「ああ？ 邪魔だコラッ！」

土蜘蛛が大きな拳を振るって、鬼童丸を潰しにかかる。ミサイルの如く迫り来る土蜘蛛の突きを、鬼童丸は横に跳んでかわす。しかし回避したのも束の間、二本目、三本目の拳が襲い掛かる。

複数の腕を持つ土蜘蛛は、攻撃の直後でも連続追撃が可能なのだ。そんな土蜘蛛の連続追撃を、鬼童丸は紙一重で避けて距離を縮める。刀の間合いに入った瞬間、鬼童丸が動いた。

「神速剣戟“うめのき梅木”！」

鞘から抜き放たれた刀は、目にも止まらぬ速さで土蜘蛛を斬りつけた。人間の肉眼じゃ捉えられない剣戟は、まさに神速の名に恥じない速さだ。

しかし、鬼童丸の神速剣戟は、土蜘蛛の体に掠り傷を付ける程度のダメージしか与えられなかった。

「チッ！」

掠り傷に鬼童丸は、顔をしかめた。

鬼童丸は決して弱くない。ただ、相手の土蜘蛛がデタラメなのだ。苦戦してる鬼童丸を見て、別の妖怪が声をかけてきた。

「羽衣狐様！」

慌てた様子で現れたのは、例の髑髏を持った女の子――狂骨の娘だ。なんでも、親父さんの狂骨は昔、同じように羽衣狐に仕えてたそうだ。

「お姉様！ 今すぐ、その人間を土蜘蛛に渡さないと、お姉様まで巻き添えを受けて危険です！」

――ぐおおおおお！ クソガキ、テメエエエエエ！ 気に入らない俺を始末する絶好のチャンスとばかりに、意見してんじやねエエエ！ でも今回の件は、俺が原因つばいから異議を立てられん……。

周りの部下から、これだけ意見を言われたら羽衣狐も同意するかもしれない。

俺が不安を募らせていくと、羽衣狐が答えた。

「いや、この人間は渡さん」

「えっ！？」

羽衣狐の意外な答えに驚いたのは、俺や狂骨の娘だけじゃない。

茨木童子を含む幹部や部下の妖怪達も、激しく動揺している。

俺自身、今回はさすがに切り捨てられると思ってた。しかし羽衣狐は、俺を差し出しての事態の鎮静化を拒んだ。

「どうしてですか、お姉様!？」

「確かにこ奴を土蜘蛛に渡せば、事は簡単に収まるだろう。だが、こ奴を失ってしまったては、つまらなくなってしまう。それにこ奴にも言ったように、妾のおもちやを他人に壊されるのは嫌じゃ」

羽衣狐の言葉に、狂骨の娘や他の妖怪達は呆気にとられた顔をしてる。

まあ、そうなるわな。俺だって、多分アンタ等と同じような心境だよ。何なのさ、その俺に対する——いや、おもちやに対する拘りと言つか執着は？ 何百年も生きてるくせに、ガキかアンタ？

でもさ、正直嬉しいよ。理由はどうあれ、羽衣狐は俺を庇ってくれてるんだ。こんな状況なら、迷わず俺を渡して土蜘蛛の暴走を止めるのが、一番の方法だ。それなのに、羽衣狐は俺を出さない。俺なんか、さっさと見捨てちゃえばいいのにな。

思い返してみれば、俺は何度も羽衣狐に命を助けられてきた。情けない。

羽衣狐に感謝すると同時に、護られてばかりの自分を情けなく思った。

嫌だな。

俺のせいで、羽衣狐が傷付くかもしれないのが嫌だと思った。

——くそっ……！ 何かないか？ あの化け物を倒す方法……！
いつの間にか俺は、無い頭使って土蜘蛛攻略に思考を働かせてた。羽衣狐を傷付けたくない一心で、頭をフル回転させる。0から組み立てるのは、馬鹿な俺には無理だから、頭の引き出しに入ってるバトル漫画の記憶を片っ端から取り出す。沢山のバトル漫画の中から、土蜘蛛に有効な方法を見つけた。

「見つけた……！ 究極の必勝法……！」
「えっ!？」

俺の言葉に、近くに居る妖怪達が驚きの声を上げた。
すぐに動揺が収まった羽衣狐が、訊いてきた。

「究極の必勝法、だと……？」
「はい……！」
「聞かせてみよ」

俺は土蜘蛛攻略法を、羽衣狐や周囲の妖怪達に話した。
攻略法を聞いた妖怪達は、互いに顔を見合わせたり、ざわざわと小さく騒いだりと動揺していた。

その中で、羽衣狐だけは面白そうに笑みを浮かべた。

「ふふふ…… はははっ！ 面白い策を思い付くのう、人間！ 鬼の時もそうだったが、一体どこからそのような考えが出てくるのだ？」
「それは、また今度ゆっくりと……」
「それもそうじゃのう。では、妾が行くでしょう」
「羽衣狐様!？」

羽衣狐が出ようとして、部下の妖怪達が驚いてる。

「ちよっ…… ちょっと待って下さい!」
「ん？」

周りの妖怪達が止めに入る前に、俺が羽衣狐を呼び止めた。
悪いけど、アンタを行かせる訳にはいかない。
一つ深呼吸をして、俺は意を決して言った。

「俺が、行きます……！」

「何じゃと？」

この時、初めて羽衣狐は目を見張った。周りの妖怪達もだ。そりゃそうだろうな。弱い人間が、デカくて強い妖怪に挑むなんて誰が思うよ？ 自慢じゃないが、弱さには超自信あるぜ俺は。

「何故、お前が行くのだ？」

腕を組んで向き合い、羽衣狐が訊いてくる。

羽衣狐の真っ黒な瞳に見つめられ、ヤバい状況だったのに違う意味で緊張してきた。

「それは、その……」

言葉を詰まらせるが、状況が状況だから思い切って口にした。

「は、羽衣狐様を、傷付けたくないから、です……！」

「妾を……？」

「はい……！」

言っちゃった。周りには妖怪達が居るってのに、柄にもなく恥ずかしい事言っちゃったぜ。

羽衣狐も、目を丸くしてる。こんな羽衣狐も初めて見る。しかし、意外そうな顔は、すぐに笑顔に変わった。

「はははっ！ そうか、妾を護りたいか！ では、シッカリと護ってもらおうしよー！」

言っや羽衣狐は、一本の尻尾に手を入れた。

訝っていると、尻尾の中から棒のような物を取り出した。よく見ると、少女に不似合いな刀だった。

羽衣狐は、取り出した刀を俺に突き出した。

「三尾の太刀っ……！　コレをお前に貸そう……！」
「えっ!？」

驚く俺に、羽衣狐は問答無用で押し付けるように、刀を渡してきた。刃で斬らないよう、注意して受け取る。

「その刀と策を以て、妾を護ってみせよう……！」

いつもの妖しい笑みで、羽衣狐が俺に命じた。

いきなりの事に少し困惑したが、俺は「はい！」と頷いて答えた。他人に頼られるのは、コレが初めてだったりする。

話はまとまり、俺の体を羽衣狐の尻尾が巻き付いて掴む。これから、あの土蜘蛛ばけものを相手にすると思うと、嫌な汗が大量に流れてきた。心臓の鼓動も今まで以上に加速して、呼吸も苦しくなる。

ぶっちゃけ、メチャクチャ恐い。足もさっきから爆笑しっぱなしだ。

だけど、退く訳にはいかない。

「ゆくぞ、人間っ！」

「はいっ！」

応えた直後、俺は砲弾になった。

羽衣狐の尻尾に投げられ、土蜘蛛目掛けて高速で飛んでいく。あまりの速さに、目も開けられず、息もロクに出来ない。

土蜘蛛は、鬼童丸や他の妖怪と戦闘してて、まだ俺に気付いてな

い。

勢いよく飛ばされた俺は、大きく開かれた土蜘蛛の口の中に入った。

「んん？」

入った口の中で、声が響いた。土蜘蛛の声だ。

口の中に突入した俺は、そのまま喉の奥に滑り込んだ。喉を通って辿り着いたのは、食べ物消化する器官——胃袋だ。

「うへえ〜！ 気持ち悪っ……！」

胃袋に着くまでに、唾液が体中に付いて凄く気持ち悪い。ヤベツ、胃の中で吐きそうだ。

「そうだ！ 気持ち悪がつてる場合じゃねえ！ さっさと始めねーと！」

俺は策を実行する為、手に持つ刀を構えた。

「いくぜ、土蜘蛛オオオオオ！」

両手で持った刀を振りかぶり、素人丸出しの動きで振り下ろす。

俺の剣撃は、胃の壁を斬った。攻撃の手を止めず、メチャクチャに胃の中を斬りまくる。

すると、

「ぐおおおおおおお！」

苦しむような大声が、耳に響いた。

多分、胃を傷つけられて土蜘蛛が苦しんでるんだろう。
そう、コレが俺の策だ。土蜘蛛は、真っ正面から闘って勝てる相手じゃない。考えた俺は、そんな奴にピッタリの戦法を発見した。それは、巨大な敵の体内に侵入して内側から攻める、と言う方法だ。人気バトル漫画『ド・ゴ・ボ・ル』で、主人公が巨大化した大魔王の体内に侵入していた。

「おらあああああああ！」

勢いに任せて、俺は刀を振り、斬り続ける。
その時、異変が起きた。

*

人間が体内に入り、土蜘蛛が苦しみ出した。

どうやら、中で相当暴れているようだ。ふふふ、土蜘蛛の奴め、苦しそうにもがき吼えておるわ。あんな土蜘蛛の姿を見るのは、初めてだ。『外』からの攻撃には強くとも、『中』からの攻めには弱いようだ。

ん？ 土蜘蛛の様子が変わった？

「かはああああ！」

土蜘蛛の奴が、口から何か吐き出しおった。
吐き出されたモノを、妾の尻尾で受け止めた。尻尾が受け止めたのは、土蜘蛛の中を攻めていた人間だ。内臓に痛手を負った土蜘蛛が、たまらず吐き出したのだろう。

周りに居る下僕達は、啞然とした顔をしておる。

「ぐう……！」

痛みを堪えるような声を漏らし、土蜘蛛が膝を地につけた。
人間を尻尾で抱えたまま、動きが止まった土蜘蛛に歩み寄る。

「土蜘蛛。妾の声が聞こえるか？」

「羽衣狐か……？」

どうやら、痛みで正気を取り戻したようだ。
人間を抱えた尻尾を掲げ、土蜘蛛に言う。

「よく見るがいい、土蜘蛛。こ奴は人間だが、陰陽師ではない。何の力も持たぬ、ただの非力な人間じゃ……」

妾の言葉を黙って聞き、土蜘蛛は尻尾の中の人間を見据えておる。
やがて土蜘蛛は、人間から顔を離れた。

「ああ……そうだな。封じられた怒りで、勘違いしてたようだ」

やれやれ、やっと気付いたか。

「しかし、オレに膝をつかせるたあ、なかなか面白い人間じゃねーか」

「ふふ……確かに、面白い人間じゃ」

妾が頷くと、土蜘蛛は懷から煙管を一本取り出した。近くにあった松明で、煙管に火を点け、煙を吹かした。

「ところでよお、羽衣狐……」

「何だ？」

「何で人間なんか飼ってんだ？」

ほう、珍しいのう。土蜘蛛から、そのような質問をされると思わなんだ。

秀元の奴からも、同じ質問をされたが。

「余興のおもちゃとして、側に置いておるだけじゃ」
「そうか……」

短く答え、土蜘蛛は再び煙管を吹かしおった。
そう言えば、人間の奴がやけに静かじゃのう。尻尾を寄せて、様子を見てみる。ソコには、尻尾の上で気絶しておる人間の姿があった。

やれやれ、と妾は思わず溜め息をついた。吐き出され、受け止めた時の衝撃で気を失ったのか知らんが、最後まで意識を保てんとは情けない男じゃ。

しかし、この情けない男が妾を護ったのは事実。

自然と妾の手は、人間の頭を撫でていた。我が子——清明がある腹を撫でるように、優しくのう。

五ノ怪：間隙（後書き）

次回：宿願

羽衣狐率いる百鬼夜行は、遂に式條城へ！

そこで『俺』は、羽衣狐の宿願を知り……！？

六ノ怪：宿願

土蜘蛛の一件から何とか生還した俺は、気がつけば式條城しじょうじょうと言う城に居た。

俺の策が上手くいって、土蜘蛛の奴は正気を取り戻して一人何処かに行っちまったそうだ。元々群れる事なく単独行動をしてきた奴らしく、羽衣狐達も放っておいている。

これで一件落着かと思ったが、配下の妖怪から衝撃の事実を聞かされた。土蜘蛛の奴が、俺宛てに伝言を残していったのだ。その伝言は、俺にとっては絶望の内容だった。

『機会があれば、また闘り合おうや』

——嫌アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！ 絶対に嫌だアアアアアアアアアアアアアアアア！ あんな化け物と闘うなんて、命が幾つあっても足りねーよ！

あの野郎、また盛大な勘違いしてやがるな。俺が今回勝てたのは、あくまで羽衣狐の助けがあつての結果なんだよ。それと、土蜘蛛が怒りに任せて暴れ回って、口を馬鹿みたいに大きく開けてた事もある。俺一人じゃ、どうにもならなかった。アイツは、そのところを見落として、俺がスゲー奴だと勘違いしてやがんだ。いい迷惑どころじゃねーよ。もう二度と会いたくない。このまま、式條城に引き籠もってやる。

次に、百鬼夜行の妖怪との関係にも、変化が現れた。

最初は、人間って事で俺を毛嫌いしてた妖怪達だったが、土蜘蛛の件を境に何人か仲間扱いしてくれる奴等が出てきた。まあ、殆どは下っ端の妖怪なんだが、それでも劇的な変化と言えるだろう。何でも、人間にしておくには勿体ない、だそうだ。そんな大した男じゃないんだけどな。目を覚ました後に、酒にまで付き合わされたか

らな。式條城を手に入れた祝いだとかで、随分と盛り上がったよ。そういやあ、もうすぐ『宿願』が叶うなんて事も言ってたが、何の事だろうな？ 後で誰かに聞けばいいか。

まあ、そんな感じで俺は今日も死なずに現世を生きている。生きてるってそれだけで素晴らしいって聞いた事あるけど、俺はその言葉を身に染みて実感してるよ。

「生きてるって素晴らしい」

「何か言ったか？」

俺の前を歩く長髪の男が、振り返って訊いてきた。

この男は、しょうけらと言う妖怪だ。綺麗な長髪でイケメンで、妖怪なのに神父のような格好をしてる変わった奴だ。その正体は、簡単に言えば蟲だ。一回だけ、コイツの正体を見た事があるが……おお、今思い出しても鳥肌が立つ。何が言いたいか、もうお分かりだろう？ そう、超キモいのだ。アレは塵地蔵とイイ勝負だ。夢に出てきそうな程の気持ち悪さだからな。幸い、今のところは夢に出てない。

「ああ、はい。生きてるって素晴らしいな、と」

「そうだな。今お前が生きているのは、闇の聖母様のお蔭だ。その事を深く感謝するのだぞ」

「それは勿論です」

アンタに言われなくても、羽衣狐には感謝してるよ。

妖怪幹部の中じゃあ、しょうけらとは仲が良いとまでは言えないが、少なくとも最初の頃の敵意は無くなってる。土蜘蛛の一件で、一応、羽衣狐を護った形になったからだろう。

しかし、ホントにコイツは変わってるよな。神父だからか、羽衣狐の事を『マリア様』と呼んで崇拜している。そう言えば、マリア

様って闇の聖母だっけ？ まあ、どうでもいいけど。

「着いたぞ。ココが、鵜ヶ池だ……！」

石造りの階段を下りていた俺としようけらは、地下の空洞に出た。僅かな火の明かりのみで、薄暗く不気味な天然の空洞は妖怪の棲み処にピッタリ合いそうな所だ。実際入った瞬間に、ゾクリと背筋が寒くなった。俺は別に陰陽師でも無ければ妖怪でも無いから、“気”なんてモノは感じない。しかし、そんな俺でも、この場所のひんやりとした不気味さは肌で感じる。妖怪の持つ妖気のせいか、元々空洞に漂い蔓延してる独特の気のせいかは、解らないけどな。

とにかく、不気味な場所だ。

しようけらと一緒に更に奥に進むと、先に着ていた鬼童丸達と目の前に広がる大きな池らしきモノが見えた。

空洞の不気味な雰囲気の原因は、この池のようだ。真っ黒で、まるでヘドロのような毒々しい印象を受ける。見た瞬間に、絶対に入りたくないと思った。

そんな入る事を全力で拒みなくなる池の中に、羽衣狐は一人佇んでいた。

いや、入って大丈夫なのか！？

「羽衣狐様！？」

「おお、人間、ようやく目が覚めたか。元気そうで何よりじゃ」

俺に気付いた羽衣狐は、ニツコリと笑みを向けてきた。

普段なら綺麗な笑顔なのだが、この時は違った。一度、真っ黒池に頭から全身まで浸かったのか、顔にも黒い水が流れている。流血面にも見えるので、若干引いてしまった。羽衣狐の笑顔で引いたのは、初めてだ。

「懐かしい……。ここに溜まる怨念が、妾に力をくれる……。！ 封印を解き……。やや子を産めと言ってくれている……。！」

俺の反応など気にせず、羽衣狐が何か言っている。
ん？ やや子？ 羽衣狐って、妊娠してるの？
そんな疑問を抱いた時、突然しょうけらが声を上げた。

「おお……。おお……。！」

何やら興奮した様子で池の前まで近づき、片膝を地につけた。

「マリア様……。ついに“主”を産むんですね！」

神に祈りを捧げるポーズで、しょうけらは言った。
どうでもいいけど、ホントしょうけらって変わってるよね。んな事言うの、アンタだけだよ？

それに、そんな事すると突っ掛かってくる奴が――。

「おいコラ、しょうけら。斬り殺すぞ！」

はい、出たー！ 茨木童子！

しょうけらのナルシストな部分が気に入らない茨木童子は、何かと衝突するんだよね。今までも何回か見たことある。

右の隻眼で、ギロリとしょうけらを睨む。相変わらず恐え〜な。

「“ぬえ”だつつつてんだろ？ それに羽衣狐は、マリアとかいう名前じゃねえ……。何回言えば覚えんだ、この自己陶醉ナルシストのムシ野郎が……。！」

「闇の聖母……。！」

ちよつ……しょうけら！ その言動は、茨木童子を刺激するだけだから！

「変なあだ名つけんじゃねえ！ 面白くも何ともねーぞ、カスムシ野郎！」

「私は真剣だ、茨木童子。その為に、ワレらは四百年前からつとめているのであるう？」

——ヤバイヤバイヤバイ！ 主にしょうけらのせいで、一触即発的な空気になっちゃったよ！

二人の陰悪な雰囲気におどおどしていると、狂骨の娘——面倒だから狂骨でいいや、狂骨が口を挟んだ。

「もう！ 二人ともしつかりして！ アンタも何とか言つてよ！」

「はあ！？ お、俺っすか！？」

おいおい、お嬢ちゃん。ソコで俺に振るのは、あまりに酷つてもんだよ。人間世界の罰ゲームを超えた罰ゲームだぞ。見てよ、あの二人のヤバイ空気。ちよつと踏み込んだ瞬間に、殺される空間が出来上がってるよ？

「いや、無理。無理無理、絶対無理！」

「意気地無し！ 弱虫！」

コイツ、やっぱリクソガキだ。言いたい放題言いやがって、マジム力つく！ って、俺と狂骨で口喧嘩始めようとしてどうする？

場がどんどん陰悪な空気になってきたところで、羽衣狐が口を開いた。

「京を制圧し、魔都となった。妾の為に、生き肝を集めてまいれ…

…よいな？」

「御意！」

「部下を総動員させ……一晩の内に、一万の肝を集めてみせます！」

——「うおおおっ！ あれだけいがみ合ってた二人が、羽衣狐の言葉を聞いた途端、息が合ったようにひざまづいたぞ！？ 羽衣狐スゲー！」

二人を見て、羽衣狐がニコツと笑った。すいません、やっぱり笑うと恐いです。

羽衣狐の命を受けて、茨木童子達は生き肝を集めに街へ出ていった。キモ老人の塵地蔵も、池から離れて上の階に戻っていった。空洞には、俺と池の中に佇む羽衣狐だけとなった。ややあつて、羽衣狐が沈黙を破った。

「どうした？ ボーッと突っ立ったままだぞ？」

「え？ ああ、いや……」

何か、会話しねーと場の空気に押し潰されそうだ。とりあえず俺は、さつき浮かんだ疑問を訊いてみる事にした。

「あの、羽衣狐様って……その、妊娠してるんですか……？」

「いきなり何じゃ？ まあ、よいがのう。そうだ。妾の腹の中には、愛しい我が子がある……！」

答える羽衣狐は、腹を優しく撫で始めた。

「このやや子を産む事こそ、我等京妖怪の『宿願』なのじゃ」

「京妖怪の『宿願』？」

「そうじゃ。妾は清明を産み、共に全てを闇で覆った理想の世界を創るのだっ……！」

語り羽衣狐は、嬉々とした様子をしていた。

こんなに嬉しそうな羽衣狐を、見た事がない。

そう言えば、羽衣狐の言葉の中で気になる部分があったな。

「あの、清明って言うのは……？ 茨木童子達は、確か“ぬえ”って呼んでましたけど……」

“ぬえ”なら、少しだけ知ってる。漢字で“鵺”。詳しくは忘れただけ、体の部位がそれぞれ違う生き物で、見る場所によって姿が違う妖怪だった気がする。

俺の質問に、羽衣狐は笑みを絶やさず答えた。

「ふふ……混乱するのも分かる。我が子にはふたつ名があつてのう

……『鵺』と、もう一つは『安倍清明』あへんせいめいと呼ぶ……！」

「あ、安倍清明！？」

予想外の人物の名前が出て、俺は驚愕した。

歴史に興味が無い俺でも、その人物の名前は知ってる。確か、平安時代の有名な陰陽師の名前で、歴史の教科書にも載ってたハズだ。驚く俺を愉快げに見ながら、羽衣狐は続ける。

「永遠の命を欲した清明は、母である妾の胎内なかに還り、清明としてこの世に転生する……！　そうして妾は、また清明と共に生きるのだ……！」

——「うおおおおおいつ！　話がぶっ飛び過ぎだつて！　色々衝撃的事実が明かされて、俺の脳は絶賛混乱中だぞ！　え？　安倍清明の母親が妖怪の羽衣狐で、清明は実は妖怪で、死んだ清明は清明のまま転生しようと羽衣狐の胎内に還って、現代に復活しようと

してる？　それで、世界を創り変えようとするのが最終目的でフアイナルアンサー？　合ってる？　コレで合ってる？

「何か……何か凄いな」

「ふふふ」

説明を終えた羽衣狐は、また腹を撫でている。人をゴミのように見て扱う妖怪だが、我が子を可愛く想う点は人と一緒だな。

そこで俺は、ハツと物凄く大事な事に気付いた。

「あの、羽衣狐様？」

「何じゃ？　まだ訊きたい事があるのか？」

「はい。その……」

訊くのが恐いし、物凄く訊きづらい事だ。
でも、真偽を確かめたい。

そして俺は、とうとう質問を口にした。

「羽衣狐様って……け、結婚してたんですか！？」

「は……？」

俺が尋ねた時、場の空気が凍ったのが解った。

池の中に居る羽衣狐は、ポカンとした顔で俺を見ている。あまりに予想外かつ阿呆な質問に、啞然となっていた。

俺も質問した後で、「やっちまった」と内心で後悔した。

このまま永遠に気まずい沈黙が続くかと思われたが、羽衣狐が破ってくれた。

「くく……ふふふ……はははははっ！　何を訊くかと思えば、結婚をしておるかじゃと？　はははははは！　妙な事を訊く……お前は本

当に面白い男じゃのう……！」

「ううう……！」

——ぐおおおおおおおおおお！ メチャクチャ
恥ずかしいイイイ！ しかも今回は羽衣狐のせいじゃなくて、明
らかな自爆だから文句も言えねえ！ 俺の馬鹿っ！

自分の失敗に心中で叫び、恥ずかしさに悶える。
すると羽衣狐が、何か引つ掛かる様子で訊いてきた。

「それにしても人間、何故そのような事を訊く？」

「え！？ いや、それは……」

羽衣狐の問いに、俺はしどろもどろになる。

そんなモノ言える訳無いじゃないっすか！ もう勘弁して下さい
！ ただでさえ、さっきの自爆で俺の精神ライフは零に近いんです
から。

俺が答えに窮してる様子を見て、羽衣狐は何か得心したように笑
みを浮かべた。口元を歪めた、悪魔のような笑みだ。

「人間……さてはお前——」

——しまった！ 今の反応で墓穴を掘ったか！？

「——妾を好いておるのか？」

拝啓、お父様、お母様、ついでに弟よ。

俺は京都の地で、狐の妖怪に恋をしました。

＊

城の一室で、麿地蔵は一人考えていた。

思い返すのは、例の人間が土蜘蛛を倒した場面だ。羽衣狐の力を借りたとは言え、陰陽術も使えない普通の非力な人間が一人で土蜘蛛を退けたのは、予想外の衝撃的な結果だった。

特別な力も無く、羽衣狐の単なる余興のおもちゃとして放っておいていたが、甘く見ていた。

侮りがたし侮りがたし。

今はこちら側に居るが、所詮は人間の身だ。いつ陰陽師側や憎き奴良組に寝返るか解らない。万が一、そのような事態になれば、少々厄介な事になるかもしれない。あの人間の閃き、戦略は、土蜘蛛のような強い妖怪を退ける程なのだから。危険な芽は今の内に摘んでおくべきか。

「今の内に、消してしまおうかのう？」 フェッフェッフェッ……
「！」

影のかかった不気味な笑顔で、麿地蔵は笑った。

——あの子は誰にも渡さぬ……ワシらのもんじゃ……！

六ノ怪：宿願（後書き）

次回：恋人

主人公の想いを見抜いた羽衣狐

そんな彼女が、ある事を思いつき……？

七ノ怪：恋人

式條城の地下に位置する『鵠ヶ池』と言う場所で、ある意味で人生最大の危機に陥^{ピンチ}っていた。

内心バレやしないかと冷や冷やしていたが、遂にバレてしまった。初めて出逢った時、その女の出で立ちに面食^{ひと}らったと同時に、普通の人とかけ離れた魅力に見惚れた。周りの雑音は耳に入らず、ゴミみたいにも多い人も視界から消え、完全に意識はその女にしか向いてなかった。俺の心は、完全にその女に奪われてた。

俺は気持ちを伝えず、ただ女の側に居た。伝えたところで、断られるのは目に見えてるからだ。見た目地味で、頭も良くないし、オマケに度胸も無いヘタレと付き合いたいと思う物好きが居る訳が無い。まあ、そんな俺を『余興』として側に置いてるだけでも、その女は物好きと言えるだろう。

どうせ断られるんだから、何も言わずに側に居る方がいい。傷つくのは嫌だ。好きな人に拒まれ、嫌われるのは嫌だ。

傷つきたくないから、俺は今まで気持ちを伝えず黙って側に居続けた。

しかし、俺が墓穴を掘った事で、その女——羽衣狐に気持ちがバレてしまった。

コレはヤバイ。どれ位ヤバいかと言うと、完全に孤立した状態であの土蜘蛛に勝負を挑む位ヤバイ事態だ。

羽衣狐が入ってる鵠ヶ池の前で、俺は彫刻のように固まっていた。空洞の中はヒンヤリとした冷気が漂ってるが、俺の体温は急上昇している。多分、顔は真っ赤になってるだろう。池は真っ黒だから確認する事は出来ないが、顔の熱さから推測してまず間違いない。

そんな俺を池から見ている羽衣狐は、相変わらず妖しい笑みを浮かべている。

「その反応は……どうやら、図星のようじゃのう」「うう……！」

相手の顔を直視出来ず、俺は顔を逸らした。俺って態度に出易いから、ちよつと突かれるだけで隠し事とかバレちゃうんだよな。

今日ほど自分の性格が恨めしいと思った事はない。

ああ、言い忘れるところだった。羽衣狐に気持ちが悪くてバテてヤバいと思ったのには、恥ずかしくて死にそう以外に、もう一つ理由がある。どっちかと言うと、後者の方が大きいな。

何故なら、妖怪である羽衣狐にバレると、とくてもマズイからだ。

羽衣狐は愉快げに笑っていたが、やがて氷のように冷たい目に変わった。

「人間の分際で妾に惚れるとは、よい度胸をしておるのう……！」

——恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ恐エ！　今まで受けた睨みの中で、ダントツ一位の恐さだよ！　女の——特に美人の睨み程恐いモノは無えよ！

そう、俺が恐れていた事は、コレである。妖怪って奴等は、全部がそうか知らないけど、俺が見てきた限りじゃ人間の事を見下している。余興のおもちやだとか、力を得る為の餌だとか、そんな風にかかって無い。そんなゴミみたいな人間が、妖怪である自分を好きになったとしたら、どう思う？

多分、殺したくなると思う。

実際、羽衣狐は、ものっそい恐い目つきで俺を睨んでくる。この京都の地で、俺は何回恐い目に遭えばいいんだ？　もう許して下さい。マジで、命だけは助けて下さい。

絶望的な状況に泣き出した俺の前で、羽衣狐は何か顎に指を当

て、何か考える仕草をしている。きっと、俺をどう殺そうか考えているんだろう。

——終わった。

今まで何度もあったが、今度こそ俺は自分の人生の終わりを悟った。

さようなら、怠惰な俺の人生。さようなら、数少ない友達みんな。さようなら、やり残したゲーム。さようなら、お父さん、お母さん、ついでに弟よ。

完全に諦めた俺は、心の中で皆に別れを告げた。

まあ、アレだ。何処かで野垂れ死ぬより、羽衣狐のような美人に殺される方がいくらかマシか。いや、本当は死ぬのは嫌だけど、逃げ切れるような事じゃ無いからさ。人生諦めが肝心って言うじゃない？

「そうじゃのう……うむ、決めたぞ」

黙って考え込んでいた羽衣狐が、何か思い付いたようだ。

とうとう刑が決まってしまったか。気分的には、死刑執行を待つ囚人みたいだ。もう時間をかけずに、いつそ一思いに殺して下さい。痛いのも苦しいのも嫌なんで、一瞬で終わらせてくれ。

——さあ、殺るなら殺りやがれ！ でも痛くしないで下さい！
目を固く瞑り、俺が無理矢理覚悟を決めた直後だった。

「人間、お前と恋仲になってやるう」

「恋仲ですか……。はあ、一体どんな恐ろしい死刑なんだろう……」

「お前、聞いておるのか？ 恋仲になる、と言うておるのじゃぞ？」

「はい、聞いてます……。恋仲と言う刑ですよね……。え？ 恋仲……？」

羽衣狐の言葉に、俺は俯いてた顔を上げた。

俺の聞き間違いで無ければ、羽衣狐は恋仲になると言った。恋仲ってのは、言い方を変えれば恋人の事だよな？ そうなると、さっきの台詞は『俺の恋人になる』と言う意味になる訳で……。

「ええええええええええええええええつ！？」

絶叫を空洞内に響かせた。

あまりの音量に、羽衣狐は両手で耳を塞いでる。

「何て大声じゃ……やかましいのう」

「マ、ママ、ママ、マジですかアアアアアアア！」

「マジ？ ああ、本当や本気と言っ意味じゃったのう。そうだ。妾は、お前の恋仲になる」

— な、なん……だと……？

衝撃を受けた俺は、
 またも某死神主人公の台詞を心中で呟いた。

だって、あり得ない事だぞ？ ああ、絶世の美女の羽衣狐が、妖怪の羽衣狐が、俺と恋仲になるって言ったんだぞ？ ソレって、普通に考えたらあり得ない事だろ？

今まで遭遇した事態の中で、最も理解出来ない状況に俺の頭は完全に混乱していた。

「ば、馬鹿な……！　こんな事が……　こんな事が起こるはずが無い……！　そうだ！　あの羽衣狐の事だから、きつと大きな陰謀が隠されてるはずだ！　そうに違いない！　フツフツ、残念だったな羽衣狐！　お前の狙いなど、とうの昔からお見通しだ！」

相手の返事を素直に受け取れない俺は、酷い方向に思考が働いていた。しょうがないだろう。女にモテた事なんか無いし、勇気を出して告白してもフラれちゃった男なんだから。マイナス思考に走ったって、悪くない。

俺が邪推な思考をしてる事に気付いたのか、羽衣狐は目を僅かに細めた。

「その顔……どうやら、妾の言葉を信じていないようじゃな」

「えっ！？ いや、そんな事は……」

凶星だったので、俺は露骨に動揺する。冷静さを失って、完全にしどろもどろになってた。

そんな俺の様子を、いつものように面白がって見るような笑みを浮かべ、羽衣狐は池の中を泳ぎ出す。黒の池に波紋を広げながら、こちらに近づいてくる。

俺はドキドキしながら、羽衣狐が来るのを見つめてる。やがて羽衣狐は、池から上がって俺の前に立った。セーラー服は勿論、羽衣狐自身もびしょ濡れで、髪の手や服から黒の水滴が滴り落ちてる。これで普通の水なら、濡れた羽衣狐に普段以上に興奮するのだが、黒水のせいで今は恐い気持ち少し勝ってた。

羽衣狐が何をするのか、俺は身構える気持ちで向かい合ってた。対する羽衣狐は、緊張した様子は一切無く、普段と変わらない妖艶な笑みで俺を見つめている。

「言葉で信用出来ぬなら、行動で示してやろう……！」

「え？ それってどういう――！？」

意味、と言おうとして俺は口を塞がれた。目を丸くして、俺の口を塞いだモノを凝視する。

俺の口を塞ぐのは、羽衣狐の唇だ。初めて感じる柔らかい感触が、俺の口を塞いで放さない。甘味、口の中に広がっていく感じがする。俺の方が若干背が高いから、羽衣狐は少し背伸びする形になっている。離れないように、首に両手を回された。

羽衣狐の突然の行動に、俺は激しく動揺した。

彼女いない歴を更新してきた俺にとって、まさにファーストキスだったからだ。しかも、初めての相手が、あの羽衣狐だってんだから、動揺を抑える事は出来なかった。

数秒の短いキスが、俺には長く感じられた。キスの感触を残して、羽衣狐の綺麗な顔が離れていく。

「それでも、まだ信じられぬか？」

口元を歪め、異性の心を奪う妖しい笑みを浮かべる羽衣狐。

間近で見る羽衣狐の笑みは、いつも以上に寒気を感じて興奮する。

「ほ、本気、なんですか？」

キスの後でも、俺は真偽を確かめる質問をした。

相手に対して失礼かもしれないが、どうしても不安が拭えなかった。どうせ俺の反応を楽しむ為の冗談だろう、と言う考えが頭から消えない。彼女いない歴を更新してきた男の悪い考えだ。

怒らせたかな、と思ったが、意外にも羽衣狐は笑顔を崩さなかった。

「疑り深い男だ。何故そんなに信用出来ない？」

「いやだって……その、自分で言うのも何だけど、俺、女の子に好かれる要素なんて全然無いから……。前に告白した事があったんですけど、フラれちゃって……。だから、羽衣狐様が、恋仲になるって言った時も凄く驚いて……」

自分で言ってる悲しくなるけど、事実だから仕方ない。

すると羽衣狐は、ソツと俺の頬に手を添えてくれた。

「そうか……辛かったのだな……」

羽衣狐は、俺の頬を撫でる。優しく撫でる手は、冷たいけど心地良い感じがした。

「寂しかったのだな……。だが、これからは妾が傍に居る。妾が前の居場所になるう……。妾が、お前を受け入れよう……。お前が妾を本当に好いておるのならな」

優しく語りかけてくる羽衣狐の声が、俺の心の底に届いて響く。いや、沁み渡っていく。

「お、俺は……」

自分の口で、ちゃんと伝えようと思った。

最初の告白は、メールでやった。いかにも臆病者の俺らしい告白の仕方だ。直接気持ちを伝える勇気が無かったのもあるけど、一番の理由は直接断られるのが恐かったからだ。

でも、今日は伝えたいと思った。

いや、伝えようと決めた。

一度深呼吸して、俺は口を開いた。

「俺、羽衣狐様が好きです……！」

人生で初めて、本人に直接告白した。臆病者にも、多少の勇氣はあるようだ。

俺の告白を聞いて、羽衣狐は笑った。妖艶な笑みとも違う、年相応の少女のような笑顔で俺の告白を受けてくれた。

羽衣狐は、俺を抱き寄せた。身を預ける形で、俺は羽衣狐の肩に顔を埋めた。

嬉しかった。

嬉しくて、思わず涙が出そうになった。

他人に受け入れられるのが、こんなに嬉しい事だと初めて知った。
そして、俺が欲しかったのは、この温もりだった。

俺を受け入れてくれる人が、欲しかった。

結局のところ、羽衣狐の真意は解らない。俺を哀れnderのか、
やっぱり余興の一環なのか、解らない。

けど、どっちでもよかった。俺を受け入れてくれるなら、哀れみ
でも余興でも何でもいい。羽衣狐と一緒に居られれば、それでいい。

*

羽衣狐に告白した翌日、俺は鵜ヶ池に居た。

出産の時まで、羽衣狐は鵜ヶ池を離れないらしいので、俺も食事
や寝る時以外はココに居る。

少しでも長く多く羽衣狐と一緒に居たかったからんだけど、ち
よつと後悔してたりする。何故かって？ 羽衣狐の食事が、ヤバい
からだ。基本的に、羽衣狐は手下の妖怪達がさらってきた女の子の
肝を食べるのだが、その食事の方法が問題なんだよ。口から直に吸
う、と言う少々刺激のある行為なのだ。

女の子同士のキスにも見えて、多少エロチックな感じもするが、
生き肝を直に吸って相手を喰い殺してる訳だから、平和な暮らしを
してきた俺には色んな意味で刺激的だった。陰陽師虐殺の時に比べ
れば、まあ軽い方だが、やってる事は殺しと何ら変わらない。

俺は何度か、目の前で羽衣狐に生き肝を吸われ、死んでいく女の
子達を見てきた。陰陽師虐殺の時と同じように、見てて気分は悪か
った。だけど、怒りは湧いてこない。羽衣狐がやってる事は、許さ
れる事じゃないし、犠牲になった女の子達の事を可哀そうとは思っ
けど、そこまです。犠牲になった人達の為に怒る、なんて事はしな

い。こう言っちゃ悪いけど、全然知らない他人だからな。知らない人の為に怒れる人間じゃないんだよ、俺は。

人間喰い物にしてる羽衣狐に惚れた、変わり者でもあるしな。

ちなみに、今は夕食だ。

池の中では、羽衣狐は今日最後の女の子の肝を吸ってる。何回見ても慣れないな。いや、慣れるのもどうかと思うけどね。

そんな俺の横には、今夜も髑髏を持ってる狂骨が居る。万が一の襲撃に備えての見張り、みたいなものかな。

ちなみに、俺と羽衣狐が恋人になった事は誰にも知らせてない。俺としても、その方がいい。特に、狂骨には絶対教えられねえ。この娘メチャクチャ羽衣狐の事慕ってるから、嫌いな俺なんか羽衣狐の恋人になったなんて知られたら何されるか分かったもんじゃない。

そういう訳で俺達の関係は、しばらくは内緒にしておく。

まあ、恋人になったって言っても、あのキス以外何にもしてないんだけどね。今は大事な息子さんを産む時期だから、恋人らしい事はしばらくおあずけだってさ。コレって一種の放置プレイ？ つーか、晴明が生まれた後、日本ってどうなるの？ 大丈夫なの？ 俺は初めて、日本の将来を本気で心配した。

その時、ちよっとトイレに行きたくなった。

「あつ、すいません。ちよっとお手洗いに行つてきます」

「うむ。行ってくるがよい」

階段を上がって、地上の城内に出る。

この時、地下から出たのは全くの偶然だった。

そして、この行為が、あの野郎の本性を垣間見るキツカケとなった。

七ノ怪：恋人（後書き）

次回：凶刃

羽衣狐にとって因縁の相手である、ぬらりひょんと遭遇！？

その時、塵地蔵の刃が……！？

ハノ怪：凶刃（前書き）

後書きの内容を、ちょい変更しました。

八ノ怪：凶刃

地下の鵜ヶ池を出た俺は、城内に上がってトイレ——廁を目指した。

階段を上がり終え、廊下を歩きながら俺はふと思った。

鵜の出産を阻止する為に、他の百鬼夜行が京都に來ている。確か、羽衣狐達は奴良組ぬらくみとか言ってたな。何でも、四百年前も奴良組に邪魔されたとか、それはそれは忌々しげに語ってたな。総大将の名前は、ぬらりひょんって妖怪だったな。俺が知ってるぬらりひょんは、他人の家に上がり込んで、飯を食ったり好き放題していく小物って話なんだけど、ちよつと違うらしい。四百年前に羽衣狐に勝つたぬらりひょんは、魑魅魍魎の主となったそうだ。一体どんな奴なのか、ちよいと興味あるな。恐い妖怪だったらどうしよう？ と言うか、恐くない妖怪なんかいるのか？

そんな事を考えながら俺は、廊下を歩いていく。

少し歩いたところで、急に地下したの方が騒がしくなった。俺は歩みを止めて、床に目を落とした。

「ん？ 何だ？ まさか……もう出産が始まったとか？」

予定じゃあ、もう少し時間がかかるって聞いたけどなあ。早まったのか？

疑問に首を傾げると、今度は大きな揺れが起こった。

「おいおい！ マジで何！？」

揺れでバランスを崩して、壁に背中をぶつける。ついでに頭も軽くぶつけて、地味に痛い。んにやる、誰だ揺れを起こしたやろうは？ 地震とか自然現象じゃなかったら、犯人ぶん殴ってやりたいぜ。

打った後頭部を擦りながら俺が、揺れを起こした犯人に怒った時だった。

「んおっ!？」

「おわっ!？」

「羽衣狐の配下……! いや、人間か!？」

俺が歩いてきた方から、妖怪が二匹やってきた。驚いてる様子から、羽衣狐の手下じゃなさそうだ。俺の事見て驚いてるしな。

一匹は、修験者のような格好をした妖怪だ。小さな体で人型だが、体が黒い羽で覆われてカラスのような羽が背中から生えてる。多分、カラスの妖怪だろう。ちょっと可愛いじゃねーか。

そして、ある意味カラスよりもビックリなのが、もう片方の妖怪だ。まず、後頭部が普通の人間じゃあり得ない形になってる。びよい〜んと後ろに伸びてて、マジキモい。かなり高年齢の爺さんのようだが、キモいモノはキモい。このあり得ない外見で、妖怪と呼ぶず何と呼ぶ？

よく見ると、デカ頭爺さんの方は怪我をしてらしく、頭から血を流してる。

「羽衣狐に捕われた人間か？」

「え? いや……」

カラスに訊かれ、俺は口ごもった。

この場合は、何と答えるべきか迷うところだ。羽衣狐側と答えたら、何されるか解らない。かと言って、捕まった人間ですと答えても、何もされない保証は無い。どっちを選択しても、面倒な事になってしまう可能性がある。こういう緊急事態に弱いんだよな、俺って。

なかなか答えない俺を見て、デカ頭の爺さんが痺れを切らしたよ

うに手を掴んできた。

「ええい、何をモタモタしておる！」

「あつ！ ちょっ、待つ……！」

デカ頭の爺さんは、半ば無理矢理俺を連れ出そうとする。

カラスに持たれてるデカ頭爺さんに腕を引つ張られ、強制的に廊下を走らされる。小さな体のくせに、カラスは俺とデカ頭爺さんの二人を連れて進んでる。

「ちょっと待った……！ アンタ等何なんですか！？」

「悪いが、説明しとる暇は無い！ カラス天狗！ ココから出たら、すぐに幹部達と合流するぞい！」

俺の問いに短く答えたデカ頭爺さんは、自分達を連れて飛んでるカラスに指示をした。

——いや、カラス天狗って、そのちっこいの天狗なの！？ 天狗って、民話に出てくる鼻の長いああいう感じじゃないのか？ 妖怪の世界って解んねー！ んで結局、アンタ等誰なんだよ！？

飛んでく先には、外に通じる出口が見える。

このまま訳も解らず、羽衣狐の元から去る事になるかと思っただ、そうはならなかった。

突然、俺の視界が真っ暗闇になった。瞼を閉じた訳でも無いのに、視界が完全にシャットアウトされた。一切の光が見えない闇に落ちる寸前、黒い羽のような物が見えた気がした。だが、そんな事はすぐに頭の隅っこに置かれた。

「な、何だよ、コレ！？」

急に視界が闇に変わって、俺は混乱した。人間は情報の殆どを視

覚から得てるから、目を潰されると一気に不安が増すんだ。実際、真っ暗闇になった瞬間、俺の胸中は不安が占めて、心臓が跳ね上がった。

次の瞬間、体に強い衝撃が走った。飛んでたカラスがバランスを崩したのか、捕まってた俺も巻き添えみたいに壁に激突したみたいだ。痛む頭を押さえながら、今日はよく壁に当たる日だなと舌打ちした。

「くっ……カラス天狗っ……！」

すぐ近くで、あのデカ頭爺さんの声が聞こえた。

ちくしょう。目が全然使い物にならないから、どうなってるのか分からない。恐怖と不安が、ジワジワと胸中に広がる中で、誰の作業なのかと考えた。こんな奇天烈な事が出来るのは、妖怪以外に居ない。

そう思った時だった。

「うぐっ……！」

何か刺す音がしたと同時に、デカ頭爺さんのくぐもった声が耳に入ってきた。

目が見えないから何が起こってるか解らないが、良い事じゃない事だけは確かだ。

「そ、総大将——！？」

次いで、カラスの慌てた感じの聲が上がった。

あの慌てようから察するに、多分、デカ頭爺さんが刺されたんだろう。多分、この暗闇を作った犯人にだ。もしかしたら、カラス達も俺と同じ状態なのかもしれない。

すると、

「フエツフエツフエツ……奴良組三代の血はいただいたっ……！
ワシらの主の世は、もうすぐじゃ……！」

聞き覚えのある不気味な笑い声が、暗闇で聞こえた。

——この笑い声は……塵地蔵か！？ それに奴良組って、羽衣狐と敵対してる妖怪一家の名前じゃ……。

そう考えると、この暗闇は塵地蔵の仕業か？ 敵対してる奴良組の奴を仕留める為に、術か何か使って、ソレに俺は巻き込まれた感じか？ ふざけんな！ 俺だけでも早く解放しろ！ 目が見えないって、スゲー不安なんだぞ！

暗闇に置かれてる恐怖を、塵地蔵への怒りで何とかごまかす。

「魍魅魍魎の主と呼ばれた男も、あつけないものだな……。やはり、老いとは怖いな……！ フエツフエツフエツ！」

デカ頭爺さんを刺したままであろう塵地蔵が、不気味な笑いを廊下で上げる。

ああ、このジジイの笑いはいつ聞いても気持ち悪いぜ。

しかし、今気になるワードが出たな。塵地蔵は、魍魅魍魎の主と言った。消去法でいけば、俺は絶対にありえないし、カラス天狗って奴も主って感じじゃないから、多分デカ頭爺さんの事だろう。カラス天狗も『総大将』って呼んでたし、つまり、デカ頭爺さんがぬらりひょんって事か？ じゃあ、敵の大将じゃんか。

それなら、塵地蔵は嬉々とした感じで笑ってるのも頷ける。厄介な邪魔者を消せるんだからな。

しかし、次に塵地蔵は、とんでもない事を続けた。

「ついでに、この人間も消す事が出来て一石二鳥じゃ……！ フェ

ツフェツフェツ！」

「え……？」

おい、このジジイ今何て言った？ 俺の事も消すとか言わなかったか？

元々良く無かったが、事の雲行きが更に悪くなってる気がする。場の空気が、視界を覆う暗闇のようにどす黒く感じた。この空気っつか、雰囲気は京都に来てから何度か感じた事がある。

凡人の俺でも唯一感じる気、相手を殺す時に出す気——殺気だ。

「悪く思わんでくれよ、人間……！ お主は、生かしておけば厄介そうじゃからなあ……！」

——このクソジジイ……！

殺される恐怖よりも、今は怒りが勝ってた。目の前に居るであろうクソジジイを、一発殴ってやりたい。いや、一発じゃ全然足りねえ。疲れ果てるまで、タコ殴りにして、半殺しにしてやる！

俺は立ち上がり、声を頼りに野郎の位置を推測して、怒りに任せて拳を振るおうとした。

だが、俺の拳が塵地蔵に当たる事は無かった。

「がっ……！？」

殴ろうとした瞬間、背中に激痛が走った。鋭い刃物で斬られたような痛みに、俺は体を崩して倒れる。

「よくやった夜雀^{よすずめ}」

——夜雀？ 待ちやがれ、そんな妖怪知らないぞ。まさか、京の妖怪以外に仲間がいやがるのか？ クソツタレ！

心中で悪態をつく俺は、背中 of 痛みに顔を歪める。刃物で背中を斬られるなんて、初めての経験だが、スゲー痛いんだな。あつという間に、目に涙が浮かんで零れ出てきた。痛すぎて、逆に大きな声も出ない。

「そう慌てんでも、ぬらりひょんを始末したら次はお主の番じゃ……！」

見下すように笑う塵地蔵の顔が、脳裏に浮かんた。

——冗談じゃねえ！ 形だけかもしれないけど、やっと羽衣狐と恋人になれたつてのに、こんな所で死んでたまるか！ 死にたくない！ 死にたくねえよ！

死んだら誰とも会えない、完全な孤独だ。そんなのはまっぴら御免だ。

助かりたい一心でいると、デカ頭爺さん、いや、ぬらりひょんの声が聞こえた。

「魔王の小槌」……。この刀あ、何でてめえが持ってたんだい……？」

「うつ……！？」

凄みのあるぬらりひょんの声の後に、塵地蔵の動揺した声が聞こえた。

——魔王の小槌？ また知らないワードが出てきやがった。目は相変わらず見えないままだが、形勢が変わったようだ。

「き……消えた……？」

あ？ 消えた？ ぬらりひょんが消えたのか？ くそっ！ 視力が戻らないから、何がどうなってるのか全然解らないぜ。

「てめえは一体、何者じゃい……?」

声だけで、ぬらりひょんが別人のように豹変してるのが解る。見た目あんなヘンテコな爺さんだが、かつて魑魅魍魎の主に登り詰めただけはある。逆に声だけしか聞こえない状況だからか、威厳と迫力が伝わってくる。

「夜雀え！」

おお、おお、さっきまで余裕ぶっこいてた塵地蔵が、焦ったような声出してるぞ。ぬらりひょんの迫力に気圧されたか？

そう思った直後、夜雀の攻撃と思われる斬撃の音が耳に響いた。だが、硬い物を斬りつけた感じから察するに、しくじったかな？

「うつすら見えてきたぞい。また来るぜ……その目玉、覚えとく。……すまん、若造」

俺の予想通り、ぬらりひょんは生きてた。何かを蹴るような音がした後、水に落ちる音が聞こえたから、飛び降りたんだろう。

ざまあねえな、間抜けジジイ！ 勿論、塵地蔵の方だ。

ぬらりひょんが最後の方で、俺に謝ってた感じだけど、別に気にする必要はないですよ。つか、見ず知らずの他人を助けようなんて、どんだけお人好しな妖怪なんだよ。

「逃げられたか……！」

悔しそうに呟く塵地蔵。マジでざまあ！

「まあいい。それなら、こ奴だけでも始末して……」

「塵地藏！」

標的が俺に変わって、一瞬心臓が大きく跳ね上がったが、そこへ鬼童丸の声が差し込まれた。多分、ぬらりひょんを追ってきたんだろつ。

すると、塵地藏の殺気が消えて、同時に視力も戻った。

「た、助かった〜！」

マジで命拾いした。鬼童丸達が駆け付けてこなかったら、塵地藏に殺されてたぞ。安心はしたけど、心臓はまだ落ち着いてない。激しく鼓動を打ってる。

「ぬらりひょんはどうした？」

「逃げられてしまったわい……」

「何？　だが、あの傷ではそう遠くへは逃げられまい。追ってをやって堀を囲め」

塵地藏から話を聞いて、鬼童丸が部下に指示を出してる。

つか、俺の事は無視か？　立ち上がりたいけど、傷の痛みか出血のせいか、意識が朦朧としてきた。声もロクに出せねえ。

「ちよつと人間？　しっかりして!？」

最後に聞いたのは、狂骨の声だった。

お前だけだよ、俺に気付いて心配してくれたのは。もし、かして

……実は、良い奴、だったりする……？

そう思った俺は、意識を手放した。

冷たい。けど、心地良い感触に包まれてる。

ぼんやりとする意識で、俺は目を開けた。視界に映るのは、薄暗い空洞の天井だった。次第に意識が覚醒してきて、頬に何か添えられてる感触を憶える。そっちに顔を向けると、見覚えのある顔があった。

「おお。人間、目を覚ましたか？」

「羽衣、狐、様……？」

羽衣狐は、鶴ヶ池の岸で黒水に浸かった状態で俺の側に居た。素っ裸な上に綺麗な顔が間近にあるから、興奮と緊張が混ざって心臓がドキドキ高鳴ってる。そのお蔭で、バツチリ目が覚めた。なるべく平静を装って、俺は羽衣狐に尋ねた。

「あれ？ 俺ってどうしたんだっけ？」

「廊下で血を流して倒れておるところを、狂骨が見つけて運び、手当てをしたのだ」

「ああ、そうか」

やっぱり、薄れゆく意識の中で、俺に声をかけてくれたのは狂骨だったか。良い娘こじゃないか。今度お礼に、髑髏どくろのアクセサリーでも買ってあげようかな。

ん？ 待てよ。ふと思ったけど、こんななんびりしてる場合だったっけ？ なんか、凄く大事な事を忘れてるような気がする。

思い出そうと考え込んでる俺の横で、羽衣狐が顔を陰しくさせて言った。

「それにしても、ぬらりひょんめ……妾^{わらわ}の恋人^{おもちゃ}に傷をつけるとは…

…！」

「え？　ぬらりひょんが俺を……？　痛^{つう}っ！」

疑問に思うと、背中^{うしろ}の傷が痛んだ。

その痛みをキツカケに、忘れてた重大な事を思い出した。

「ああっ！　あのクソジジイぶつ殺してやる！」

「クソジジイ？　ぬらりひょんの事か？」

「違います違います！　クソジジイは塵地蔵です！」

——今思い出しても腹が立つ！　あのクソジジイ、ぬらりひょんと一緒に俺まで殺そうとしやがって！　マジム力つく！

ぬらりひょんは、敵側みただけで寧ろ良い奴だ。

「どういう事じゃ？　話してみよ」

怪訝そうに目を細める羽衣狐に、俺は廊下で起こった出来事を話した。幸い、鵜ヶ池には、今は俺と羽衣狐の二人しか居ない。

詳細を語ると言っても、実際は視界を真っ暗に封じられてたから、耳で聞いた僅かな情報から推測して話してるんだけどね。けど、俺の考えは間違いじゃないハズだ。

怪訝な顔をしていた羽衣狐の顔が、俺の話聞いてく内に段々と不機嫌な表情に変わってきた。眉間にシワを寄せ、綺麗な顔が物凄くおっかなく見える。話してる俺も、羽衣狐の変化に内心ビクビクしてた。前にも言ったと思うけど、美人の怒り顔ほど怖いモノは無い。

「それは真か……？」

「はい」

——ヤバい……絶対ヤバいつて。羽衣狐、メチャクチャ怒ってるよ！話を聞き終えてから、空洞内の空気が更に冷たくなったもん！俺を傷つけた事に対してか、それとも麿地蔵が自分の知らない力を有してる事に対してか。まあ、多分後者だろうな。羽衣狐にとつて、俺は暇つぶしの相手なんだから。それよりも、自分に隠して何か企んでる事の方が遥かに許せないだろう。

「そうか……分かった。とりあえず、麿地蔵の事は後回しじゃ。今は晴明を産まねばならぬ大事な時期故、妾はココから動けぬ。だが……事が済めば、しかるべき罰を妾自らが与えようぞ……！」

怒気に満ちた笑みを浮かべる羽衣狐は、物凄い迫力で思わず少し後ずさりしちまった。

しかし、大勢の妖怪を束ねる主だ。素早く気持ちを切り替えて、冷静さを取り戻す。

「誰か近くに控えておるか？」

「はい。お姉様」

羽衣狐が上げた声に答え、やってきたのは狂骨だ。

「狂骨よ。お前に、人間の護りを頼む。がしゃどくろと共に決して傍を離れず、こ奴を護るのだ。よいな？」

「はい、解りました」

笑顔で答える狂骨だけど、内心どう思ってるんだろうな。大嫌いな俺の護りなんて、ホントはしたくないんだろうな。そんな事を思っていると、羽衣狐が声をかけてきた。

「そういう事だ。お前は狂骨達と共に居ろ。よいな？」
「はい。わかりました」

答えた後、俺は立ち上がった。まだ背中 of 傷は痛むが、動けない程酷くは無い。派手な動きをしなければ、大丈夫だろう。

「こつちよ」

狂骨に促され、俺は後をついていく。

石段を登る途中で、俺は足を止めて振り返って鵜ヶ池を見た。池の中には、羽衣狐が優しく腹を撫でている。

「羽衣狐様！」

「ん？ どうした？」

顔を上げて、羽衣狐は俺を見る。

ホントに柄にも無い事を言おうとして、恥ずかしさで顔が熱くなる。

「その、気を付けて下さい……」

「ふふ。お前もな」

笑顔で返してきた羽衣狐。

やっぱり笑ってる顔が一番だ。

八ノ怪：凶刃（後書き）

羽衣狐「突然だが、次回より後書きは『軽い次回予告』から『アヤカシ質問コーナー』へと変わるそうだ」

俺「何でやねん？　と思わず関西弁でツッコんじゃう程に、疑問なんですけど」

羽衣狐「次回予告とは、次の話の内容が出来上がっていて成立するもの。つまり、予告が無くなったと言う事は、次の内容が出来ていない、決まっていけないと言う事じゃ」

俺「ああ、そういう事ですか。いや、でも質問コーナーだって楽しいやないでしょう？」

羽衣狐「あの自堕落作者曰く「感想の数の少なさ、佳境に突入して終わり間近な本編、これらを考えれば質問コーナーに要する労力は少なくて済むんじゃない？」と言う腐りきった考えだそうじゃ」

俺「うわぁ、マジで自堕落作者……名に恥じないところが、更にヤベエ……」

羽衣狐「そういう事じゃ。人間どもよ、何か質問があれば感想に書くがよい。妾が答えてやろう。質問を採用された者は、特別に妾が生き肝を食して……」

俺「やらせませんよ！」

九ノ怪：開戦（前書き）

後書きには、『アヤカシ質問コーナー』があるので、よければ覗いてみて下さい。

九ノ怪：開戦

地下の鵜ヶ池を出た俺と狂骨は、城の一階広場に出た。
ソコには、バカデカイ骸骨が居た。

「狂骨〜！ おお？ 人間も一緒か〜！」

コイツは、がしゃどくろ。肉や内臓は無いけど、何故か目玉だけはちゃんとある。たまにその大きな口で相手を食べようとするが、中身が空洞だから当然すり抜けられる。ちよつと抜けてる部分があるから、狂骨や他の仲間からも注意を受ける事がある。狂骨と同じくらいか、ソレ以上に羽衣狐を慕ってる。もし、コイツに俺と羽衣狐の関係が知られたら、その大きな手で潰されるかもな。うん、想像するのやめよう。

「ほら、早く乗って」

「あ、ああ」

先に乗った狂骨に促され、俺もがしゃどくろの頭のとっぺんに乗る。

高い位置から周りを見渡すと、何だか妖怪達がバタバタと騒いでる。

「何かあったの？」

「奴良組が乗り込んできたのよ」

おいおい、そりや大変じゃないか。もう少して羽衣狐が鵜を産むって時に、乗り込んでくるなんて漫画みたいなタイミングだな。

果たして、出産は上手くいくのかね。仮に、奴良組を正義、京妖

怪を悪と仮定して考えてみよう。漫画とかだと、悪側の目的達成ギリギリのタイミングで正義側が乗り込んできて、戦闘開始となる、それで、良いところまでいくんだけど、結局は魔王復活は阻止出来ないってのがお決まりだ。

けど、コレは漫画じゃなくて現実だ。未来の筋書きは決まって無い。

「全く、お姉様の命令じゃなければ、アンタなんか放っておくのに……」
「すいませんね、足手まといで」

不満そうに表情を陰しくさせてる狂骨に、俺は素直に謝った。
いや、俺が足手まといだってのは事実だから。それに、京妖怪にとつて今が一番大事な時だからな。長い間夢見てた宿願が、やっと叶おうとしてるんだ。そりゃあ邪魔されたくないよな。

「まあ、その、アレだ。なるべく邪魔しないようにしてるから」

「邪魔したら蛇で締め上げるからね」

「ソレは勘弁して下さい」

蛇の締め上げる力って、半端無いつて聞いた事がある。

そんな事を思い出してる時、一ヶ所の襖が盛大な音を立てて吹き飛んだ。ついでに衝撃の余波で、襖付近に居た何体かの妖怪も吹っ飛んでいった。まあ、ドンマイ。

多分、乗り込んできた奴良組って連中の仕業だろう。随分と派手な登場をする奴等だな。

立ちこめる煙の中から、大勢の人影が見えてくる。

そして現れたのは、妖怪の群れ——百鬼夜行だ。

先頭に立って百鬼夜行を率いるのは、意外にも若い男だった。白黒二色の長髪で、重力を無視したような髪型をしてる。顔は整って

いて、強い意思と自信に充ち溢れてる印象を受ける。着物を粋に着こなした奴で、俺とは比べ物にならない程のカッコイイ奴だ。先頭に立ってるって事は、アイツがリーダーなのか？

「アレが、奴良組なのか？」

「そうよ。羽衣狐様の邪魔をする、憎き奴良組……！」

射殺すように目を鋭くさせて、狂骨は奴良組百鬼夜行を睨む。

羽衣狐の事をお姉様と呼んで慕ってる程だから、邪魔をする奴良組は忌々しい存在なんだろう。髑髏を持つ手にも力を入れて、ギョツと掴んでる。

城内で戦闘が始まるかと思われた時、突然地震が起こった。

「おおおおお！？」

グラグラ揺れるがしょどくろの頭の上にしがみ付き、俺は声を上げた。

城を揺らす大きな振動に、京妖怪も奴良組も動揺してる。最初こそ突然の揺れに俺も驚いたが、何が起こったのか何となく解った。京妖怪も原因は解ってる奴が大半だろう。多分、揺れの原因は地下にある。

そして、俺の予想を裏付けるように、木製の床がバキバキと激しい音を立てて破れる。床は突き破られて、巨大な球状の黒い物体が急浮上してきた。黒い球体は回転を起こし、城を破壊しながら上に^あがっていく。

つか、降ってくる破片が頭とかに当たって、結構痛いんですけど！ 出てくるのは構わないけど、もうちょっと周りの事も考えて欲しいな。

心中で文句言ってる間に、黒い球状は天井を突き破り、宙で静止した。黒い球体には、羽衣狐の姿があった。察するに、あの黒い球

体は鵜ヶ池の黒水の塊だな。俺だけでじゃなく、この場に居る全員が見上げて黒い球体を凝視してた。

「ああ……感じるぞ、清明エ……！　この時を、千年待ったのだ……！」

黒い球体から半身を出してる羽衣狐の音が、崩れた城内に響き渡る。

「妖と人の上に立つ……鵜と呼ばれる新しき魑魅魍魎の主が、今ここで生まれる……！　皆の者……この良き日に、よくぞ妾^{わい}の下へ集まった」

おおっと、羽衣狐が何やら演説みたいな事を始めたぞ。まあ、待ちに待った息子の誕生だからな。

「京都中から——そして遥々江戸や遠野から妾達を祝福しに……全ての妖どもよ、大儀であつた……！」

羽衣狐の演説に、京妖怪達が吠えた。

物凄い雄叫びで、まるで大気が震えてるようだ。ついでに五月蠅い。

「羽衣狐様アアアアアアア！」

俺の隣に居る狂骨も、テンション高くして声を上げてる。

傍に居る俺は、耳を塞いで顔を顰める。だあゝ、テンション高い女程やかましいモノは無い！　年とか関係無しに、女って生き物はテンション高いとメチャクチャ五月蠅いんだよな！　アイドルの追っかけとか、マジでウザいと思う。狂骨なんか、まさに羽衣狐のフ

アンでテンション最高潮だよ、ちくしょう！ お前等、盛り上がるのはいいけど、せめてもう少し声のボリューム下げってくれ！ 鼓膜が破れる！

「そうかそうか、祝ってくれるか。くるしうないぞ、かわいいやつらじゃ……」

——何でアンタは、この騒音を聞いても平気なんだよ！？ ハッ！ そうか、上に居るからか！ チクショウめ！

あまりの雄叫びの喧しさに、ある意味安全区域に居る羽衣狐にまで心中で悪態をつく。だって一人だけ、この騒音から逃れるなんてズルイじゃないか。

つか、今更気付いたんだけど、羽衣狐裸だよ！ 何ちゅう恰好で表に出てんだよ、あの人は！？ ただでさえ恥ずかしいのに、一応恋人の俺としては更に複雑な心境だよ！ 羽衣狐の裸は、俺だけのものだ！

ちよつとズレた思考を働かせた時、黒い球体に変化が起きた。ポコポコと所々に膨らみが出来たと思ったら、頭や手足のようなモノが出てきて、人間の胎児のような形になった。

羽衣狐——悪いけど、アンタの息子さん、今、超キモいです。京都で妖怪と出会ってから、何回“キモい”って思った？ 多分、結構思ったハズだ。

「はフェははは、生まれるぞ！ 羽衣狐様、バアアンザアイなあ のじゃあああ！」

城内の一ヶ所に、周囲の妖怪に混ざって歓喜の声を上げる塵地蔵の姿があった。

俺は奴の姿を見つけた途端、怒りが燃え上がって睨みつけた。

——あんの、クソジジィー！ 何普通に周りの連中と一緒になっ

て喜んでんだよ！ テンション高くしてんじゃねー！ キモいんだよ！

今すぐにも駆けて行って、半殺しにしてやりたいが、必死に氣持ちを抑えた。羽衣狐から狂骨の傍に居るって言われてるし、離れたら狂骨に迷惑をかけて怒られるからな。しかも、蛇のお仕置き付きだ。

「ぐぬぬぬぬぬ〜！」

歯をギリギリと食いしばり、必死に怒りを内に抑え込む。

「妾は、この世を純粋なモノで埋め尽くしとうなった。それは黒く

どこまでも黒く――

一点の穢れも無い、純粋な黒」

黒い胎児——鵜から離れた羽衣狐は、ようやく衣服を身に纏うてくれた。黒のセーラー服が、羽衣狐の白の肌を隠す。

「この黒き髪——黒き眼、黒き衣の如く完全なる闇を……！ さあ護っておくれ。純然たる、闇の下僕たちよ……！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ッ！

羽衣狐に心えるように吠えた京妖怪達は、一斉に奴良組に襲い掛かった。

奴良組も、鵜の『完全復活』を止める為に迎え撃つ。
半壊した城内で、京妖怪と奴良組入り乱れての戦いが始まった。
いや、すんげーの何の、人間の喧嘩とは迫力が違う。ハッキリ言

って、ただの人間の俺なんかが出る幕は、これっぽっちも無いね。人が踏み込める領域じゃねーよ、コレは。マジ半端ねえ。がしやどくろの頭の上で、大人しく観戦してるよ。あんなおっそろしい戦いに入ったら、俺、数秒でモノ言わぬ骸と化す事間違いないだぜ。

そんな事を思っていたら、俺を乗せてるがしやどくろが突然動き出した。

「んおっ！？ 何何！？ どこ行くの？」

「決まってるでしょ！ 羽衣狐様をお守りするのよ！」

当然とばかりに狂骨が答えた。

ああ、なるほどね。いやいや、なるほどねじゃねーだろ！ がしやどくろの頭の上とは言え、俺も戦いの渦に入る事になるじゃん！

「ちよっ……！ 狂骨タイム！ タイムタイム！」

「うるさいわね！ アンタは、ココで大人しくしてればいいのよ！」

「戦場に入る事自体が恐ろしいの！ ビビり舐めんな！」

しかし、俺の必死の抗議も虚しく、がしやどくろは狂骨の命令で奴良組に突っ込んでいく。

もはや俺に出来る事は、落ちないようにがしやどくろの頭にしがみ付き、巻き添え食わないように身を低くするだけだ。ヤベツ、超帰りでえ。

「こっから先は行かせないぞー！」

がしやどくろが、誰かの行く手を塞いでるようだ。

ちよつと顔を上げて見ると、百鬼夜行を率いてた男と、見覚えのある女の子が居た。女の子は、前に相剋寺って場所で会った陰陽師だった。

俺が少し懐かしく思っていると、隣に居る狂骨が殺気を出しながら口を開いた。

「羽衣狐様の積年の夢……破らせる訳にはいかない！」

彼女の声を合図に、がしゃどくろが大きな骨の手を振りかぶる。目の前の二人を叩き潰さんと、重力に従って振り下ろされた。

「避ける、ゆら！」

「わかつてる！」

百鬼夜行を率いる男が、女の子に叫び、がしゃどくろの手を避けた。避けた拍子に、床がメキメキと鳴って新たな穴が空いた。デカイ図体してるだけあって、力は強いな。

それと、陰陽師の女の子は、ゆらって名前のような。俺よりも若いのに、臆せず妖怪と戦う辺り、良い度胸してる。何か観てるだけの自分が、恥ずかしくなってきた。何、この劣等感？

いやしかし、妖怪同士の戦いつてマジで激しいな。デカイがしゃどくろの頭に乗ってるとは言え、ココに居る方が危なくない？ 絶対上の方が安全圏だよ。そう思いながら俺は、羽衣狐が居る上に顔を向けた。不完全体の鵜の側には、羽衣狐と陰陽師らしき人が居た。え？ 陰陽師？ 俺は目を凝らして、よく上を見る。見間違いではなく、やはり陰陽師が羽衣狐と対峙していた。それも、ゆらと同じく相剋寺で見た事ある陰陽師だ。確か、塵地蔵の奴に憑りつかれた事のある奴だ。

ソイツが、不気味な武器を構えて羽衣狐に挑む。

「飽きたおもちゃは、要らんぞ……！」

羽衣狐が言葉を発した直後、スカートの下から生えてる複数の尻

尾が、陰陽師の体を貫いた。易々と貫かれた陰陽師の体から、赤い液体が前後に噴き出てる。

「秋房義兄ちゃん!？」

同じく下で様子を見てたゆらが、悲鳴のような高い声を上げた。当然の反応だろう。俺も声こそ上げないが、また気分が悪くなってきた。俺も飽きられたら、あんな目に遭うのかな？

「哀れな男だ……。お前の出番は、とつくに終わっていたと言っのにのう？」

興味が無い、と言う風に羽衣狐が言った直後だった。

貫かれた『秋房』の体が、突然崩れたのだ。人の形を崩して、驚く羽衣狐の周囲を走るのは『水』だった。

何が起こってるのか解らず、混乱してると不意に声が聞こえた。

「やはり、秋房の戯言はよく効く……!」

上をよく見ると、壊れてない階に別の陰陽師が居た。やっぱり相剋寺で観た事ある奴で、目つきの悪い黒髪の陰陽師だ。

「玉碎覚悟と思わせるにはもってこいだな、秋房ヤッのツラは。飽きやすい狐なら……必ず壊すと思っていたよ……!」
おまえ

羽衣狐の行動は、全部計算済みだったらしい。

どうでもいいけど、目つきが悪いせいか笑みが極悪ツラだぞ。俺より年下っばいけど、全然俺なんかより恐いよ。親の顔が見てみたいぜ。

そんな極悪ツラの陰陽師の策に嵌まった羽衣狐は、人の形を崩し

た水を全身に浴びて濡れる。ちょっと色っぽいじゃねーか、と思ったのは秘密だ。

すると、濡れた羽衣狐の背後に、別の陰陽師が現れた。長身で、優男な顔立ちだが、雰囲気が何かヤバい感じた。水使いの陰陽師と同じで、黒の衣装を纏ってる。

「学べよ、魔魅流^{まみる}。水と雷……滅っ……！」

魔魅流とか言う陰陽師が、上げた右手で何か仕掛けようとした時、羽衣狐の尻尾が動いた。

防御に回った魔魅流は、尻尾の打撃を受けて壁に叩き付けられた。羽衣狐は、魔魅流を放っておいて水使いの陰陽師の前に近付いた。

「何じゃお前は？ 妾を騙そうとしたのかえ……？」

水使いの陰陽師は何も答えず、ジッと羽衣狐を睨んでる。陰陽師って、マジで皆良い度胸してるな。その度胸を、少し俺に分けて欲しいよ。

「嘘をつく陰陽師か……。今度は、お前が妾を楽しませてくれるのか？」

「……ハッ、何言ってるんだ？ こっちは、お前と闘う気なんて毛頭無いんだが？」

あ？ どういう事だ？

俺が水使いの陰陽師の言葉に訝ると、羽衣狐は笑みを浮かべた。

「ほう、そうか。それは残念じゃ」
「何？」

水使いの陰陽師が訝った時、羽衣狐は何故か後ろに跳んだ。
急な行動を怪訝に思った俺は、羽衣狐が跳んだ先を見た。

「あっ!？」

見た瞬間、俺と狂骨の声が重なった。

何故なら、羽衣狐が跳んだ先——鵜の真上辺りにデカイ石の杭みたいな物が浮いてるのだ。多分、陰陽師が仕掛けた物だろう。羽衣狐の注意を自らに引き付けて、隙が出来た瞬間にあのデカイ石を鵜に刺して倒すって算段だったんだろうな。

しかし、その目論みは羽衣狐に看破されてたようだ。跳んだ羽衣狐は、全ての尻尾を勢いよく振り抜き、デカイ石を叩く。打撃を受けたデカイ石は、半壊した城の屋根に叩き落とされた。

真の策を破られた水使いの陰陽師が、苦虫を噛み潰すような顔になった。

逆に羽衣狐は、水使いの陰陽師の反応を楽しむように笑ってる。

「残念じゃったのう、嘘をつく陰陽師よ。お前のように“虚”を衝く人間を、妾はもう一人知っている……! まあ、そ奴はお前と違って、度胸の無い男でのう……現代では、確か“ヘタレ”と呼ぶんじゃったな」

「ソレって俺の事!？」

思わず俺は、半ば反射的に声を上げた。

だって、この中でヘタレと言ったら俺以外に誰も居ないでしょう。うわ、自覚はしてるけど、他人に言われると何か傷つく。後で文句言つてやる。まあ、言えただけだね。

まあ、羽衣狐と鵜が無事で一安心か。

しかし、そう思ったのもつかの間、今度は奴良組のリーダーの男が、羽衣狐と水使いの陰陽師の間に割って入った。アイツ、いつの

間にあんな所に？ しかも、ちょっと恰好が変わって、服の中から沢山の剣や槍が出てる。オイオイ、アイツ何て妖怪だよ？

半壊した城の屋根で、刃の男は羽衣狐と対峙する。

「お前が、親父の敵だ！^{かたき} 羽衣狐っ！」

「その顔……ぬらりひょん！ また妾の邪魔をするかっ！」

——「うおおっ！ 二人とも急に激昂して、刃と尻尾を激しくぶつけ合いだしたぞ！」

俺が驚いてると、周りの妖怪も急な展開に動揺してる。

「リ、リクオ様！？」

「いつの間に上に！？」

リクオ？ ソレが、羽衣狐と闘ってる妖怪の名前か？ チツ、顔だけじゃなくて名前も何かカッコイイじゃねーか！

それにしても、羽衣狐はリクオの事を『ぬらりひょん』って呼んでたけど、どういう事だ？ 総大将のぬらりひょんは、俺が会ったあのデカ頭の爺さんじゃないのか？ それとも何？ 親戚か、息子か、孫か何かか？

俺が疑問に考えを巡らせてると、狂骨が声を上げた。

「ちょっと人間、がしゃどくろ、何してんのオ！？ ちゃんと見張ってなさいよー！」

「えっ！？ 俺も！？」

「あいっ？」

俺は狂骨の下僕なのか？ 納得いかねえ……。がしゃどくろは、何で怒られたのか解ってないのか、アホな声を出してる。

んなアホなやり取りしてる間に、戦いは激しさを増していった。

上では羽衣狐とリクオの大將戦、下や途中の階じゃ百鬼夜行同士の激突。もう、人間の常識を超え過ぎてて、現実なのか夢なのか解らない状況だ。つか、妖怪の戦場でいまだ生き延びてる俺って凄くない？

上の大將戦もスゲー事になってるよ。沢山の刃を操るリクオと、九尾を駆使用する羽衣狐の戦いが屋根で続いている。途中から羽衣狐はいつも持ち歩いてる黒鞆から鉄扇を取り出した。その鉄扇が、人の倍以上の大きさになったのには、マジで度肝抜かれたよ。しかも硬くて刃のように鋭いから、メチャクチャ物騒な代物だ。リクオも無数のような刃の雨を降らせて反撃に出たけど、難なく防がれてしまった。ゆら達も加勢してるけど、戦況はあんまり変わってないな。しかし、一人対複数って……正義側の特権か。

それにしても、羽衣狐って強えな。尻尾は勿論、鞆や尻尾の中から武器を取り出して使ったり、戦法が多様だ。ほぼ一方的で圧倒的だ。

けど、ちょっと引つ掛かる事がある。たまに、羽衣狐の動きが鈍る時があるんだ。一瞬なんだけど、何か怯むって言うか、戸惑ってるって言うか。上手く言えないけど、とにかく動きが鈍る瞬間がある。おいおい、まさか漫画とかにある“負けフラグ”じゃねーだろうな。ああ、くそっ！何だか嫌な予感がしやがる。こういう時に来るなよな、マジでさ。

戦いが進む中、鵜の復活の時も近付いてた。黒の胎児の塊に亀裂が走り、ガラスが砕けるような甲高い音と共に一部が割れた。大小の破片が、城の中に降り注ぐ。一見幻想的な光景かもしれないけど、ガラスの破片のような物が降ってくるなんて、物騒以外の何物でもない。実際、俺落ちてきた破片で頬切ったぞ！

「いつて！ ちょっと……あぶ、危なっ！」

ホント、コイツ等は他人^{ひと}の迷惑考えてないよな！ デケー声上

げたり、破片撒き散らしたり、もう嫌だ！

「おお……おお……！ 晴明……待ちわびたぞ！」

復活間近で、羽衣狐は実に嬉しそうだ。

でもさ、ちよつとは俺達下の連中の事も気遣ってくれないかな？
いまだに小さな破片が降り注いできて、危険地帯になってんだよ！
いてっ！ ちよつと大きめの破片が、肩に刺さりやがったっ……
……！ も、もう少しズレてたら、あ、ああ、頭に刺さってたぞ！？
こ、恐エエエエエエ！ マジ帰りてエエエエエエエ！
ビビりながらも破片を抜いてると、周りの妖怪達がまた騒ぎ出した。

今度は何だよ？ と思いながら顔を上げた。降り注ぐ破片一枚一枚に、何か映ってる。どれも知らない女で、着ている服も周りの風景も古い。

「これは、羽衣狐様の記憶……！？」

欠片に映ってる映像を観て、妖怪達がざわつく。どうやら羽衣狐の記憶が、鵺の欠片に映り込んでるようだ。

黒の胎児が割れてきて、鵺が生まれそうって事は、そろそろ戦いも終わりだな。

「そうだ……憎きぬらりひょん……！ お前達さえいなければ、晴明にもっと早く逢えたのじゃ……！」

過去を思い返し、邪魔をされてきた怒りが込み上げてきた羽衣狐は、再びリクオに牙を剥いた。

尻尾を叩き付け、傷ついたリクオを倒す。明らかに羽衣狐の方が實力は上だ。こりゃ、リクオには悪いが、羽衣狐の勝ちで決着だな。

俺がそう思い、羽衣狐がリクオにトドメを刺そうとした時だった。一枚のデカイ欠片に、映像が映った。小さな黒髪の少女が、着物姿の男を刺す場面だ。ソレを観た瞬間、羽衣狐の動きが止まった。

「な……何だ、あの記憶は……！？」

「二代目！？」

「鯉伴様りはんが刺されておる……！」

映像を観て、また妖怪達が騒ぎ出す。

二代目？ 鯉伴？ 誰で何の事だ？ 訳が解らん。それに、あの鯉伴とか言う男を刺してる女の子って、もしかして……。

俺が映像に映る少女に、一抹の疑問を抱いた時だった。

「うう……うううううううう！」

上に居る羽衣狐が、突然頭を抱えて苦しみ出した。

「羽衣狐様！？」

「お姉様！？」

俺と狂骨の声が、同時に上がった。

——おいおい、何か解ないけどヤバいんじゃないの！？ 苦しんでるのもそうだけど、そのせいで隙が出来てるよ！ 絶対ヤバいつて！ 何で、こんな時にアイツの側に誰も居ないんだよ！？

内心で慌てると、案の定ゆらが近くで何か仕掛けようとしてた。だが、苦しみが引いたのか、羽衣狐が尻尾による打撃を繰り出す。

しかし、その攻撃は水使いの陰陽師に防がれた。

ちよつと雲行きが怪しいぞ。俺の中の嫌な予感も、どんどん強くなつていつてるし……。

「どうすればいい……？ どうすれば……？」

時間はあまり無い。マジで早く何か考えないと、手遅れになっちゃう。

——ああ、くそっ！ ここからじゃ何しても間に合いそうにねえ！
せめて、羽衣狐の側に行ければ手もあるんだろうけど、生憎俺は空飛べないし……ん？ いや、待てよ。自力で空は飛べないけど、ソレに似た体験を最近したような……ああっ！
思い付いた俺は、すぐにがしゃどくろに頼んだ。

「がしゃどくろ！ 俺を羽衣狐に向かってブン投げろ！」

「あいゝ？」

「ちよっ……！ アンタ、何勝手な事……！」

「頼むから早くしてくれ！ 時間が無いんだ！」

狂骨が騒いでるが、構ってる暇は無い。何か上の方で、ゆらが妙な術を使ったのが見えた。マジで時間無えんだって！

「わかりましたゝ！」

「羽衣狐に何か言われたら、全部俺のせいにすればいい！」

怒られるの慣れてるからな！

がしゃどくろの大きな手が、俺の体を掴む。

上を見ると、リクオが刀を杖代わりに立ち上がってる。

ギリギリか？ 間に合うか？

「はいゝ！」

妙に気の抜ける声を発して、がしゃどくろは俺を上に向けてブン投げた。

俺はミサイルの如く速さで、上に向かって飛んでいる。顔にかかる風圧が強過ぎて、目は開けられないし、呼吸もロクに出来ない。土蜘蛛の暴走を抑える為に、羽衣狐に投げられた時もこんな感じだったな。まさか、人生で二度も風になるとは思わなかった。

次の瞬間、俺の体に二つの痛みが走った。

まず一つは、何かにぶつかった衝撃だ。俺の作戦じゃあ、がしやどくろに投げてもらって、羽衣狐を体当たりと言う少々乱暴な形で庇い、相手の攻撃を凌ぐってヤツだ。がしやどくろの奴が、ちゃんと狙い通り羽衣狐目掛けてくれたなら、ぶつかった相手は羽衣狐だ。そして、もう一つは背中を感じた痛みだ。何かで背中を斜めに斬られた感じた。

ん？ 斬られた感じ？ おかしいな……俺の計画じゃあ、俺も攻撃を凌ぐ予定だったのに、どうしてだ？ ああ、失敗したんだな。すぐに答えが出るとは、実にイージーな問題だ。

「人、間……？」

上から声が聞こえてから、顔を上げてみる。ソコには、俺を見下ろす羽衣狐の顔があった。見たところ、傷らしきモノは無い、な。代わりに俺が痛みを受けてるって事は、羽衣狐を庇う事は出来たようだ。まあ、良しとしよう。ビビりな俺にしては、上出来じゃないか。

「人間……？ 人間！？ しっかりせぬか！」

羽衣狐が、俺を抱えて何か叫んでる。

俺の事、心配してくれてるのか？ ヤベツ、超嬉しい。

しかし、好きな女を庇って傷つくって、どこの主人公だよ、俺は？ でも、背中をバツサリ斬られて死んだら、カッコ悪いよな。まあ、俺は漫画の主人公じゃないからな。

「貴様……ら……！」

聞こえてくる羽衣狐の声が、震えてる。

もしかして、俺の為にマジで怒ってるのか？

「ぬらりひょん………！ 陰………陽師………！ 貴様等っ！ よくも、妾のお………！」

羽衣狐の顔が、見る見る憤怒の表情に変わっていく。

あー、ところで羽衣狐様？ 俺の為に怒ってくれてるところ悪いですけど。

何か俺、無事っばいです。

九ノ怪：開戦（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

俺「はい。じゃあ、早速質問第一号を紹介します。投稿者：マキサさん。いつも感想ありがとうございます。

んで、質問は『主人公に質問、羽衣狐とうまくやれる自信ありますか？ あと狂骨フラグを立てますか？』。

あゝ、羽衣狐様とは…… 上手くいくかないって言うか…… 何か、一生弄られ続ける気がする。

それから、狂骨フラグ？ マキサさん、貴方は俺に死ねと？ なんかもん立てようとしたら、蛇のお仕置きが待ってますよ！ 目玉喰われちゃうよ！ 恐っ！」

羽衣狐「二つ目は…… 『羽衣狐様に質問、奴良組との戦いを終えたら、そのまま主人公とともに平穏な暮らしをしますか？』。人間風情が、妾に質問じゃと？」

俺「いや、妾が質問に答えようって、前回の後書きで言ってたじゃないですか」

羽衣狐「ふん。戦いが終わった後は、勿論清明と共にこの世を闇で覆い尽くし、理想の世界を創るのじゃ。おもちゃに構つとる暇などない」

俺「本人の前で、そんなハッキリ言います！？」

羽衣狐「じゃが、まあ…… 空いた時間に付き合ってやらんでもない」

俺「……コレ、何て属性？」

まあ、いいや。次の質問。投稿者：暁 零さん。『羽衣狐様！ 普段のセーラー服以外に着る服は無いんですか？ 例えばメイド服とか……』。羽衣狐様のメイド服……」

羽衣狐「そういうのが好きな者を、現代では“オタク”と言うのじやろ？ そんなにメイド服が好きなら、自分で着ればよかるう。妾は持っておらぬ」

俺「いや、男がメイド服着てもキモいだけですから……。他の服は無いんですか？ 勿論、普通のです」

羽衣狐「無い事も無いが、今の服が一番気に入ってる」

俺「そうですか。二つ目は、『赤夜叉先生に質問です。番外編等って執筆されたりしますかね？ 例えば、日常編で、皆で海水浴に行ったりとか……』」

作者の代わりに、俺がお答えします。時間の余裕とアイツの気分次第です。でも、海水浴は行きたいなあ。羽衣狐様の水着姿……超見てえ……！」

羽衣狐「妾の裸なら、たまに見ておるじやろ？」

俺「ブホッ!？」

質問ありがとございました！

質問は、引き続き募集中です。

十ノ怪：復活

依代の記憶が何度も脳裏を過り、頭が割れるような痛みの中で、不覚にも妾は隙を作り、四百年前と同じように陰陽師の破軍を受け、てしまった。

目の前には、祢々切丸を待つてぬらりひょんが迫ってきておる。破軍を受けた妾の身体は、自由に動く事が出来ぬ。これでは避ける事も叶わぬ。

しかし、彼奴の刃が妾に届く事は無かった。刃が振り下ろされる寸前に、妾の身体に突然衝撃を受けた。視界に入ったのは、妾のよく見知った顔じゃった。まさか、そんなハズは、と思つた時には既に遅かつた。ぬらりひょんの振り下ろした刃が、妾を庇つた者の背を斬り付けたのだ。背に傷を負い、崩れ落ちる者の身体を咄嗟に抱きかかえた。

「人、間……？」

妾に抱えられておるのは、紛れも無く妾の恋人じゃった。信じられぬ事じゃが、妾を助ける為に文字通り飛び込んできたようじゃ。馬鹿な男だ。力も何も無いただの恐がりな人間は、狂骨達の側で大人しくしておればよいものを。それなのに、どのような手段を使つたかは知らぬが、妾を助ける為に身体を張りおつて……愚か者めが。

「人間……？ 人間！？ しつかりせぬか！」

気がつけば、妾は声を荒げておつた。しかし、腕の中に居る人間は妾の声には応えぬ。背中を見れば、赤き血が服に滲み広がつておる。

「貴様……ら……！」

動かぬ人間を抱える妾の中で、怒りにも似た感情が込み上げてきおった。

いや、コレは怒り以外の何物でもない。妾の腕の中に居る人間を傷つけられ、妾は怒^{いか}っておる。

「ぬらりひょん……！ 陰……陽師……！ 貴様等っ！ よくも、妾のお……！」

憎きぬらりひょんと陰陽師め、清明の出産を邪魔するだけでなく、今ある妾の大事なモノまで奪おうとするか。

この人間は、妾を妖と知って尚惚れてきおった変わり者じゃった。鵜ヶ池で、こ奴の想いを知った時は正直驚いたものだ。面白い人間だと思つて余興に側に置いていたが、まさかここまでとは思わなんだ。

そして、不覚にも心が揺れ動いた。清明の父も人であつたが、妾の正体を知ると恐れをなしてしまった。当然の事じゃろう。だからこそ、妾は正体を隠していたのじゃから。

しかし、この人間は違つた。妾を妖と知つても、好いてきおつた。真おかしな人間じゃ。

そんな人間を側に置いておる、妾も充分におかしいのやもしれぬ。千年ぶりに人から愛され、おかしくなつたようじゃ。

どうやら妾も、この人間を――。

「あああああああああああああああああああああ！」

あらん限りの声を獣の咆哮のように上げ、妖力を全身に巡らせる。妾の身体を縛る鬱陶しい破軍を破り、奴等を血祭りに上げねば怒

りが収まらぬ。これ程殺氣立ったのは、久しぶりじゃ。
殺意のこもった妖力を以て、妾を縛る破軍を破った。

「なっ！？ そんな……破軍が破られ……！？」

陰陽師の娘が騒いでおるが、このような小細工で妾を完全に押さえられると思うてか。四百年前に動きを封じられたのは、不覚にもぬらりひょんから受けた太刀の傷から妖力が抜け、力が弱まったからだ。

とりあえず、陰陽師の娘は後回しじゃ。まずは、妾から大切なモノを直接奪ったぬらりひょんを、この手で殺してやろうぞ。

「こんな余興は、もう終いじゃ……！」

「いででで！」

「えっ！？」

憎きぬらりひょんを血祭りに上げようとした時、妾の腕の中から声が上がった。聞き覚えのある声に、ゆっくりと顔を下に向けた。ソコには、

「す、すいません。ちょっと力、緩めてくれませんか……？」

苦笑いを向けてくる、妾の愛しき人間の顔があつた。

*

いや、マジで痛^{いて}えわ。俺を抱く羽衣狐の腕力が、半端じゃねーんだよ。

お陰で背中中の傷が、ズキズキ痛んで辛い。

俺が目を開けて声をかけると、羽衣狐が驚きと心配の混ざった顔を近付けてきた。この時、胸がドキドキしたのは秘密だ。つか、羽衣狐に抱えられてる時点で、もうドキドキもんだよ。

「に、人間……！ お前、無事なのかえ……！？」

「え、ええ、まあ何とか……」

頭を搔きながら俺は、安心させるように笑って答えた。

——言えねえ……。庇った時に斬られたと思っただのは、俺の勘違いだったなんて、口が裂けても絶対言えねエエエエ！

皆にだけ教えるけど、実は俺、斬られて無いんだ。確かに、リクオの刀を背中に受けた瞬間、痛みはあったよ。けど、後から斬られてない事に気付いた。硬い木刀か何かで叩かれたような、そんな感じだった。何で斬られてないのか、理由は解らないけど、九死に一生を得たってトコかな。まあ、叩かれた時の衝撃で、塵地蔵くそじじいの手下に斬られた傷がちょっと開いちゃったけどな。

いや、すぐに無事を知らせようと思っただけで、何か羽衣狐が急にぶちギレて、言い出しづらくなっちゃった訳よ。多分、俺が死んだと勘違いしたんだろうな。俺自身も、コレは死んだなって思ったからな。いや、しかし……ぶちギレる程、俺を想ってくれるのは嬉しかったけど、ますます出づらくなって、どうしたもんかと悩んだよ。

そんな参ってる時に、羽衣狐が強く抱きしめてきて、傷に響いて痛み能耐えきれず、さっき声出したって訳だ。

俺が生きてる事を知って、羽衣狐は安堵したように顔が緩んだ。

「おお……！ よくぞ、よくぞ生きておった……！」

目の前に敵が居るのも構わず、羽衣狐は俺を抱きしめた。

心配してくれたのはスゲー嬉しいけど、他人が見てる前で抱きつかれると、恥ずかしいな。

でもまあ、俺も羽衣狐も何とか無事で、一安心だな。そう思った時だった。

「うう……ううあああああああああああ！」

「羽衣狐様!？」

安心したのも束の間、また羽衣狐が苦しみ出した。ホントに、急にどうしたってんだ!? 様子がおかしいにも程があるぞ!

「羽衣狐様! しっかりして下さい!」

俺まで取り乱す訳にもいかねえ。肩を掴んで、羽衣狐に声をかける。が、まるで俺の声が届いてないようで、頭を抱えて苦しんでる。そして次の瞬間、羽衣狐の体から“何か”が出た。

驚愕して目を丸くする俺の前に現れたのは、狐。女物の着物を纏った、狐だった。

「なっ……何故じゃあああああ!？」

羽衣狐の体から出てきた狐は、苦しそうに叫んだ。

間近で聞いた俺は、まるで糸が切れた人形のように動かなくなつた羽衣狐の体を抱えて、少し後ずさつた。とんでもない迫力で、マジでビビッちまった。半ば啞然として、苦しむ狐を見る。

「あり得ぬっ……! この依代には、完全に乗り移っていたはず……! なのに何故……!? あ……頭が割れるように痛いっ……!」

頭を抱え、もがき苦しむ狐は、徐々に人の姿に変わっていった。声から察するに、女のような。変化していく姿も、女になつてゐるし間違いない。

「何故じゃ！？ 四百年間待ちに待った……最高の依代と言つてたではないか！？」

と言うか、目の前で苦しんでるこの狐女って、もしかして……。

「羽衣狐、なのか……？」

じゃあ、今俺が抱えてる女は誰だ？ 何がどうなつてんだ？

「麿地蔵！」

俺が目の中の状況に混乱してると、羽衣狐が声を上げた。

羽衣狐の見る先には、屋根に腰を降ろしてる麿地蔵が居た。相変わらず、気味の悪い笑顔が張り付いてやがる。

「貴様、妾を復活させた時……何かしおつたか！？」

麿地蔵に向かって、声を荒げる羽衣狐。

あ？ あのクソジジイ、俺だけじゃなく羽衣狐にも何かしたのか？俺が疑問を抱くと、羽衣狐は急に大人しくなった。何か考え込んでるみたいだ。

ちよつと声をかけてみようかと思つた時、今度は鶴の方で異変が起こつた。

黒い胎児の塊の大半が、派手に砕け散つた。その中から、人影が出てきた。

もしかして、アレが鶴か？

「せ……」

羽衣狐が、血相を変えた顔で人影に声を飛ばした。

「せいめい！ お前……。お前が後ろで、糸を引いておったのか！？」

羽衣狐らしくない、取り乱した様子で問い掛ける。

「答えよ、晴明！」

しかし、晴明と呼ばれる人影は、すぐには答えない。

おいコラ、親の質問にはすぐに答えやがれ。俺が言えた事じゃないけど。

「うっ……消える……！ 痛いっ！ 焼けるように痛い……！」

その間も、羽衣狐は苦しみ続ける。

「すまぬ、母上……」

人影——鵜が、初めてこっちに顔を見せた。長身でたくましい体つきで、髪は白く長く、顔は綺麗に整ってる。

一見、美青年のように思えるが、“目”は不気味だった。黒く染まった目は、人間とかけ離れた畏れが秘められてる感じがした。

見た瞬間に、俺の本能が訴えた。

——コイツはヤバイ……！

一気に冷や汗が流れ出て、体は竦んだように動けなくなった。

一方、羽衣狐は違った。息子と相對した瞬間、さっきまでの苦し

みが嘘のように止まって、頬を赤くしてる。

「うつ……。晴明……。お、お前が望んだ事なのかえ……？」

「すまない……。『あの女児を母上に』と……。地獄から宛がったのは、私です。こうなるとは、思っていなかった……」

あの女児ってのは、俺が抱えてる女の事か？ それに地獄って……。

「おお……。おお……。もういい……。もういいのじゃ……。！ 近づ……
近づ……。！」

さっきまでの怒りも痛みも消えて、羽衣狐は我が子——鵺に近付く。形はどうあれ、息子と再会出来て嬉しいんだろう。

手を伸ばし、愛おしそくに鵺を抱きしめた。

「おお……。晴明……。やっと……。やっと、この手に……」

感動の再会、かと思われた。

城の下の方から、グツグツと嫌な音がする。何か煮えたぎるような、灼熱の熱さも伝わってくる。

俺を含めた全員の注目が、下に向けられた。

ソコには、マグマのような赤い沼があった。燃え盛る炎は、禍々しい黒の色をしている。

全員が動揺してる中、鵺が口を開いた。

「アレが……。『地獄』です。私が千年間いた……。妖も人も……。還る場所です」

鵺の言葉を聞いて、俺は熱いのに悪寒を感じて、唾を飲み込んだ。

——あの、黒いマグマのような所が、地獄……。あんな所に落ちたら、絶対に助からないな。つか、あんなトコに千年もいたのかよ……？

下にある地獄を見ながら、俺が思った時だった。

「ヒッ！」

突然、悲鳴が耳に入った。

急いで顔を戻して見ると、羽衣狐が地獄に落ちようとしてた。まるで、見えない力に引っ張られるように。

その様子を、鵜は見下ろすだけだった。助けに行こうと言う動きが無い。

「千年間ありがとう……偉大なる母よ。あなたのおかげで、私は再び道を歩める……」

「羽衣狐エエエエ！」

俺は声を上げ、気がつけば足場を蹴って落ちてた。腕に羽衣狐が入ってた女を抱えたまま、落ちた。

この時、俺は何も考えてなかった。鵜の言葉も耳に入らないし、ビビりもクソも関係無かった。

ただ、失いたくなかった。見捨てなくなかった。

俺は確かに、自他共に認めるヘタレだ。痛いのも恐いのも嫌われるのも御免だ。

けど、好きな女を見捨てるような、最低最悪なヘタレになるのは、もっと御免だ。

重力に従って落下する俺は、例の女も抱えてる事もあってかなりの重さで、落下速度も加速していった。もう少して、羽衣狐に追いつける。殆ど無我夢中で飛び降りた感じだから、軌道がズレてたらどうしようと思っただが、大丈夫そうだった。

「羽衣狐エエエエエエエエ！」

叫びながら俺は、右手を伸ばした。

俺の右手は、羽衣狐の着物を何とか掴んだ。すぐに引っ張ろうと腕に力を込めるが、なかなかキツイ。腕が“つり”そうだ。

「ああああああああああ！」

辛いのを我慢して、無理矢理羽衣狐を抱き寄せた。抱えると、ハツとしたように羽衣狐が顔を上げた。

「お、お前……！？」

今初めて俺に気付いたみたいだ。

まあ、ソレはいいとして……こっからが問題だ。

——この後どうしよう！？

後先の事を全く考えてなかった俺は、二人を抱えながら地獄の沼に落ちていく。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！　今回ばかりは、マジで洒落にならねえ！

何も考えなかった事を今更後悔するが、もう遅い。

このまま地獄に堕ちて、死ぬ。

今まで、何回も死ぬ事を悟って、運良く回避してきたが、流石に悪運尽きたろう。

完全に諦めた時だった。

「相変わらず無茶する人間だぜ」
ガキ

「えっ——ぐびゃっ！？」

聞き覚えの声がしたと思ったら、衝撃を受けて俺は悲鳴を上げた。落下の勢いが速く、女二人を抱え、オマケに背中には斬り傷があるから、三重の要因が重なって超痛かった。骨が折れたんじゃないか、と思った。

「いでで……！ な、何、が……おおおっ！？」

痛みに顔を歪め、何が起こったのか確かめようと目を開けた俺は、驚きの声を上げた。

何故なら、目の前に般若の顔があつたからだ。忘れられない般若顔は、驚く俺に言った。

「人間、ちゃんと護れよ。お前、羽衣狐ソイツの事好きなんだろう？」
「つ、土蜘蛛オオオオ！？」

俺達を助けてくれたのは、土蜘蛛だった。
地獄に堕ちる寸前で、土蜘蛛のデカイ手に受け止められたのだ。

十ノ怪：復活（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

俺「どうも。名も無き主人公です。それじゃあ、早速質問を紹介します。投稿者： 時光 火流那さん。『質問として、主人公の名前が出て来ないのは決まってるからですか？ それとも、やはりジユンキになるんですか？』。えー、俺の名前が作中に出ないのは、名前が無くても話が進行出来るからです。付けようと思えば出来るらしいけど、多分、名前は出て来ないと思います。正直、名前欲しいけど……」

羽衣狐「投稿者： サテライザーからの質問じゃ。『羽衣狐様に質問です。挙式をするとしたら神社でやりますか・それとも教会でやりますか・

PS、羽衣狐様のウエディングドレスが見たい……。』。そうじゃな……。仮に挙げるとすれば、教会かのう。和風の方が落ち着くのが、西洋の式にも興味がある。それから、例えウエディングドレスとやらを着ても、お前には見せぬ（キツパリ）」

俺「続きまして、投稿者： ミスターサーさんとキャラの四季さんからの質問。『羽衣狐殿、玩具が妖怪に……。まあ下級ですよ？

妖怪化したら、やっぱりハードになるんですか？ 弄るのを

うつす……この質問しているバカのキャラ、四季だ

主人公に質問、不老不死になったら何がしたい？』。最初は羽衣狐様にですね」

羽衣狐「そんなもの、今まで以上に弄るに決まっております」

俺「って言うか、妖怪化はしたくないっす。

えー、もし不老不死になったら、今まで以上に自堕落な生活をします。だって、食わなくても生きていけるって事は、働かなくても生きていけるって事と同じでしょう？ 超最高じゃん！」

羽衣狐「……お前は本当にクズじゃのう。親でも無いのに、何故か泣きたくなってきたわ」

俺「……本日最後の質問にいきます。投稿者： 十握剣さんからの質問。『羽衣狐と言えは奴良鯉伴の妻だった妖怪・山吹乙女です憑依していたとは言え最も鯉伴が愛した女性だったと思うんですが、その羽衣狐と恋人になって もリクオは何も感じないのでしょうか？

それとも羽衣狐本体と付き合うのでしょうか？ 』。あー、流石にコレに答えるのはネタバレになっちゃいますね。なので、気になる答えは本編で」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

十一ノ怪：終幕

俺は心底驚いて、目の前に居る妖怪やっを見上げてた。

出来る事なら二度と会いたくないと思ってたが、何の因果か俺と羽衣狐は地獄に落ちる寸前で、コイツに助けられた。

俺が知る中で、最も大きく狂暴な妖怪——土蜘蛛だ。

「お、おおお……！？」

全く予想もしなかった展開と意外な人物に、俺は驚きを禁じ得なかった。土蜘蛛のデカい手のひらの上で、尻餅について驚愕の顔で般若顔を見上げてた。

そんな俺を見て、土蜘蛛は鼻で笑った。

「ふんつ。羽衣狐から聞いてたが、相当な臆病者だなお前は」

——いや、臆病者じゃなくても、アンタ見たら誰だってビビるっつーの！

心中で叫んでやったが、勿論声には出さない。言った瞬間に殺されると思うから。

いや、しかし、まさか土蜘蛛に助けられるとは思わなかった。だって羽衣狐から聞いた話で、完全なバトルジャンキーのイメージが固まってたからな。例えそうじゃないにしても、絶対他人を助けるような性格キャラじゃないって思ってた。傍に居る羽衣狐——着物姿の本体の方ね——も俺と同じ考えみたいで、意外そうな顔をしてる。

一階の床に降ろされた俺は、羽衣狐の依代を寝かせて、恐る恐る土蜘蛛に訊いてみた。

「あ、あの〜」

「あ？」

般若顔から響く声に、思わずビビって体が跳ねる。ココに来る前に、どこかで誰かと一戦したのか、若干顔の左側に縦に斬られたような傷が縫ってある。その傷のせいで、余計に恐さが倍増してる。顔傷って、マジで恐えよな。

「いえ、あの……どうして、僕達を助けてくれたんですか……？」
「あゝ？ ああ、清明の奴が復活したから来たんだが、そしたらお前等が落ちてくのが見えてな。まあ、お前とはまた闘り合いたいと思ってたから、このまま死なすのは勿体ねえとついでに助けてやったのさ」

と言う事は、最初に土蜘蛛と会った時の騒動が起きなかつたら、俺達は地獄に落ちて死んでたって事か？ 何だか妙な因果だな。まあ、俺達を助けた理由は、土蜘蛛らしいっちゃあらしいな。

「あつ！ そうだ、羽衣狐様！」

まさかの土蜘蛛の乱入で、スッカリ忘れてた。慌てて俺は、傍に居る羽衣狐に向いた。

「羽衣狐様、大丈夫ですか！？ 怪我とかありませんか！？」
「えっ！？ あ、う、うむ……お前のお陰で、怪我は無い。大丈夫じゃ」

両肩を掴んで訊くと、羽衣狐は若干頬を赤くして、戸惑った様子で答えた。

見たところ、目立った怪我は無いから本人が言うように大丈夫だろう。

「良かったあ……！」

羽衣狐が無事で、俺は肩の力が抜けると同時に安堵の溜め息をついた。

本当に良かった。羽衣狐に何かあったら、どうしようかと思った。俺が安心して力を抜かしていると、羽衣狐が恐る恐ると言った感じで声をかけてきた。

「す、済まぬのう……。妾^{わい}の為に、またお前を危ない目に遭わせてしまった……」

「いや、まあ……確かに怖かったですけど……羽衣狐様が無事で良かったです。だから、羽衣狐様が謝らないで下さい」

「お前……」

そう、羽衣狐は何も悪くない。少なくとも、俺の中ではね。

だから俺は、上に佇む清明を睨んだ。あの野郎、自分の母親が地獄に落ちるのを、ただ見てやがった。自分の母親を見捨てようとしてやがったんだ。家族に迷惑かけてきた俺が、偉そうに言えた事じゃないけど、アイツはマジで気に入らない。

清明は半壊した城の真上から、ジツと下を見下ろしてる。目が合ったような気がして、ビビって視線を逸らした時だった。

「清明え……！」

隣から、身を震わせるような低く、恐ろしく響く声が耳に入ってきた。

こんなおつかない声の主は、一人しかいない。俺は灼熱地獄の近くに居ながら冷や汗を流し、恐る恐る隣を見上げた。

「清明エエエエ！」

ソコには、長年待った闘い相手を目にして、鬼神と化した土蜘蛛の姿があった。

「ヒイイ！」

その圧倒的で異様な迫力に、俺は度肝を抜いて情けなく尻餅をついた。

同時に、土蜘蛛は強力な脚力で床を蹴り、一度の跳躍で清明の前に出た。

「千年振りだああああ！」

興奮した声を上げ、拳を振りかぶり、清明を潰そうと勢いよく振り下ろす。

普通の奴なら、土蜘蛛の一撃に恐れ、慌てて避けるだろう。

しかし、清明は違った。

慌てた様子は微塵も無く、左手を前にかざし、五芒星が浮かんだ半透明の壁を作り、土蜘蛛の突きを正面から受け止めた。

表情こそ変わらないが、簡単に拳を止められた土蜘蛛は驚きを隠せなかった。

「何っ………！？」

「懐かしい顔だ」

おいおい、マジかよ………？ あのデタラメに強い土蜘蛛の拳を、止めやがった。

俺を含む全員が見守る中で、清明が動いた。

「滅っ……！」

一言発した直後、土蜘蛛が圧された。

「うおおおおお！」

大声を響かせながら、土蜘蛛は半壊した城の屋根から、落ちてくる。まるで、上から目に見えない力が降りかかって、下に圧されている感じだ。

「ウソッ!？」

「そんな土蜘蛛が……」

「滅っ……!？」

周囲に居る妖怪達も、驚愕した様子で落ちる土蜘蛛を眺めてる。当然だろう。特に京妖怪は土蜘蛛のデタラメな強さを、封印を解いて奴に会った日に目で見て知っている。だからこそ、土蜘蛛が一方的にやられてる姿が、信じられないのだ。

俺自身も、土蜘蛛のこんな姿は想像すらしてなかった。

「おおおおおおお！」

大気を震わせる声を上げる土蜘蛛は、地獄の穴に身を落とした。

「せいめいイイ！ 待てコラアア！」

地獄の穴で、土蜘蛛は這い上がろうと暴れる。

しかし、ソレは叶わなかった。土蜘蛛を地獄に引きずり込もうと、不気味な黒い手が何本、何十本も出てきている。炎で焼ける土蜘蛛の巨体を掴み、ズブズブと地獄の業火の底に引き込む。

衝撃の光景に唾然としてた俺は、ハッと正気に戻った。

「つ、土蜘蛛オオオオ!?」

弾かれたように俺は、土蜘蛛を助けようと立ち上がった。

「ならぬ! 人間、行つてはならぬぞっ!」

駆け出そうとしたが、後ろから羽衣狐に止められた。

俺は齒を食いしばり、握り拳を固めて、堕ちていく土蜘蛛を眺める事しか出来なかった。目の前で地獄に沈んでく土蜘蛛を見つめて、不意に涙が出てきた。

——何だよ……? 何なんだよ、この気持ちは……? この涙は……? 俺、何で泣いてんだよ?

土蜘蛛は最初に会った時、俺を陰陽師と勘違いして殺しにかかってきた。知らない奴に勘違いされて、殺されるなんて御免だ。勘違いで殺しにきた土蜘蛛の事は、正直あまり良く思つてなかったし、二度と会いたくなかった。

だけど俺は、その土蜘蛛に助けられた。でも、俺は土蜘蛛を助けられない。

——くそっ……! くそっ……くそっ……くそっ……!

自分でもよく解らない気持ちに、苛つきながら泣き続けた。

土蜘蛛が完全に地獄に沈みきった時、上から神経に障る声が聞こえた。

「フエツフエツフエツ……! 力の差も解らず突っ込みおつて……馬鹿な奴じゃ……!」

声を聞いた俺は、顔を上げて屋根に居る一人を睨んだ。視線の先に居るのは、刀らしき物を持つてる塵地藏だ。

あ？ んだ、あのクソジジイ？ 土蜘蛛を馬鹿にしたのか……？
よく解らない自分の気持ちに対する苛つきは、麿地蔵への怒りに
変わった。

そりや確かに、土蜘蛛は闘いにしか興味ない危ない脳筋馬鹿だよ。
俺だつて襲われたし、好きじゃなかった。けどな、それでもお前よ
りマシだ。遥かにマシ。

俺が静かに怒りを燃やしていると、麿地蔵は清明に近付いて行った。

「清明様。約束通り、刀をお持ちしましたよ」

麿地蔵が、清明に棒状の物を差し出した。やっぱり、アレは刀だ
つたようだ。

清明は刀を受け取り、鞘から抜いて刀身を露にする。少し遠くて
確認しづらいが、刀身はお世辞にも綺麗とは言えない。ハッキリ言
つて、ナマクラよりも酷いオンボロ刀だ。とてもモノを斬れるよう
には見えない。あんな使えない刀を渡して、どうする気だ？

そんなオンボロ刀を片手に、清明は京都の街を見渡す。

「随分、汚い街になってしまった。我々の棲むべきところには相応
しく……ない」

言葉の最後で、清明はオンボロ刀を横薙きに振るつた。

何も無い所で刀を振るつたのを見て、周りの一同はキョトンとし
てる。

だが、俺には予感があった。似たような場面を、漫画で見た事がある。
ゴクリツと唾を飲み込んだ直後、予感は現実と化した。

城の外で、激しい爆音が鳴り響き、大地が震えたのだ。外の様子
が見れなくても、俺には解る。さっきの清明の一振りで、街の一部
を破壊したんだ。

「きょ……京都が……!？」

上の階に居る妖怪達が、外を見て驚きと恐怖の混じった声を上げた。

俺の予想通り、京都の街が壊されたんだ。刀一振りですぐ破壊つて、ド●ゴ●ボ●ルかよ!? つーか、あのオンボロ何だよ!? スゲー威力じゃねーか! 見た目にスツカリ騙されたぜ!

「もう一度造り直さねばな……」

あーあ、とんでもない化け物が復活しちゃったよ。コレもう、世界終わったな。いや、核ミサイル撃ちまくれば勝てるか?

上に居る晴明は、オンボロ刀を指で軽く叩いて、感触を確かめる。

「うん、いい刀だ。ご苦労だった、山本五郎左衛門……!」

晴明が、側に居る塵地蔵に言った時だった。

「山本……!？」

「山本五郎左衛門だと……!？」

何か知らないが、奴良組の連中に動揺が走ってる。一部の連中だが、信じられないと驚愕の顔になってた。仲間内だけで何かゴチャゴチャ喋ってるけど、テーマ等だけで納得すんな。山本って誰よ? 俺は羽衣狐に目を向けて、視線だけで訊いてみた。すると、羽衣狐はかぶりを振って「解らない」と答えた。

そんなやり取りをしてると、塵地蔵が口を開いた。

「晴明様……正確には“山本の目玉”でございます」

正確にはって、余計解らなくなったわ。
不気味な笑顔で、塵地蔵は続ける。

「現世では塵地蔵と呼び下さい。“山本”は百にわかれておりますゆえ……混乱いたしますからな。それに、馬鹿な奴等の洗脳も解けますぞお……ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

よく解らねえが、アイツが塵地蔵じゃない“何か”だって事は解った。まあ、あんま解った事にならないけど。

まあ、あのジジイよりも今は清明だよな。

「まずは、この街を変える。その先に、私の望む世界がある……！」

——おいおい、ヤベーぞ！ あの野郎、京都の街吹っ飛ばすつもりだ！ あんなの連発されたら、あつという間に更地になるぞ！

世界を造り変える宣言をした清明の側で、塵地蔵が嬉々とした様子で言う。

「もえろもえろ。ワシの大願がようやく叶ったわい。妖も人もわしらの下僕じゃー！」

ああ、ダメつす俺。悪いけど、我慢の限界だ。臆病な性格も手伝って抑えてたけど、堪忍袋の尾が切れましたわ。ブツチリとね。

さっきのジジイの言葉から、うつすら予想はしてたけど、当たりみたいだわ。あのクソジジイ、自分が清明に続いて人や妖怪を下僕にする為に、羽衣狐を利用しやがったんだ。俺の大好きな羽衣狐を、道具みたいに利用しやがったあの野郎は、絶対に許せねえ。

塵地蔵に対して、並々ならぬ怒りを抱いた時だった。

「おい……」

上を見ると、リクオが晴明と対峙してた。刀を構えて、切っ先を晴明に向けてる。

「母を利用して……妖怪達おれたちをひつかきまわして……千年前に死んだ奴が、この世で好き勝手やってんじゃねえ……！」

——馬鹿かアイツ！？　んな化け物相手に、正面から挑むなんて自殺行為だぞ！　大体、お前羽衣狐との闘いで弱ってるだろうが！　しかし、そんな俺の心中の訴えが届くハズも無く、リクオは晴明に向かって突っ込んでいった。

突きを繰り出すリクオだったが、晴明は人差し指一本で止めちまった。止められた刃を凝視して、リクオは動揺して目を見開く。

対照的に、晴明は余裕の笑みを浮かべてる。

「成る程、祢々切丸か……。確かにいい刀だ。
だが、私を倒す程の力ではないっ……！」

刃を止める人差し指に、淡い五芒星の光が浮かぶ。

祢々切丸の刃に亀裂が何本も走り、次の瞬間、脆いガラスのように粉々に砕け散った。祢々切丸を砕かれたリクオは、半ば啞然とした顔になる。

「つか晴明のヤツ、強すぎにも程があるだろう！　絶対、誰も勝てねえよ、あんな化け物！」

「お前が鯉伴の“真の息子”か。力が足りんな……！」

啞然とするリクオを斬り殺さんと晴明は、刀を振りかぶる。仲間が何人か助けに動くが、距離的に間に合いそうにない。

絶体絶命と思われた時だった。

晴明に異変が起こった。リクオを殺そうと刀を持つ右腕が、突然崩れたのだ。腐った肉片のように、ベチャベチャと不快な音を立てて、中身の骨を露している。

「何……？」

自身の異変に、流石の晴明も驚きを隠せなかったようだ。目を見開いて、崩れかけた自分の腕を凝視してる。

しばし眺めた後、晴明は口を開いた。

「まだこの世に、身体が馴染んで無かったのか……。仕方ない」

晴明の言葉から、まだ身体が完全に出てこない事が解った。まあ、それでもヤバイ奴だって事に変わりはないけどな。

しかし、リクオも運が良い奴だ。もし晴明が完全体だったら、間違ひなく殺されてたぜ。

身体が馴染んで無いと知った晴明は、手を動かして城の中に穴らしきモノを出した。炎の門みたいな外見で、中身は何とも言えない空間が広がってる。

「ここは一旦引くでしょう。千年間ご苦労だった。鬼童丸……茨木童子……そして京妖怪たちよ。地獄へゆくぞ。ついてこい……！」

どうやら、あの門は地獄に通じてるらしい。

晴明の言葉に、京妖怪の大半が続々と地獄の門に入っていく。

あつ、待て待て！ ダメだ！ 今行かせたらダメだ！

「ちよっ……！ ちよっと待ってください、大将！」

「ん？」

慌てて俺が声を上げると、晴明が反応して顔を向けてきた。チッ、目が合っただけでビビッちまった。

「私の事か？」

「そ、そうです。その……地獄に行っちゃう前に、ちょっと用があるんです」

晴明の威圧感に気圧されながらも、俺は懸命に声を出した。ちょっと息苦しいけどな。

「私に用か？」

「いえ……。大将じゃなくて……。俺が用があるのは……」

一旦言葉を切って、俺は視線を移動させる。そして、ある人物に目を止め、指を指した。

「アンタだ……塵地蔵っ……！」

「ほぉ〜？」

名指しされた塵地蔵は、相変わらず気持ち悪い笑顔を顔に張り付けてる。

「アンタだけは、今ここでブチのめさなきゃ気が済まねえ……！」

晴明の奴も許せないけど、強すぎるからスルーだ。俺はリクオミたいに、馬鹿みたいに突っ込んだりしないの。

だから、俺でも勝ち目がありそうな塵地蔵だけでも、ここでぶっ潰す。アイツは羽衣狐を利用して、土蜘蛛を馬鹿にしゃがったんだ。ある意味、晴明よりも許せねえ。

「お、お前、何を言っている!?」

傍で羽衣狐が話しかけてくるが、悪いけど無視させてもらう。後で怒られるから、ソレで勘弁して。

俺の言葉に、麿地蔵は気味悪い笑いを零す。

「フェツフェツ……ココにも馬鹿が一人……!」

はい、馬鹿ですけど何か? 今さら他人に馬鹿って言われてもな、全然堪えねーんだよ!

「晴明様、しばしお時間をいただいてよろしいでしょうか? ワシも、あ奴を始末したいと思っておりましてなあ……!」

「いいだろう。手早く済ませろ」

「ありがとうございます……!」

向こうは、やる気のような。上等だよ、コノヤロー。ヤベツ、自分から誘つといて足が震えてきた。

俺が上に行こうとして、歩き出した時だった。

「止せっ! 行くな、人間!」

後ろから腕を力強く掴まれ、羽衣狐に止められた。

ああ、失敗した。羽衣狐をどう説得するか、全然考えてなかった。とことん計画性の無いな、俺って奴は。

「その、大丈夫ですから」

「妾に嘘をつくのか? お前一人で、大丈夫な訳なからう!」

凄い迫力で、羽衣狐が迫ってくる。手の方も、絶対に放さないと言った感じた。

それじゃあ、これならどうだ？

「約束します……！」

「約束、じゃと……？」

俺の言葉に、羽衣狐は怪訝そうに片眉を上げた。
一つ頷き、羽衣狐を見つめて言った。

「今度こそ負けないっ……！」

正直、何の根拠も無い虚言のような言葉だ。

でも、羽衣狐を説得するには、グダグダと話をするよりも短く、ハッキリとこっちの意思を表した方がいい。何を言われても、絶対に引かないって意思をね。

俺の作戦が上手く効いたのか、腕を掴む手が緩んだ。羽衣狐の顔は、どこか諦めの色が浮かんだ表情になってた。悪いと思いながらも、俺は羽衣狐の手から腕を離れた。
すると、

「羽衣狐様ー！」

聞き覚えのある声が、デカイ音と共に聞こえてきた。
見ると、がしゃどくろに乗った狂骨だった。

駆け付けてきた狂骨達を見て、羽衣狐は意外そうな顔になる。

「狂骨……がしゃどくろ……。お主ら、鬼童丸達と地獄に行ったのではないのか？」

「私は、行きません……！ 私の……私達の主は、お姉様だけだか

ら……！」

かぶりを振って、主は羽衣狐だけと言い切る狂骨。

ハッ、何だよコイツ。羽衣狐を一途に慕って、良い奴じゃねーか。他の形だけの薄情な連中とは、大違いだな。髑髏のアクセサリーの他に、生ハッ橋も奢ってやるか。一箱くらいなら、俺の有り金で買えるだろう。

「狂骨」

「な、何よ、人間？」

俺に声をかけられて、狂骨はムスツとした顔になる。どんだけ俺の事嫌いなんだよ、お前は？ 生ハッ橋無しにするぞ？

「羽衣狐様と、羽衣狐様の依代だっけ？ 二人の事頼むよ。がしやどくろもよろしく」

「あいゝ！」

やっぱり、がしやどくろの声は妙に気が抜けるな。

まあ、いいや。そんじゃ行くか。意を決して、俺は無事な階段に向かつて走り出した。羽衣狐が何か言おうとしてたが、今は聞いている暇は無い。あんまり時間をかけると、相手が何するか解らないからな。

道を開ける妖怪達を脇目に、俺は階段を上っていく。

その時、計画性の無い俺は、ある重大な事に気付いた。

——俺、丸腰で策とか何も無いやん！

アホな俺は、作戦も何も考えずに挑もうとしてた。慌てて俺は、階段を上りながら武器になりそうな物を探した。けど、武器に使えるような物が無い。折れた木材があるけど、自分の手を傷つけそうで逆に危ない。

武器探しを諦め、俺は塵地蔵を倒す策を考える事にした。

「考える……まず、考える俺……！」

声に出して自分に言い聞かせ、思考を働かせる。下は地獄の穴と言うバトルフィールドで、どう闘えばいい？

相手はジジイとは言え妖怪なんだから、何か考えておくべきだった。本当、自分の間抜けさに涙が出そうだぜ。

結局アイディアが浮かばないまま、俺は半壊した城の屋上に到着してしまい、塵地蔵と対峙する。クソジジイの後ろには、晴明が佇んでるが、腕を組んで傍観者に徹してる様子だ。多分、手は出さないだろう。無駄に動いて、身体の崩壊を急がせる訳にもいかないからな。

無言で向かい合っていると、塵地蔵が先に口火を切った。

「フェツフェツフェツ……！ 逃げずによく来たな、人間よ……！」

「さっきも言ったでしょ？ アンタだけは、ブチのめさないと気が済まないんすよ」

まあ、モノは考えようだ。逆に考えてみよう。

塵地蔵は妖怪とは言え、老人だ。自分は殆ど戦闘には参加しないで、作戦立てて陰に居る奴だからな。奴自身の戦闘能力は、低いと見た。

俺は気合いを入れるように、頬を叩いた。ウダウダ考えるのは、もうやめだ。

いい加減に覚悟決めて、俺がやる気になった時だった。

「晴明様を、あまり待たせる訳にもいかんからなあ。手早く終わらせるぞ」

塵地蔵は、着物の中から鰐無しの刀を取り出した。

——し、仕込み刀隠し持ってやがったアアアアア！

予想外の展開に、俺は内心にシャウトした。

「ちよっ……おま……はあああ!？」

相手が武器を隠し持ってた事を全く想定してなかった俺は、物凄く混乱した。

——おま……ソレは無いだろう！ こっちはお前、素手だと思ってたし、俺弱い人間だから武器なんか必要無いと……それをおま……ソレは無いだろう！

心中で激しく抗議するが、相手に届くハズも無かった。

刀を持つて笑う塵地蔵は、より一層不気味に見えた。奴の全てが、俺の気合いを吹っ飛ばしちまったよ！ 俺の気合いを返せっ！ 凶器を手にした怪老人を前にして、情けない事に俺の足は既に笑ってるよ。爆笑に近いっす。

「フェツフェツフェツ！」

不気味な笑い声を上げながら、塵地蔵が刀を振りかざして早速襲ってきやがった。

俺は「うわっ！」と悲鳴を上げ、反射的に後ろに跳んで何とか一太刀目を避けた。臆病者故に、塵地蔵と距離を離してたのが幸いした。しかし、まだまだ全然安心は出来ない。塵地蔵は刀を持って迫ってくるし、武器も策も無い俺は涙目で後ろに下がっていく。ふと俺は、後ろに目を向けて愕然とした。すぐ後ろに道は無く、足場が途絶えて下に地獄の穴が見える。

「嘘オオオ!？」

危機的状況に追い込まれるのが、あまりに早過ぎる。非情な現実
に、俺は叫んだ。

前に顔を向ければ、刀を持った塵地蔵が、ジリジリと迫って来て
る。

「フェッフェッフェッ！ 悪運尽きたのうっ！」

——「おおおおおおお！ マジャッベエエエ！ こんな早く
追い詰められるとは思わなかった。

絶望的状況に追い込まれた俺は、下の地獄穴と前から迫りくる塵
地蔵を交互に見て、どうすればいいか考えた。その間にも、塵地蔵
は少しずつ、ジリジリと距離を詰めてくる。同時に、床がミシミシ
と軋む音を鳴らす。

その時だった。

天啓を得た。

ある閃きが、俺の脳を落雷に打たれたかのように刺激した。

いや、でもなあと俺は躊躇する。確かに上手くいけば、このクソ
ジジイを倒す事が出来る。ほぼ100%の確率で、ある意味“究極
の必勝法”だ。必勝法だけど、俺も、なあ……ああ、ホントにコレ
しか無いんかなあ。

「正直、お前を殺せると思ってホッとしているぞ、人間」

俺が脳内で、かつてない葛藤を繰り広げると、塵地蔵が喋り出
した。

「羽衣狐の助けがあったとは言え、あの土蜘蛛の膝を地につかせた
時は、驚いたからな。その時、ワシは思ったんじや。このままお
前を生かせば、奴良組のような厄介な奴になるとな。じゃから、こ
の手で殺せてワシは安心しとる。清明様も復活なされて、コレで世

はワシ等の物じゃわい！」

麿地蔵の長台詞を聞いて、俺の心は決まった。

ああ、やろう。

「ククク……ははは……あははは、あははははははははははははははははは！」

俺は笑った。

目の前に居る麿地蔵や晴明、ついでに近くに居るリクオ達も怪訝そうな顔で笑い続ける俺を見てる。その中には、何か可哀そうなモノを見る目をしてる奴も居た。

だけど、今はそんなの気にしてる場合じゃない。

「な、何だ、お前……？ 突然笑い出しおって……気でも狂ったか……？」

少し引いた様子で、麿地蔵が言った。

まあ、普通はそう考えるよな。

でも、今回は違うんだ。

「いや、そんなんじゃない……アンタって、やっぱ三流だって」

笑いを止め、俺が言った言葉に麿地蔵は眉根にシワを寄せた。

ぬらりひょんを刺した時も、アンタそうだった。優位に立って、余裕ぶって早くトドメを刺さなかった。そんなド間抜けな事をするアンタは、三流だよ。三流三流、ド三流っ！

俺は顔を下に向けて、床の一点を見つめる。

「コレは、俺の意地……！ 追い詰められた人間の、最後の賭けだ

っ……！
喰らえっ……！」

言い終えた直後、俺は足を高く上げ、勢いよく床に叩き付けた。その衝撃は、今までの戦いで脆くなつた床を壊すには、充分な威力だった。しかも、俺と塵地蔵の二人分の体重が乗って、床は既に限界間近だった。床はバキバキと音を立て、へし折れる。当然、俺と塵地蔵は、足場を失ってバランスを崩し、下に落ちていく。

「な、なあああにいいいいいいいいいい！！？」

予想の範囲外だったようで、塵地蔵は落下しながら驚きの声を上げた。

俺達が落ちていく先にあるのは、他でもない地獄に通じる穴だ。亡者のような手が何本も出て、俺達を待ち受ける。

激しく動揺する塵地蔵は、声を荒げて俺を睨んでくる。

「き、貴様、ワシを道連れにするつもりか！？」

「ハッ！ 霊長類舐めんな！」

一度覚悟が決まっちゃったからか、何度も死にそうな目に遭ってきたからか、何か変なテンションになっちゃった。最高に『ハイッ！』てヤツかな。

今度こそ、本当に今度こそ俺は死んだと思った。今日だけで、もう二度奇跡が起こったからな。そろそろ運も尽きる頃だろう。今感じてる浮遊感も、もうすぐ地獄の業火に変わるんだ。クソジジイと心中なんて正直嫌だけど、まあしょうがない。

俺が諦め、今度こそ死ぬんだなと思って、目を閉じた時だった。体を温かく、心地良い感触に包まれた。今さっきまで感じてた浮遊感も、感じない。だが、地獄に堕ちた訳でもない。何が起こった

のか確かめようと、目を開けた時だった。

「五尾の刃——鬼殺しっ！」

金色の線が目の前で何度も交差して、綺麗な線を描いてるのが見えた。

そして次の瞬間、塵地藏の体が細切れになった。バラバラに細かく切断された塵地藏の肉片は、地獄の穴に堕ちていった。

俺は啞然とした様子で、目の前を揺れ動く金色の尻尾を見てた。自分の体を見ると、同じく金色の尻尾が巻き付いてる。こんな尻尾を持つ妖^{ひと}を、俺は一人しか知らない。

「言ったハズだ。しかるべき罰を妾自らが与える、と……！」

「羽衣狐様あ！？」

綺麗な着物の下から、複数の金色の尻尾を晒してる羽衣狐が居た。俺が名前を口にすると、鋭い目つきで睨んできた。

「この馬鹿者め！」

「うっ……！」

間近で怒鳴られ、俺は顔を伏せてしまう。

「何をするのかと思えば、塵地藏と共に地獄に身を投げようなどと……お前は一体何を考えておる！？」

「い、いや、違うんです！ 違うんですよ、羽衣狐様！ その、ちゃんと考えてたんですよ？ 皆があつと驚くような、カ●ジ的大逆転、脱出劇を……考えてませんでした。すいませんでしたあ！」

羽衣狐の怒った顔が、もう鬼神のように恐かったので、最後の方

で正直に言いました。今の羽衣狐、メチャクチャ恐いです。

「馬鹿者っ！」

左頬を叩かれた。誰かに叩かれるのは、何年ぶりだ？

叩かれた頬を押され、前を見れば、羽衣狐が目には涙を浮かべてた。あの羽衣狐が、涙目になってた。

「妾が……妾が、どれだけお前を心配したと思っておる……！」

そして、抱きしめた。俺の体を、力強く抱きしめてきた。

ちよっと信じられなかったけど、羽衣狐は俺を心配して涙を浮かべ、抱いているのだ。

本気で、本当に俺なんかの事を心配してたんだ。思い返せば、俺がリクオの刀を背中受けた時も、激怒したっけ。今も俺を抱きしめる力から、羽衣狐の気持ち伝わってくる。俺の勘違いじゃなければ、ね。

他に手が無かったとは言え、羽衣狐に心配かけて悪い事したな。

「ソレが、貴女の選んだ道ですか、母上……」

不意に、頭上から声が聞こえた。

羽衣狐と顔を上げると、清明が俺達を見下ろしてた。俺を抱き羽衣狐は、複雑な表情を浮かべてる。

「清明……」

「母上……ココで別れです。貴女に背を向けて、私は私の道を歩んで行きます……！」

俺達に背を向けて、清明は自分が出した地獄の門の中に入ってい

く。

閉じていく地獄の門の中から、清明が一度だけ振り返った。

「近い内にまた会おう、若き魑魅魍魎の主よ……！　そして、強運の欠片を持ちし人間よ……！」

地獄の門が閉じられ、穴も消えて、清明達の姿は無くなった。

連中が居なくなった瞬間、場に蔓延してた重苦しい空気、妖気が消えた。

俺も、背中に乘せてた重しを降ろしたような開放感を憶えて、全身の力が抜けた。

終わった。

俺達の戦いは、終わったんだ。

そう、負けて終わった。最後の最後まで、羽衣狐も含めて俺達全員、地獄に居た清明の手の平の上で踊らされてたんだ。

俺は、奴が憎かった。羽衣狐を利用して、更に地獄送りにしようとした清明^{ヤッ}が憎かった。けど、何も出来なかった。アイツのデカ過ぎる力を目の当たりにして、ビビって何も出来なかった。リクオは無謀に突っ込んで行ったけど、俺はソレすら出来なかった。完全に清明の力に威圧感に吞まれて、ビビってた。

そう思うと、情けない自分に対する怒りまで湧き起こってくる。

——清明……清明エ……清明エエ……清明エエエ！　忘れないぞ、この悔しさ……この怒り……！　負かせてやる……！　墮としてやる……！　いつか絶対につ……！　待ってろ……次は俺が勝ってやるっ……！

十一ノ怪：終幕（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： 勇往邁進さんからの質問。

『羽衣狐と主だった妖怪達（茨木童子、^{クソジイ}麿地藏、土蜘蛛、狂骨、がしやどくろ、e t c）に質問

着てみたい今時の服って何？？』

羽衣狐「妾は今の服で満足しておる」

茨木童子「あ？ 着てみたい服だ？ そうだな……動きやすい服だ。後、間違つてもしょうけらみたいな神父服は着ねえ」

麿地藏「西洋の服は落ち着かぬからのう……やはり服は、和服に限る。それより、そのクソジイと呼ぶのをやめんか」

土蜘蛛「あ？ 興味ねーよ」

狂骨「お姉様と同じ服が着たいわ。でも、サイズの合うのが無いのよ……」

がしやどくろ「ん」。まず、着れる服があるのか？」

『主人公に質問

1）羽衣狐との間に子供は何人欲しい？また男女の比率は？

2) 塵地蔵にはどんな処分をしたい？放置？緊縛？（他の妖怪達も一緒に）ガン無視？羞恥？」

俺「女の子と男の子を一人ずつかな。多過ぎても大変だし。まあ、出来ればね……。そもそも妖怪と結婚出来るの？」

塵地蔵なら、今回の話で死んだな。一歩間違えてたら、マジで俺も……。思い出すのやめよう」

投稿者： ミスターサーさんのキャラの四季からの質問。

『じゃあラストに質問、人間…あんたは羽衣狐の婿になるけど…蛇や骨、狐（羽衣じゃない狐）の京妖怪達のリンチされそうなんだが、そのところ、大丈夫なのか？』

俺「いやいやいや、待って待って。百歩譲って、狂骨とがしゃどくろは解る。でも、羽衣狐の依代だった、山吹乙女さんだっけ？ 何でその人にもリンチされなきゃいかんの？ そもそも、あの人そんなキャラじゃないでしょう？ つーか、もう婿決定？ そうなったら、京妖怪にリンチされる前に全力でエスケープするよ！」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

エピローグ（前書き）

どうも。作者の赤夜叉です。

今回で、原作の京都編は終了です。終了と言っても、シリアス話ですけどね。次回からは、番外編と言う事で日常の話を書こうと思います。

それと、今回は読者の皆さんに、一つお聞きしたい事があります。主人公の『俺』は、何の力も持たない平凡な人間ですが、何か特別な力をつけた方がいいでしょうか？ もしよろしければ、感想やメッセージでご意見をお願いします。

最後に、今回の話の最後に『嘘予告』があるのでご注意を。何かノリで書きちゃいました。

エピソード

京都で起こった妖怪騒動は、清明の野郎が地獄に引いた事で一応の決着がついた。

城とか半壊以上の状態になるし、街なんか清明がブツ飛ばしたトコなんかマジで酷え有り様になってたからな。あれだけ壊されたんだ、死人が出てもおかしくない。全く、胸くそ悪い話だよ。俺も、あんな化け物の復活の片棒担いだ感じだから、今回はあんま他人事に思えないんだよな。

いや、いつまでも暗い気持ちでいるのはやめよう。とりあえず、今は無事に生き残れた事を喜ぶべきだ。考えてもみる、普通だったら俺みたいな凡人が妖怪同士の奇想天外戦闘に巻き込まれたら、間違いない瞬殺されてるぞ。頭をバクツと喰われて、一瞬であの世逝きだ。それがどうよ？ こうして五体満足で生き残れてんだから、まさに僥倖と言えるだろう。死地から生還した俺は、改めて生きる事が素晴らしいって実感したよ。今は、とりあえず何もいらない。生きてるなら、ソレ以外何もいらない。マジでそう思うね。

それで、戦いを終えた俺達が今どこに居るのかと言うと、羽衣狐が使ってる屋敷だ。いや、あの後も大変だったのよ。陰陽師のゆらが、「滅したるー！」と叫んで京妖怪を滅しにかかってくるわ、奴良組からは「鯉伴様の敵ー！」と敵意と怒り剥き出しで襲われるわ、面倒な事この上無かった。まあ、奴良組大将のリクオが組の連中を止めてくれたお蔭で、隙を衝いて城から逃げ出す事が出来ただけだな。その後も、ゆらにしつこく追跡されたけど、何とか巻く事が出来た。ただ、図体のデカイがしやどくろは、あまりに逃げのリスクがデカ過ぎた。分解とか出来れば便利なのにな。

何とか逃げ切った俺達は、屋敷に戻れた訳なんだが……ソコで新たな問題が発生した。いや、元々あった問題を改めて確認中って方が正しいかな。

「結局、この人誰？」

黒のベッドに寝かせてる女を見て、俺は呟いた。

周りに居る羽衣狐や狂骨達も、首を傾げて唸っている。

ベッドに寝かせてるのは、羽衣狐が依代として使ってた女だ。羽衣狐が抜け出してから、ずっと眠ってる。まさか、死んでないよね？ 呼吸はしてるから、ソレは無いか。

「この娘を調達してきたのは、塵地藏だ。じゃから、この娘の詳細は我等には解らぬ……」

憑依してた羽衣狐本人も、詳しくは聞いてないらしい。まあ、そうかもな。憑りつく人間の事なんか、聞いたってしょうがないもんな。

でも、城で憑依してた時のおかしな様子から考えるに、普通の人間じゃないだろう。うゝん、気になるな。相手が美人なら尚更だ。

謎の美人依代について、俺達が考え込んでる時だった。

「う……ん……」

「おおっ！？」

寝ている女がいきなり声を出したから、俺は驚いて目を見開いた。フツ、僅かな物音でさえビビる俺だ。これでビビらなきゃ、臆病者とは言えない。

俺達が見守る中、眠ってた女がゆっくりと瞼を開けた。黒の瞳が、左右に動いて視線をさ迷わせる。

「こゝ、こは……？」

「ここは、貴女の屋敷です。ん？ 羽衣狐様の屋敷、の方が正しい

のか？ あれ？ どっちだ？」

羽衣狐が女に憑依して住んでたから、ややこしくて上手く答えられない。

俺が答えに悩んでると、女が顔を向けてきた。目が合った瞬間、心臓がドキツとした。何か、羽衣狐と違う雰囲気だからさ。

俺を見つめたまま、女は口を開いた。

「貴方は……私を……いえ、私につかれていた狐を護っていた方ですネ？」

「えっ！？ あの、俺の事知ってるんですか？」

女の口から出た言葉に、俺だけでなく周りの連中も驚いてる。

女は一つ頷き、続けた。

「はい。狐につかれてる間、貴方が狐のついてる私を護る姿を観てきましたから」

こりや驚いた。普通、幽霊や妖怪に憑依された人間は、意識を支配されて憑依されてる間は記憶も無いと思ってたけど、そうじゃない場合もあるんだな。

俺も驚いてるけど、憑依してた本人が一番驚いてるな。信じられないと言った顔で、女を見てる。

「あ、あり得ぬ……！ 妾わらわに憑りつかれて、意識を保てる人間があるなど……」

着物の裾で口を隠して、ブツブツと呟いてる。思った以上に動揺してるな。多分、今までの転生や憑依で無かった事なんだろう。それが、死ぬまで人間に憑依してたから、確かめようが無かったのか

も。

すると女は、更に衝撃的な事実を告白した。

「いいえ、私は人間ではありません。私は、狐と同じ妖あやしです」

「ええええっ!？」

羽衣狐だけでなく、俺達全員が驚きの声を室内に上げた。衝撃のカミングアウトをした当の本人である女は、俺達の反応を見ても冷静である。

——え？ ええええええ!？ あ、妖まじって……妖怪だろ!？ え？ つまり、羽衣狐は、同じ妖怪に憑りついてたって事になるじゃん! 何この展開？ つーか、何で妖怪の女は、こんな美人ばかりなんだよ!？ 種族の差？

俺が内心にシャウトしていると、女がベットから体を起こした。

「驚かせて申し訳ございません」

「あ、いいいえ……別に、謝るような事じゃないですよ。ビックリはしましたけど……あの、ちょっと待ってて下さい」

俺は隣に居る羽衣狐を連れて、ベッドから少し離れた。俺が何を聞きたいのか察してるのだろう。珍しく羽衣狐は、バツの悪そうな顔をしていた。ちょっと可愛いじゃないか。

「羽衣狐様……まさかとは思いますが、あの女が妖怪ひとだって気付かなかったんですか？」

「……全く気付かなんだ」

「マジですか？」

「マジじゃ」

それでいいのか、羽衣狐？ 憑りついたモノが、人間か妖怪かの

識別くらい出来るようにしましょうよ。

まあ、いいか。心の中でまとめて、俺と羽衣狐はベッドの前に戻る。女と向き直って、質問を再開した。

「お待たせしました。それで、えっと……貴女は、誰なんですか？」

「私は、山吹乙女やまぶきおとめと申します。貴方達が先ほど戦っていた、奴良組の二代目総大将——奴良鯉伴ぬらりはんの妻だった妖です」

「ええええええええええ！？ つ、つつつつ、つつ妻アアアアア！？」

衝撃の事実パート2に、俺達は驚愕する事を禁じ得なかった。

だって、依代の正体が、まさかの敵側の昔の奥さんですよ？ そりゃあ、驚くなつて方が無理つてもんだ。

しかし、そうなるとちよいと引つ掛かる点があるな。例の記憶が映る破片にあった、一つの記憶だ。幼い頃の山吹さんが、夫の鯉伴を後ろから刀で刺した場面があった。目の前に居る山吹さんは、とても穏やかで優しいような雰囲気的女性だ。とても後ろから人を刺し殺すような女には見えない。いや、そもそも若返ってる事がおかしい。ぬうゝ謎が多過ぎて、頭が混乱してきたぞ。

俺が頭を悩ませてると、山吹さんが静かに語り出した。

「もう何百年も昔の事です。鯉伴様と出逢い、名も無かった私に『山吹乙女』と言う名をつけて下さり、あの方に惹かれていきました」

山吹さんの話を、皆黙って聞いている。

当時の事を思い浮かべてるのか、語る山吹さんの目はどこか遠くを見てる感じだった。

「鯉伴様も私を想って下さり、私達は夫婦となりました。あの方と一緒になれて幸せでした……けれど、私とあの方の間には子が成せ

ませんでした……。50年も子が成せない事に、私だけでなく組の皆さんも後継ぎが出来ないと不審や不満を募らせていました……。私は自分のせいだと思い、鯉伴様や組にこれ以上迷惑をかけられないと古歌を残して去りました……。そして私は、枯れるようにこの世から消えました……」

な、何と言うか……。重い。訳ありな感じだったのは察してたけど、まさかここまで重く辛い過去を背負っていたとは正直予想外だった。俺、こういう重い話苦手なんだよな。つか、得意な奴なんか居ないだろう。

何となく俺は、他の連中の反応もうかがおうとチラッと視線を移した。まだ小さな狂骨も、同じ女で共感したのか表情は暗い。他の連中も、まあ似たような感じだ。

ただ、そんな中で一人だけ微妙に違う反応をしてる奴を発見した。羽衣狐だ。

何か、こう、やっちまった感と似たような様子で、山吹さんから視線を逸らしてる。まさかとは思うけど、山吹さんに何かやったのか？ 山吹さんに子供が産めなかったのは、アンタが何か関係してるんすか？ まあ、今は話の途中だから、この件については後で訊くでしょう。

山吹さんは続ける。

「死した後、真つ暗な世界で私は声を聞きました。『この女か……』
『この女を“反魂はんこんの術じゆつ”で……』と言う二人の男の会話でした」
「は、『反魂の術』じゃと!？」

突然、羽衣狐が血相変えた様子で声を上げた。

今の反応から察するに、何か知ってるみたいだけど。

「は、羽衣狐様？ その、反魂の術って何ですか……？」

「反魂の術とは、死者を甦らせる禁術じゃ。永遠の時を生きようと考えていた晴明が、研究しておった……」

「死者を生き返らせる？ そんな術があるんですか？」

おいおい、死者蘇生つてどこの龍玉の話だよ。

「確かに反魂の術で死者は甦る……じゃが、甦ってもすぐに土に還る不完全なモノじゃった……。それ故晴明は、妾の胎内に還り、再び産まれる事で完全なる反魂の術にする事を思い付き、実行したのだ……」

晴明復活の裏に、そんな話があったのか。

しかし、晴明程の化け物でも完全に出来ない事があるんだな。ちよつと意外だ。やっぱり、世の中に完璧な人間なんか存在しないんだな。

「話の腰を折ってしまつて済まぬ。続けておくれ」

「はい」

羽衣狐に促され、山吹の語りが再開される。

「そして気がつけば、私は娘子になっていました。“鯉伴様の娘である”と言う偽りの記憶を入れられて……。ある神社の前で、私は鯉伴様と息子のリクオと出会いました。鯉伴様は、最初は戸惑っていましたが、やがて私の手を取ってくれました。鯉伴様と一緒に過ごせて、その日一日はとてもとても幸せで、これ以上は無いと思えるくらいでした。……ですが、幸せな時間もそこまででした。リクオが離れ、鮮やかに咲く山吹の前で、鯉伴様は私が残した古歌を口にしました。ソレが“鍵”であり、“引き金”であつたのです……！」

古歌を聞いた私は、刀を持ち、背中から鯉伴様を刺してしまいま

した……！　そこで私は、全てを思い出すように成されていたのです……。鯉伴様を刺した私の心は、絶望によって黒く染まり……。そして、狐となつたのです……」

話が終わると、部屋の中は静まり返つてた。

こんな話聞いたら、すぐに言葉なんか出ないよな。

なるほど、大体の事情は解つた。要するに、山吹さんも晴明と山本……いや、山本本って奴等に利用されたんだ。邪魔な奴良組の二代目総大将の鯉伴を殺す為に、随分と姑息なマネすんじゃないの。正直、胸糞悪いわ。それに、やる事が小さい。『シ・ー・ンキ・グ』のハ・風に言うなら、ちつちえな。悲しい位にセコイやり方だ。それで世界の頂点に立とうだなんて、笑っちゃうね。そういうセコイやり方は、俺のようなビビリや人間だけに許された事なんだよ。人間は、卑怯汚い最低な生き物だからね。

さて、話は聞き終えたけど……これからどうするかね。山吹さんは、やっぱり奴良組に返した方がいいのかな？

そんな事を考えてると、狂骨が口を開いた。

「あ、あの……」

「はい。何ですか？」

狂骨の声に、山吹さんは笑顔で答える。

癒されるじゃないか。

「お姉様の体は、大丈夫なんですか？」

「え？」

「反魂の術は、完全じゃないんですよね？　だったら、お姉様の体もいつかは……」

ああ、確かにそうだ。反魂の術が完全じゃないから、晴明は羽衣

狐の胎内に還って転生する、なんて面倒な手段を選んだんだ。

ん？ 待てよ……そう考えると、既に“今”がおかしいか？

「あの、ちょっといいですか？」

発言の許しを得ようとするように、俺は手を挙げた。

皆の注目が集まったのを確認してから、俺は今気付いた疑問を言
った。

「清明の反魂の術って、すぐに死んじゃう不完全なモノなんですよ
ね？ でも、そう考えると、生き返って今日まで何年も生き続けて
る山吹さんは……その、何と言いますか、おかしくないですか……
？」

俺の言葉を聞いて、一同は一斉に山吹さんに視線を向けた。
いきなり注目が集まって、山吹さんはビックリしてる。

「言われてみれば、確かに……」
「でも、どうしてだ……？」

口々に呟く妖怪達に、俺は自分の考えを言ってみた。

「あの、もしかしたらだけど……清明の反魂の術って妖怪に対して
は完全に効果を発揮するんじゃないんですか？」

「どういう事じゃ？」と羽衣狐が訊いてくる。

「人間と妖怪の体の違いと言つか、魂の違いか何かで、術の効果の
程が違うと思うんですよ」

「そういうものなの？」

「そういうものなんじゃないの？ だって、実際に山吹さんは生き
てるんだから」

俺の見解に、狂骨は釈然としない様子をしてる。他の妖怪達も、納得したようないような、微妙な反応だ。

まあ、本当のところは俺にもよう解らん。だって陰陽師じゃないし、頭悪いしさ。でも、妖怪である山吹さんが生きてるって事は、そんなものだろう。

山吹さんの素性も解った事だし、これで一件落着……なんてならない訳よ。

「それはそうと、山吹さんこれからどうするんですか？」
「え？」

俺に問われて、山吹さんを含む一同が声を揃えた。

「どうするって、どういう事よ？」
「どういう事って、決まってるでしょ？ 奴良組に戻るかどうかですよ」

「ええええええええ！？」

狂骨が驚いてるが、当たり前前の事だろう。

だってさ、山吹さんは元々奴良組の妖怪なんだから、戻りたいと思っっても不思議じゃない。もう旦那さんは居ないけど、組に戻りたいって本人が思ってるなら、ソレは尊重して戻してあげるのが当然の事でしょう。

しかし、狂骨は納得いかない様子で首を横に振った。

「いや！ お姉様と離れるなんて絶対に嫌だっ！」
「嫌だっアタ……大体、アタが慕ってる羽衣狐は別に居るでしょう？」

「羽衣狐様は羽衣狐様で、ちゃんと慕ってるわ！ でも、お姉様の

事も慕ってる！ だから離れるなんて嫌よ！」

——ぐわあああ！ 面倒臭いな、この娘……！ コイツ、『外』と『中』の両方の羽衣狐を慕ってた。いや、もしかしたら、両方合わせて『羽衣狐』って認識なのかもしれない。うん、実に面倒だ。しかし、駄々をこねるガキ程厄介な相手は居ない。感情的なガキに、理屈は通じないからな。

どう説得するか悩んでると、狂骨が反論してきた。

「言つとくけど、お姉様が居なくなったらアンタだって困るんだからね！」

「あ？ 何で俺が困るんだよ？」

「お姉様が奴良組に行ったら、この屋敷に住む事が出来なくなつて、アンタは路上生活になるのよ！ ソレでもいいの！？」

「な、何だつてエエエエエエエ！」

狂骨に強力な先手を打たれ、俺は声を上げた。

——おま……ソレは卑怯だろう！ ソレは汚いぞ！ そうやって他人の弱味につけ込みやがって、卑怯者が！ どんだけ山吹さんと離れたくないんだよ！ つーか、よく本人の前でそんな事言えるな！ 下手したら、余計な罪悪感与えちまうぞ！

し、しかし、狂骨の言う通り寢床が無くなるのは困る。いや、でも、山吹さんを縛りつけるのもどうかと思う……けど、自分の生活も大事だからな。ヤッベ、究極の選択じゃねーか。

「あ、あの……」

「え？」

俺が究極の選択に悩んでると、山吹さんが遠慮がちに声をかけてきた。

そして、俺に向かってとんでもない事を言った。

「あの、もしお困りでしたら……私でよろしければ、ココに残りますよ?」

「ええええええええ！？」

山吹さんの言葉に、俺は声を上げずにはいらなかった。

「いや、いやいやいや、山吹さん！ そんな無理しなくていいんですよ！？」 さっきの狂骨の言葉だったら、気にする必要無いですよ！」

「いえ、無理なんてしてません。それに私、貴方に恩返しをしたいんです」

「え？ お、恩返し……？」

俺は片眉を上げ、怪訝な顔になる。

山吹さんに恩返しされるような事は、した覚えがない。首を傾げて考え、記憶を辿るが、まるで心当たりが無いな。いや、ホントに。難しい顔をしてる俺を見て、山吹さんは柔らかい笑顔で言った。

「貴方が居なければ、私はこうして生きてはいなかったと思います。その恩返しとして、皆さんの側に居させて下さい」

「いや、でも……折角なんですから、奴良組の皆さんと会った方が……。それに、ウチって言うか、京妖怪は奴良組と敵対してたし……」

⋮
⌊

「確かに、ウチの組と争っていた事は私も知ってます。でも、京妖あなた怪には京妖怪なりの信念がありました。それに皆と会えないのは寂しいですけど、二度と会えない訳じゃないですから。一度は死んだ身……この世に在いれば、いつか会う事が出来ます。ですから、私の事はお気になさらず」

ニツコリと癒しの笑顔を向けてくる山吹さん。

—— 良い人オオオオオオオオオオオオオオ！ あっ、人じゃなかった。良い妖^{ひと}オオオオオオオオオオオオオオ！ この妖、絶対良い妖だアアアアアア！

山吹さんの優しさに、俺は内心にシャウトした。

『自分が良ければ他人はどうでもいい派』の人間が溢れるこの世で、初めて見つけた『他人が良ければ自分の事は後回し派』の妖怪だった。人間どもは卑怯汚い最低の生き物だけど、妖怪の中には山吹さんのような優しい妖が居るんだ。世の中には、本当に女神が居たんだ。

くそっ！ そんな事言われたら、断れないじゃないか。

「お姉様ー！」

「うふふ」

狂骨が嬉しそうに抱き付き、山吹さんが頭を優しく撫でてる。何だか、微笑ましい光景じゃないか。

そんな事を思っていると、山吹さんが丁寧にお辞儀をしてきた。

「ふつつか者ですが、よろしく願います」

「あっ、いや、こ、こちらこそ、よろしく願います！」

慌てて俺も、お辞儀をする。こういう礼儀正しい人に会うのは久しぶりだから、対応に戸惑ってしまった。オマケに、美人で品が良い。

俺の慌てようを見て、山吹さんが可笑しそうに笑った。

「フフ……狐が言ってたように、可愛いですね」

「かつ……！？」

山吹さんの言葉に、恥ずかしさで俺は顔が熱くなった。

「そんな事ないです！ 全然可愛くないです！ もうホント、自他共に認めるダサイ男ですから！」

——ちくしょう！ 今のは不意打ちだったぞ！ 女って奴は、どうしてこう不意打ちが得意なんだろうな！

恥ずかしくて俺は、山吹さんから顔を逸らす。

「人間……」

「へ……？」

そんな俺に声をかけてきたのは、羽衣狐だった。

顔は笑顔だが、額に青筋を浮かべて怒ってる事が容易に解る。えっと、俺のせいっすか？

「こちらに来ぬか……！」

「え……？ ちょっと……！」

無理矢理腕を引っ張られ、部屋から出された。

あの、すいません。腕を掴んでる手が、半端無い力で痛いんですけど……。

廊下に出て、周りに人や妖怪が居ない事を確認してから、羽衣狐が怒った顔を向けてきた。

「貴様……何をみつともなくデレデレとしておるのだ……！」

「いや、男だったら大半は俺と同じような反応すると思いますよ？ って言うか、羽衣狐様も依代としてさっきまで憑依してたじゃないですか」

「ええい、黙らぬか！」

肩を掴んで、羽衣狐は怒声を上げる。

あー、コレってもしかして、アレか……？ いや、まさか……でも、可能性もなくはないような……。確かめてみるか。

「あの、羽衣狐様？」

「何じゃ？」

お怒りの羽衣狐に、俺は訊いてみた。

「もしかして、ヤキモチ妬いてるんですか？」

「ヤ、ヤキモチじゃと……！？」

動じる羽衣狐の顔が、見る見る赤くなっていく。可愛いじゃないか。

「わ、妾がヤキモチなど……妬いてなどおらぬ……」

恥ずかしそうに顔を逸らして言っても、説得力が無いですよ。

まあ、悪い気はしないけどさ。正直、山吹さんの笑顔や優しさ、言葉にドキツとはしたさ。でも、ちゃんと羽衣狐の事は好きだぞ。

羽衣狐の本当の姿だけど、俺から見れば充分美人だぞ。

「に、人間……」

「ん？ はい」

羽衣狐に声をかけられ、俺は思考を中断した。変わらず頬は赤く、視線を左右にさ迷わせている。あの羽衣狐が、どうやら緊張してるようだ。こんな羽衣狐を見るのは、初めてだ。なかなか可愛いじゃ

ねーか。清明め、こんな可愛い母親持ちやがって。あの野郎を潰す理由が、一つ増えたな。

おっと、違う方向に考えが飛んだ。元に戻ろう。

羽衣狐が何か言いたそうな感じなので、俺は黙って待つ事にした。ややあつて、意を決したように羽衣狐は口を開いた。

「妾は……お前を愛しておる……！」

俺を真つ直ぐに見つめてきて、想いを伝えてきた。

以前の俺だったら、完全に羽衣狐の想いを疑いにかかった。何せ、彼女居ない歴二十二年の俺だからな。女からの告白を、素直に受け入れられない一種の疑心暗鬼になつてたハズだ。

けど、今は違う。

今なら、羽衣狐の想いを、疑う事無く素直に受け止められる。本人の口から、ようやく想いを直接聞けて、嬉しかった。

ただ、真正面から告白されたから、恥ずかしさはある。

「お、俺も、羽衣狐様が好きです……！」

「う……うむ……」

僅かに頷き、小さく呟く羽衣狐。

それから羽衣狐は、急に顔を上げて俺の唇を塞いできた。勿論、自分の唇で――。

不意打ちのキスに、俺は驚きと興奮で目を見開いた。なかなか離れない羽衣狐を、俺は我慢出来ずに抱きしめた。

誰も居ないのいい事に、俺と羽衣狐は廊下でキスを続けた。

翌朝。

新しく用意された自分の部屋を出て、俺は欠伸をかきながら廊下を歩いて広間に向かった。

扉を開いて、食堂の中に入ると既に羽衣狐が居た。

「目が覚めたか、人間」

「おはようございます」

俺が挨拶を交わした羽衣狐は、黒の長髪、黒のセーラー服、黒のタイツと全身黒づくめだった。

その姿は、紛れもなく山吹乙女さんだ。

そう、羽衣狐はまた山吹さんの体を依代にして、憑依しているのだ。何でも、ずっと依代の姿でやってきたから、こっちの方が現代の京妖怪を従え易いんだそうだ。ちなみに、山吹さんの意識もちゃんとある。本人達が話し合った結果、意識を交代する事で山吹さんも同意したらしい。一つの体に二つの意識とは、完全な二重人格だ。例えるなら、闇・戯と・戯みたいな感じだ。

本人達がいいなら、俺は別に止めないけどね。

「おお！ 闇の聖母様……！ 今日もお美しい！」

「朝からテンション高いな、しょうけらさん」

広間の入り口で、片膝をついて羽衣狐を崇めてるのは、今日も神父服のしょうけらだ。

昨日の城での決戦で姿見なかったけど、屋敷に戻った夜に帰ってきた。顔を包帯でグルグル巻きに包んだミイラ男顔は、マジでビビったぜ。何でも、怪力僧にブチのめされて、生死の境をさ迷っていたらしい。綺麗な花畑と川が見えたって言ってたが、ソレ完全に三途の川っすよね？ よく帰ってこれたな。

晴明が復活して地獄に引いた事を知った後も、しょうけらはこうして羽衣狐に仕えてる。コイツの羽衣狐への崇拜ぶりがかがえる。ついでに、今もまだミイラ男顔だ。

「お姉様！ 朝食をお持ちしました！」

頭に髑髏を乗せて、狂骨が料理を運んできた。二人が一緒になって、元通りになった事が嬉しいようで機嫌が良い。

コイツ等以外にも、広間には羽衣狐の元に残った京妖怪が居る。羽衣狐が、口をつけてたカップを置き、俺を見てきた。

「ほれ、人間。お前も近^{ちこ}う寄れ。朝食にするぞ」
「はい」

答えた俺は、羽衣狐の隣の席に歩み寄った。
俺の非現実的的日常は、まだまだ続きそうだ。

噓予告。

大学を卒業した後も就職せず、自堕落な生活を送り、家を追い出された平凡な男が一人居た。

その男は、ある日、偶然訪れた京都の地で一人の少女と出会う。黒を身に纏った、謎の少女だった。黒の少女の正体は、この世を闇の世界に造り変えようと企む古の大妖怪・羽衣狐^{いにしえ}。

彼女との出会いをキッカケに、男は非現実的世界に誘われる。陰陽師の使命、奴良組の因縁、京妖怪の宿願、京都の地で、様々な思惑が交錯する。

そして、幾多の死地を潜り抜け、ついに男は出会う。

闇の世界の魔王にならんと、地獄の底より甦った伝説の主・安倍晴明！

だが、しかし、晴明のあまりに強大な力の前に、男は闘わずして敗れた。男は、魔王にならんとする晴明の力を、思い知らされた。こうして、京都での闘いは幕を閉じた。敗北と言う苦い結果を残

して……！

そして、時は流れ――。

おかえり、グズの申し子

『俺』 享年23歳 地獄行き決定

『俺』

土蜘蛛

奴良鯉伴

負け組3人が挑む
人生奪還ゲーム

「何なんだよ、ココ………？」

『アヤカシ〜地獄録篇〜』

エピソード（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： XYZさんからの質問。

『京都編が終了してからは原作に沿ってストーリーを進めるんですか？』

それともオリジナルストーリーを作成するんですか？』

俺「前書きで作者が述べた通り、とりあえず日常を中心にした番外編を書く予定です。多分、そんなに長くないと思うよ？ あと、嘘予告は信じるな！」

投稿者： やまいさんからの質問。

『羽衣狐と羽衣狐の依代どっちが可愛い？ どっちもは無しで』

俺「二人ともで通そうと思ったけど、先手を打たれたか……。まあ、ぶっちゃけ可愛さは依代の山吹さんだよ。でもね？ 羽衣狐も綺麗よ？ ホントだよ？」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

番外編：遊園

式條城での戦いから、数日が経った。

俺は羽衣狐が住んでる屋敷で、今日も平和に広間で飯を食ってる。羽衣狐の手下の妖怪達の知らせで、奴良組は本拠地に戻り、陰陽師は壊れた本家の修理やら何やらで忙しく、俺達の相手をしてる暇は無いと聞いた。うむ、それなら平穩無事な時を過ごせるだろう。平和って素敵やん。

そう思いながら俺が、カップを持ってコーヒーを飲んだ時だった。

「のう、人間」

「ん？」

今日も山吹さんに憑依してる羽衣狐に声をかけられた。

ちなみに、今は狂骨や他の妖怪達は居ない。たまには二人でゆっくり食事したいと、羽衣狐が命じたのだ。まあ、羽衣狐が憑依してる山吹さんも入れれば、実際は三人なんだけどね。でも、ソコはツツコンではいけない。

そんな二人っきりの空間で、羽衣狐はある提案を口にした。

「明日、デートとやらに行くぞ」

聞いた瞬間、俺は自分の耳を疑った。コーヒーを飲んだ事もあるって、すぐに返事が出来なかった。

動揺を抑えて、俺は羽衣狐と向き合う。

「デ、デートっすか？」

「うむ。恋人とは皆、デートとやらに行くと聞いたぞ」

情報源は、多分学校のクラスメイトだろう。何気に、ちゃんと学校に通ってんだよね。中の山吹さんも、現代の学問に興味あるみたいだしさ。

「そういう事じゃ。明日の朝、屋敷を出る。よいな？」
「は、はい」

俺の返事を聞いて、先に食事を済ませた羽衣狐は席を立った。優雅に広間を歩き、俺を残して出て行った。

一人残された俺は、しばし呆然とした後、テーブルに肘をつけて頭を抱えた。

「デートって、何すればいいんだっけ？」

マジで悩んだ。

いや、勿論、羽衣狐からデートの誘いを受けて嬉しいよ。今まで彼女が居なかったんだから、女とデートする事をどれだけ夢見てきた事か。

でも、喜んでばかりもられない。

何故なら、デートって何をすればいいか、解らないからだ。考えてもみてくれ。彼女居ない歴を二十年以上更新してきた俺が、デートの方法を熟知してる訳が無い。そりゃあ、たまにテレビで人気のデートスポットとかチラツと見た事はある。だけどね、関係無いじやん。彼女が居ない当時の俺には、関係無い事じやん。

そういう訳で、俺は恋愛やデートに関してはズブの素人なのだ。

「どうすればいい……？ どうすれば……？」

真剣に考えるが、何も浮かばない。

多分だけど、羽衣狐はデートプランを何も立ててないと思う。だ

って、他人から聞いて初めてデートの事を知ったんだぞ？ 面白そうだから自分もやろうと言つ、好奇心から起こる一種の衝動行為だ。それに羽衣狐の場合、「妾^{わらわ}を楽しませよ」とか考えてて、当日の予定とか全部俺任せにしてる可能性が、非常に高い。

つまり、同じくデート素人の俺が、当日のプランを立てなきゃいかん訳よ。しかも羽衣狐って、結構気分屋なところがあるからなつまらなかつたら、途中で帰る事になるかもしれない。ヤベー、別の意味で緊張してきた。

明日は楽しいイベントのハズなのに、前日に頭を悩める俺であつた。

*

そして、翌日の日曜日がやってきた。

広間で朝食を済ませた後、俺は先に屋敷を出て門の前で空を仰いでる。天気は小さなちぎれ雲が浮いてる晴れで、絶好のデート日和だ。綺麗な青空を見ると、やっぱり気分いいよな。

デート相手の羽衣狐は、屋敷の部屋で準備中だ。俺も話で聞いてたけど、女の身支度はマジで長いな。もう、かれこれ十分か二十分は待ってるぞ。何か知らんが、女って面倒臭そうだな。来世も俺として生まれないものだ。

そんな事を思いながら、ボーッと空を眺めてる時だった。

「待たせたのう」

振り返ると、羽衣狐が居た。山吹さんの姿で、いつもの黒いセーラー服を着ている。こういう場合は、私服で行くのが普通だが、制服好きの俺は特に気にしない。服装はいつも通りだが、若干照れく

さそうに頬を赤くして微笑んでは、新鮮だ。

そんな顔を見たら、俺もちょっと照れるじゃないか。

「出掛ける準備をしておったら、狂骨に何処へ行くのか聞かれてのう」

「え？ 狂骨にですか？」

今の俺達の関係を、最も知られたくない人物の名前が出て、俺は目を丸くした。

ヤッペー、よりもよって一番厄介な狂骨が絡んできたか。でも考えてみたら、羽衣狐を慕ってる狂骨が出掛ける行き先を訊かないハズが無い。俺と羽衣狐が恋人になった事は、まだ誰にも教えてない。面倒な事になりそうだから、しばらくは黙っていようと思ってたのだが、もし狂骨にバレたら、どんな酷い目に遭わされるか解らない。正直、想像もしたくないな。羽衣狐が上手くごまかしてくれれば、一安心なんだけどな。

一縷の望みを抱いて、俺は訊いてみた。

「それで、何て答えたんですか？」

「お前とデートに行くと言えてやったぞ。そしたら狂骨の奴め、彫刻のように固まりおったわ。面白かったぞ」

羽衣狐の素敵な笑顔によって、俺の薄い望みは容易く碎かれた。

——はは、帰ったら死を覚悟しておくか……。

絶望の底に落ちた俺の手が、不意に掴まれた。

「ほら、早くデートに行くぞ」

顔を上げると、羽衣狐の笑顔があった。今日のデートを楽しみにしてたんだろう。

「はい」

いつもより眩しく見える羽衣狐の笑顔に、俺も笑って答えた。
まあ、狂骨にバレちゃったのは仕方ない。それよりも、今日は羽衣狐とのデートを楽しもう。楽しまなきゃ損だ。

「それで、デートとは何処へ行くのだ？」

やっぱりな。そんな事だろうと思ってたよ。

俺の予想通り、羽衣狐はデートのプランを全く立てて無かった。
おそらく、考えてすらいないだろう。まあ、ソレが羽衣狐と言う女なんだけどね。

それじゃあ、と言って俺は、羽衣狐を連れて目的地に向かって出発した。昨日の内に、考えといてよかった。

ふと思ったけど、前と違って今は山吹さんの意識も生きてるから、ある意味ダブルデートじゃね？

ヤバイ、余計に緊張してきた。

*

駅まで歩いていき、電車で目的地のある街まで移動して、駅を降りて再び歩き出す。

大通りに出て、しばらく歩いた所で俺達は目的地を前にして足を止めた。デートの定番って言ったら、何処か大体の想像はつくだろう？

「ココは何じゃ……？」

「遊園地です」

半ば啞然とした様子で、目的地を見上げる羽衣狐に俺は答えた。
ド素人の俺が選んだ場所は、デートの定番中の定番である遊園地だ。休日だから、俺達以外に遊びに来てる人が沢山居る。なかなか盛況じゃないか。

最初は、映画館とか公園とか他にも考えたんだけど、却下となった。二人で映画を観るなら、屋敷のテレビでDVDを観ても変わらないじゃん。つか、屋敷のテレビって薄くてデカくて凄いいんだぞ？初めて見た時は、かなり興奮したよ。流石、金持ち。おっと、話がそれってしまった。軌道修正しよう。んで公園は、金はかからないけど、何か地味な感じで面白い事を期待する羽衣狐には合わない判断した。

そして、遊園地に決定した。

羽衣狐の反応をうかがおうと、チラッと横目で見る。

「うむ、面白そうだ。入るぞ、人間」

——計画通り！ 遊園地に興味を示したぞ！

俺は心の中で、ガッツポーズをした。昨日の夜、遅くまでパソコン使って調べた甲斐があった。近場の遊園地をインターネットで検索して、人気の乗り物とかも調べたからな。

昨夜の努力を活かせるようで、一安心だ。

二人分の入場料を払い、俺達は園内に入った。ちなみに金は、羽衣狐が払った。

しょうがないだろ？俺、殆ど金持っていないんだから。さっきチラッと羽衣狐の財布の中覗いたけど……福沢諭吉が十人以上居ました。どんだけ？

ま、まあ、そんなこんなで俺達は園内に入った訳よ。

「賑やかな所じゃのう」

初めて遊園地に来た羽衣狐は、周りのアトラクションや行き交う人達を見渡してる。

「それで、これからどうするのだ？」

「まずは、アレに乗りましょう」俺は一つのアトラクションを指差す。

「アレは何だ？」

「絶叫系のアトラクションで、ジェットコースターって言います」

この遊園地の一番人気のアトラクションだ。どこの遊園地でも、絶叫系は人気である。

「ほう、絶叫系……」

あつ、絶叫系と聞いて羽衣狐が不敵な笑みを浮かべた。多分、「妾を絶叫させる事が出来るなら、させてみるがよい」的な感じだ。すると羽衣狐は、俺の腕を掴んでジェットコースターに向かって歩き出した。

「行くぞ、人間。まずはジェットコースターとやらを制圧するぞ！」
「制圧っ！？」

羽衣狐の言い方に目を丸くしたが、楽しみ方は人それぞれと思って苦笑した。

人気のアトラクションだから、早めに並ばないとかなり待つ事になる。幸い、時間が早かった事もあり、前に並んでる人は少なく、すぐに順番が回ってきて乗る事が出来た。初めてジェットコースターに乗る羽衣狐に、安全レバーのかけ方を教えた。

「いよいよじゃな」

俺の隣で、羽衣狐が呟いた。心なしか、年相応にワクワクしてるように見える。年相応と言っても、見た目の意味でだ。羽衣狐の実年齢は、千歳を越えてるっぽいからな。

ジェットコースターが、ゆっくりと動き出す。ちなみに、俺達は先頭の席だ。一番前が好きだから、座れて良かった。

次の瞬間、ジェットコースターは風になった。高い位置から急降下して、物凄い風圧を受けると同時に、周りの景色が一変する。

「おおおおおおおお！」

——この風、この迫力、たまんねえ！ 流石、一番人気なだけあるぜ！ やっぱ遊園地は、ジェットコースターが一番だな！

さて、羽衣狐の反応はと隣を見る。

ソコには、

「ははははは！ 風が気持ちいいではないか！

きやあああああああ！ ちよっ……ちよつと、止めて下さい！

はい！ 速すぎます！ 降ろして下さい！

ええい、山吹！ これからが良いところなのだ、出てくるでない

！」

——二つの人格が騒いでらっしゃるウウウウ！ 初めてのジェ

ットコースターに怖がって、山吹さんが思わず表に出て叫んでるよ

！ ソレを羽衣狐が怒鳴って……何か、凄い事になってるぞ！？

世にも奇妙な二重人格喧嘩を見ながら、ジェットコースターに乗り続けた。

乗り終えた後の、羽衣狐の感想。

「ふつ、この程度では妾を絶叫させる事は出来ぬ」

大妖怪を絶叫させるアトラクションがあるなら、是非とも知りた
いものだ。

でも、それなりに楽しんでたようだから、良しとしよう。俺も面
白いモノ見れたしね。

*

早くも来てしまった。

いや、いつかは来るだろうとは思ってたけど、その時が来るのが
あまりに早過ぎだ。

幾つかのアトラクションを制圧した後、俺と羽衣狐はあるアトラ
クションの前に居た。

ソレは、臆病な俺が最も苦手とするアトラクション——お化け屋
敷だ。正直、ここだけは入りたくない。ホラーや幽霊が苦手な俺は、
今まで一度もお化け屋敷に入った事が無い。

え？ 京妖怪と過ごして少しは慣れたろ？ 馬鹿言っちゃいけな
いよ、皆さん。暗い中で急に脅かされたら、ビビるっつーの！ 臆
病舐めんな！

「次はココに入るぞ、人間」

隣に居る羽衣狐は、ニヤリと口元を歪めてる。羽衣狐が妖しい笑
みを浮かべたって事は、俺をイジめる気満々って事だ。久しぶりに
見たぜ、この恐ろしくも綺麗な笑顔を——。

遊園地を選んだ事を、激しく後悔しながら俺は羽衣狐と一緒に
お化け屋敷に入った。拒否出来る訳ないでしょ。

中は思った通り、暗くて視界が悪かった。嫌だ、マジ恐えよ。超帰りたい。羽衣狐が俺の手首を、ガツチリと掴んでるから逃げられない。ソレ以前に、一人で突き進んだり、引き返したりなんか出来ないしな。諦めて羽衣狐と一緒に進むしか、道はねーわ。

——ああ、超帰ってえ……。
そう思った時だった。

『ガアアアアアアア！』

「うおわああああ！」

横から行きなりグロテスクなお化けが現れて、俺はビビって悲鳴を上げた。

作り物でもな、怖いモノは恐いんだよ！

脅かしてきたお化けは、奥へと引っ込んでいった。自動的に引っ込んでいくシステムのようだ。よく出来ている。

作り物のお化けが去り、俺は安堵の溜め息をついた。でも、まだまだ序盤なんだよな。こんな調子で大丈夫か、俺？

不安な気持ちを抱く俺は、ふと気付いた。お化けにビビった俺は、反射的に何かにしがみついていた。ココでしがみつけるモノなんて一つ、いや、一人しか居ない。

甘い香り。柔らかな感触。間違いなく、アレだ。

俺は引きつらせた顔を、恐る恐る上げた。

見上げる視線の先には、羽衣狐の顔があつた。暗い場所でも、俺を見下ろして愉快そうに笑ってるのが分かる。

お化け屋敷でビビり、連れの彼女に抱きつく男。なんと情けない構図だろう。だが、羽衣狐は、そんな俺の反応を楽しんでるのだ。

しかし、事件はまだ終わってなかった。

笑顔だった羽衣狐の顔が、見る見る赤くなっていき、動揺の色を浮かべたのだ。

最初は解らなかったが、すぐに答えが出た。羽衣狐は、まず俺に

抱かれてこんな反応はしない。

なら、今の人格は羽衣狐ではなく――。

「や、山吹さん……？ いや、違うんです！ コレは狐の陰謀で……！」

「な、何するんですかアアアア！？」

「ぶべあっ！」

弁明虚しく、山吹さんの張り手が俺の頬にクリティカルヒットした。細身の女性とは思えない、強烈な一発に俺は地に倒れた。

――さ、流石、元奴良組二代目総大将の奥さん……超強え……！
それからも脅かしてくるお化け共に悪戦苦闘しながら、何とかお化け屋敷を出る事が出来た。

「ふふふ。怯える姿も良かったが、山吹に叩かれた場面も、なかなか面白かったぞ」

――地獄に堕ちろ、女狐……！

心身共にボロボロな俺は、愉快そうに笑う羽衣狐の背中を睨み付けた。

そんなこんなあり、途中で昼食を挟みながら遊園地を回った。お化け屋敷以外にも軽い悲劇があったり、羽衣狐に殺意を憶えたりしたが、詳細は省かせてもらおう。普通、デートで殺意とか抱くか？
夕方になった頃には、俺の体力も限界を迎えていた。妖怪とのデートは、ある意味ハードで命懸けである事を身をもって知った。

「人間。最後に、アレに乗らぬか？」

羽衣狐が、一つのアトラクションを指差した。

——あ？ まだ乗るの？　せめて軽いヤツにしてくれ……激しい乗り物は、もう無理だ。

この女狐は、一体何を選んだのか視線の先を追った。

目に入った乗り物を見て、思わず「ああ」と声を漏らした。

羽衣狐が最後に選んだのは、デートの定番である遊園地の定番である観覧車だった。まあ、アレなら体力を使う必要も無いし、悲劇が起こる事も無いだろう。

と言う訳で、俺達は観覧車に乗った。狭い密室の中で、互いに向かい合う形になる。何だか別空間に入ったようで、緊張してきた。今までも何度か羽衣狐と二人つきりになる事はあったけど、その時とは違う感じだ。何なんだろうな？

ドキドキしていると、羽衣狐は窓の外に目を向けた。

「綺麗じゃのう」

夕焼けが、遊園地や街をオレンジ色に染めてる。

「そうですね」

「人がいなければ、もっと美しく見えるのだから」

「ははは、人がゴミのようだ」

思わず大佐の台詞が出てしまった。

「人間」

「はい？」

呼ばれて顔を正面に戻すと、羽衣狐も俺を見ていた。白い肌が夕焼け色に染まって、普段とはまた違った彼女が居た。

「今日は楽しかったぞ。また来よう」

首を小さく傾げ、羽衣狐はニツコリと笑った。

「はい」

俺もすぐに答えた。

色々あったけど、終わってみれば全部良い思い出だ。いや、一部黒歴史があるけどね。ソレも全部含めて、忘れられない思い出だよ。ゴンドラが下に着いて、俺達は降りた。観覧車は『キスをする為に造られた』なんて話があるが、そりや乗ったカップル次第の意見だなと思った。だって、俺達キスしてないもん。キスすると見せかけて、しないと言う最悪なフェイントをされて動揺する俺を見て羽衣狐が楽しんでただけだ。

もう二度と観覧車乗らねえ。

そつ心に誓って、遊園地を出ようと歩いてる時だった。

「うおっ！ スッゲー美人発見！」

「何だ？ 隣の奴彼氏か？ ダセーじゃん」

正面から三人組のガラ悪そうな男がやってきて、絡まりました。

——オイイイ！ 何だよ、この展開！？ こんなトラブル展開い
らねーんだよ！

絡んでくる男達を見ながら俺は、内心にシャウトした。

最後の最後で、ホント面倒な事になっちまった。そりや妖怪と比べたら大した事ないかもしれないけど、こういう奴等も苦手なんだよ。どんだけ妖怪と付き合おうが、俺が臆病で弱い事に変わり無いんだから。

「ねーねー、こんな地味な奴ほっという俺等と付き合わね？」

「ココより面白いトコ知ってんだ」

馴れ馴れしく羽衣狐に声をかける男共を見て、イライラしてきた。

「あの……」

「あ？」

三人組の内の一人が、俺を睨んできた。

うわっ、不良って恐れ〜。背も俺より高いし、喧嘩も強そうでおつかねえよ。ついでにピアスとかもして、バツチリ決めちゃってるしさ。

でもさ、どんなに臆病でも、ココは退く訳にはいかないでしょ？
一応、羽衣狐の彼氏なんだからさ。

「その、俺達もう帰りますんで……どいて下さい」

「あ？ 声が小せえよ！」

「ビビりは引っ込んでな！」

逆に大声を受け、突き飛ばされた。

どんだけ情けないんだよ、俺は。マジで泣きたくなるぜ。地面に倒れた俺を見て、不良共が笑ってる。ああ、ウゼー。だから暴力振るう奴や不良は、恐くて嫌いなんだ。

「貴様等……」

地面に尻をつけた俺の耳に、酷く冷めた声が入ってきた。
嫌な予感がして、俺は恐る恐る顔を上げた。

ソコには、魔王が居た。腰に手を当て、見下すような目を不良共に向けてる羽衣狐だ。しかも、何か物凄い迫力があって、こう、背後から『ゴゴゴゴゴ』って音が聞こえそうな感じた。とにかく凄い

威圧感だ。

確か、『畏』^{おそれ}とか言ったか。相手を恐がらせたり、威圧させたりする妖怪が持つ独特の能力だ。^{ちから}妖怪によって、能力の種類は様々あるんだと。

羽衣狐の畏を直接受けてる不良三人組は、

「ひっ……！？」

「あ……ああ……！」

「はあー！ はあー！」

完全に戦慄していた。ガタガタ震えて、体全体で怯えを表してる。一人なんか、下手したら呼吸困難になりそうな感じだぞ。俺と同じように尻餅ついてる不良共を見下ろして、羽衣狐は氷のように冷めきった口調で言った。

「失せるがいい、下卑た人間共よ……！」

「お、おお……！」

「い、行くぞオメー等！」

「ま、待ってくれ！ あ、足が震えて……！」

不良三人組は、尻尾を巻いて逃げて行った。

逃げて行く不良三人組の背中を、ポカンと見つめる。何だかな、複雑な気分だよ。別に俺が割って入らなくても、大妖怪の羽衣狐にとっちゃ何の問題も無かったんだよな。一睨みただけで、不良三人ビビらせちゃったんだから。マジパネエよ。

半ば啞然としてる俺の前で、羽衣狐は溜め息をついた。

「ふんっ……鬱陶しくてつまらぬ人間共だ。この場で殺してもよかったのだが……」

「いや、さすがにソレはマズイっすよ！」

物騒な事を言う羽衣狐に、俺は声を上げた。

「解っておる。ほれ、立てるか？」

羽衣狐が手を差し伸べてくれた。

護るつもりが逆に護られて、恥ずかしくて顔を直視出来なかった。差し伸べられた手を掴んで、立ち上がると、羽衣狐が呆れた口調で言った。

「しかし、お前は本当に弱いのだ。それに弱いくせに妾の前に出おつて、お前は阿呆か？」

「うう……」

くつ、返す言葉も見つからない。あーあ、恰好悪いトコ見せちゃったな。いや、元々恰好良くなっていけどさ。更に印象悪くなっただんじゃね？ みたいな。

しかし、俺の考えとは裏腹に、羽衣狐は笑って言った。

「じゃが、それでよい。今のお前を妾は愛したのだ。それに頼り無かったが、庇ってくれて嬉しかったぞ」

綺麗な笑顔と共に送られた羽衣狐の気持ちに、俺も照れながらも笑顔で返す。

その笑顔を見ただけで、庇ったのは無駄じゃなかったと思えた。

「さあ、帰るぞ」

「はい」

俺と羽衣狐の初デートは、まあ良い感じに終わった。

屋敷に戻った俺が狂骨やがしやどくろ達にリンチされ、その様子を羽衣狐が笑いながら見てたのは、言うまでも無い。

番外編：遊園（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： 白い奇術師さんのオリキャラのシロさんからの質問。
『どうも赤夜叉さんシロですよろしくお願いしま〜す。質問を出すので答えてください。1つ目の質問は……ん〜なんにしようかな……あっそうだねらりひよんの孫に天海と言うお坊さんが存在するの知ってましたか〜？↑ふざけてます

あと2つ目……山吹乙女さんリクオに会って真実を話さないんですか？僕の考えですけど山吹乙女さんの性格なら偽物の記憶を植えつけられていたとはいえリクオの前で父親を自分の愛した夫を殺してしまったことに自責の念を感じていてリクオやぬら組のみんなに謝るようなことをしそうなんだけどどうですか？↑（真面目）まあ……リクオなら許してくれるでしょ………たぶん。↑（半分真面目半分ふざけてます）』

俺「どうも。作者の代わりに、主人公の俺がお答えします。天海って誰ですか？俺、歴史知らないんですよ」

赤夜叉「アレでしょ？家康側の坊さんじゃなかったっけ？」

俺「何さり気に出てんだよ!？」

山吹「二つ目の質問ですが……まだ、心の準備が出来ていないので……。でも、必ず謝りに行きます。偽りの記憶を植え付けられていたとはいえ、私が鯉伴様を手につけた事実は変わりませんから……。あの子に……リクオに会って、ちゃんと謝ります」

質問ありがとうございました！
質問は、引き続き募集中です。

番外編：本家

京都での戦いから、まあ一週間位経った今日、俺は京妖怪達とあるデカイ和風の屋敷の前に立っている。

空は綺麗な青空なのに、心の天気は曇天だよ。気分的には、初陣に出る若武者だよ。物凄い緊張して、拭いても拭いても汗が止まらない。

いや、いつかは来なきゃいけないとは思ってたけど、いざ来ると怖気づいちゃうんだよね。

「あの、大丈夫ですか？」

心配そうに俺に話しかけるのは、山吹乙女さんだ。羽衣狐じゃなくて、山吹さん本人の人格だ。

羽衣狐と違って、優しくて温かい雰囲気身を纏ってる。アレだ、大和撫子的な感じだ。羽衣狐や京妖怪にイジめられてきた今日まで、何度山吹さんの優しさに癒され助けられてきたか。

「だ、大丈夫です。心配かけてすみません」
「いいえ」

ニコリと微笑む山吹さんの顔に、今も少し癒された。

「ニヤニヤしてるんじゃないわよ、変態」
「うるせえ」

折角、山吹さんの笑顔に癒されてたのに、狂骨が軽蔑のこもった眼差しを向けてきた。

オメーな、いい加減に機嫌直せよ。そりゃ慕ってる羽衣狐を俺に

取られて気に入らないのは解るけどさ、変態は無いだろっ変態はよ。俺、別に変な事やってねーだろう。

「狂骨。そんな酷い事言ったらダメよ」

「はい。ごめんなさい、お姉様」

山吹さんが軽く注意すると、狂骨は素直に頭を下げた。

このクソガキ、山吹さん相手だとコロツと態度が変わりやがる。これだからガキは嫌いなんだ。

「おお、マリア様！ 今日美しくお優しい！」

「貴方は、ソレばっかですね。っていうか、今は羽衣狐じゃなくて山吹さんですから」

俺の後ろで、しょうけらがいつもの通りに山吹さんを崇めてる。何か、もう羽衣狐を崇拝してるのか山吹さんを崇拝してるのか、分からなくなってきた。もしかしたら、両方なのかもしれない。

つか、山吹さんはいいとして、何で狂骨としょうけらは全然緊張した様子が無いんだ？ 俺達が今、何処に居るのか解ってるよね？ アホ二人と山吹さんを連れて、俺はなんと浮世絵町にある奴良組の本家の屋敷前に来ている。何で京妖怪と因縁の深い奴良組の本家に訪れたかと言うと、コレには深い理由があるんだよ。

そういう訳で、回想シーンに行こうと思います。

はい、ほわんほわんほわわ〜ん。

*

「相談、ですか？」

「はい」

俺が部屋でダラダラしていると、山吹さんがやってきた。

そして、部屋に入るや相談があると言ってきたのだ。正直、意外だなと思ったよ。だって、どう考えても他人から頼られるような人間じゃないからな。自分で思ってた少し悲しくなるけど、純然たる事実なんだから仕方ない。そんな俺に、相談を持ち込む奴なんて居ないと思ってた。いや、確信していた。

しかし、この日、俺の確信は崩された。

山吹さんの相談によって。

「えっと……相談って、何ですか？」

多少困惑しながら俺は、相談の中身を訊いた。

「実は私、奴良組に行こうと思ってるんです。本当なら、すぐにも鯉伴様を殺めてしまった事を謝りに行こうと思ってたのですが……情けない事に、組の皆やリクオに会うのが恐くて……」
「なるほど」

事情は解った。

そりゃあ、すぐには会いに行けないよな。利用されてたとは言え、旦那さんを殺した責任感じたら、謝りたい気持ちと同時に会う事を恐れちゃうよな。二つの感情が絡み合って、行動出来なくなっちゃうんだよな。俺もガキの頃に、同じような経験があるよ。いや、俺のガキの頃の経験と山吹さんの辛い過去を一緒にしちゃ失礼だけど、感じ的にはそうだろ？ 謝り辛い感は同じじゃん。

つまり、一人じゃ会いに行き辛いから一緒に来て欲しいと。そういう訳なんだな。

うん、事情は解ったけど一つ腑に落ちない点がある。

「でも、それでしたら別に俺じゃなくてもいいんじゃないんですか？」

弱くて情けない俺と一緒に、京妖怪の誰かの方が何かと心強いでしょう。

しかし、山吹さんは苦笑いを浮かべて言った。

「そうなんですけど、あの、ほら……こんな事言ったら失礼ですけど、皆さん見た目が……」

ああ、と俺は納得して頷いた。

化け物面の妖怪達を、街中に連れて行く訳には行かないよな。万が一、人に見つかつたら一大事だ。奴良組に行く前に、警察に捕まるか、何処かの研究施設行きだよ。それに、京妖怪連れて行ったら、奴良組に辿り着いても警戒される可能性があるからな。

ソコで白羽の矢が立ったのが、俺と言う訳か。俺は京妖怪側で、唯一の人間だからな。つまり、弱くて頼りないけど外見的に問題が無く、奴良組を極力刺激しない俺が選ばれたのだ。

この推測だと、俺は頼られてんだか頼られて無いんだか、よく解らないな。まあ、いいや。

「解りました。俺なんかで良ければ、一緒に行きますよ」

「本当ですか？」

「はい」

「ありがとうございます！　優しいんですね」

素敵な笑顔で礼を言う山吹さんに、俺は顔が熱くなる。

「い、いえ、そんな事無いですよ」

ああ、熱い熱い。あんな穢れの無い笑顔は、山吹さん以外で見た事が無い。

くっ……！心の芯まで墮落して汚れきった俺には、彼女の笑顔は眩し過ぎる！あんな笑顔が、この世に存在するんだな。

山吹さんの笑顔を見て、しみじみと思った時だった。突然、乱暴に扉が開かれ、二つの声が上がった。

「お姉様！私も一緒に行きます！見た目的にも強さ的にも、そんな墮落人間より上です！」

「マリア様アアア！このしょうけらも、命に懸けてお守りいたします！」

「いや、盗み聞きですか！？プライバシーとか無いの！？」

部屋に乱入してきたのは、狂骨としょうけらの二人だ。俺達の会話を盗み聞きして、自分達もお供すると言ってきやがった。

物凄い勢いで迫ってきた二人に、山吹さんは苦笑してる。

「あ、あはは……。それじゃあ、お二人にもお願いします」

「はい！」

「御意！」

ああ、頭痛え。

ホントに大丈夫なのかよ？

何だか、不安になってきた。

*

そんな事があって、奴良組本家の屋敷にやってきた訳だ。

ちなみに、羽衣狐は万が一の時の為に山吹さんの中で控えている。戦闘になっても、羽衣狐が居れば離脱くらい難なく出来るハズだ。俺達の中で、彼女ほど頼もしい妖怪は居ない。

しかし、本家の前に着いたはいいけど、この後どうしようか？ どうやって入れればいいかな？ 普通に門から入るか、それとも忍び込むか。

中に入る方法を考えてた時だった。

「ああ！ お前達は！？」

門の向こうから、声が上がった。

見ると、奴良組の連中が居た。一人は、笠を被った坊さんのような妖怪で、笠の下はイケメンだ。もう一人は坊さんのような格好なのに図体がデカくてガタイの良い妖怪だ。見た目的には、二人目の方が恐いな。いかにも妖怪って顔してるから。

「テメー等、京妖怪じゃねーか！」

「ココへ何をしに来た！？」

警戒心剥き出しで、二人が声を荒げた。

まあ、当然の反応だよな。しかし、分かっちゃいたけど、マズいな。このままじゃ騒ぎを聞きつけて、他の連中が集まってくるのは目に見えてる。そうになったら、鯉伴の件を謝るところじゃなくなっちまう。

「私達は、別に戦いに来た訳じゃないわ！」

「信用ならん！」

狂骨が訴えるが、笠の坊さんがバツサリと切り捨てる。

このまま京妖怪に任せてたら、喧嘩勃発する事間違いなしだ。そんな事を思っていると、狂骨が助けを求めるような眼差しを向けてきた。

解ってるよ。俺だって、奴良組と出会ったらこうなる事位、予想済みだ。当然、昨日の内に対応策は考えてある。狂骨に一つ貸しを作りたいが、今回は山吹さんの為に来たんだから、そういうのは止めにしよう。

ぶっちゃけ今すぐにでも帰りたいくらい怖いけど、肚^{はら}決めて行きますか。

「あのオ、ちょっとすみません」

「何だ!？」

狂骨との間に割って入った俺に、笠の坊さんが睨んでくる。

「ままま、とりあえず落ち着いて話し合いましょう。ね？ 話し合いましょう」

やんわりとした口調で、相手を説得しながら手を伸ばす。こういう時は、下手に出るのが基本だ。どちらかが低姿勢にならないと、話が進むどころか始まりすらしないからな。

「そんな事を言って、我等を油断させるつもりだろう!」

笠の坊さんが、伸ばした俺の手を払った。

——「ココだ!」

キラーン、と俺は目を光らせ、計画を実行した。

「ぐぎゃがあああああ!」

悲鳴を上げる俺は、払われた手を勢いよく門にぶつけ、そのまま地面に倒れた。

「だ、大丈夫ですか!？」

「ちよつ……ちよつと、人間! アンタどうしたのよ!？」

山吹さんと狂骨が、俺の傍に駆け寄ってきた。

心配そうに顔を覗き込んでくる二人に、俺は腕を押さえ、苦痛に歪んだ表情で答える。

「や、やられ……た……! い……今、払われた時、に……腕が、ここ、骨折したあ……!」

「いや、今、拙僧が払った後に自分で腕を門にぶつけてたぞ……?」

——クッククツ! コレが、俺の考えた策よ! 向こうが手を出す前に、争えない状況を作り出す。当たり屋的な行為で先手を打ち、相手側の手を封じ込むのだ。腕をぶつけたのは、よりリアルな演技をする為だったんだけど……相手にモロバレだね。

俺が痛がっていると、しょうけらが相手側に歩み寄った。

「貴様、どう責任を取るつもりだ? マリア様の前でひざまづくなら、許してやらんでもないぞ」

「いや、だからソイツが勝手に骨折しただけだろうが! ってか、テメー生きてやがったのか!？」

しょうけらを見て、図体のデカい坊さんが声を荒げた。何か因縁でもあるのだろうか?

まあ、そんな事は今はどうでもいい。今は策を成功させる方が、大事だ。

半ば本当に痛がりながら、俺は奴良組の妖怪に言った。

「あ……あのあ……こっちは、いぢつ……腕折られたので、これで京都での事は……み、水に流して、中で話しませんか？」

「いや、折ってないぞ！ 拙僧はお主の腕など折ってないぞ！ 罪を擦り付けるな！」

笠坊さんが必死に否定するが、こっちだって引かないぞ。何かなんでもそっちの非にして、争えない状況を作ってやる。

一進一退の攻防を続く門の前で、声が差し込まれた。

「騒々しいぞ！ 何事だ？」

「黒！ 青！ 一体どうしたんだい！？」

屋敷の中から、大勢の妖怪を引き連れて誰かがやってきた。

「リク才様！」

二人の坊さんは口論を止め、妖怪を引き連れた奴に顔を向けた。

「リク才？」

名前を聞いた俺は、顔を上げて先頭に立つ奴を見た。

茶髪で眼鏡をかけていて、大人しそうな感じの男子だ。二人の坊さん妖怪から『リク才様』と呼ばれてたけど、京都で見た『リク才』とはまるで別人だ。

その眼鏡男子の隣には、式條城で会った事のあるカラス天狗とか言う妖怪が、羽を使って宙を飛んでる。

騒ぎが収まり、場に生まれた沈黙を破ったのは眼鏡男子だった。

「山吹乙女さん、ですか……？」

眼鏡男子を除いた全員が、ざわついた。

「ええ」

俺の傍に居る山吹さんは、眼鏡男子を見つめて、小さく頷き、答えた。

どうやら奴良組も、羽衣狐の体が山吹さんって気付いてたみたいだ。あれ？　じゃあ、何で二人の坊さんは警戒してきたんだ？

相手の立場になって、考えてみる。奴良組は、羽衣狐の体が山吹さんだと知った。その山吹さんが、京妖怪を連れて奴良組にやってきた。

ああ、また羽衣狐が憑依して、意識を乗っ取られてると考えたのか。けど、半分正解で半分不正解だな。確かに羽衣狐は憑依してるけど、今は山吹が体の主導権握ってるからね。

人格が山吹さん本人であると分かった奴良組は、俺達を本家の屋敷内に入れてくれた。

俺の腕？　強く打って地味に痛いけど、大した事ないよ。

*

無事、奴良組の屋敷に入った俺達だったが、すぐに危機的状況に陥ってしまった。

俺、狂骨、しょうけらの三人は、屋敷の一室に案内された。部屋の中央に座る俺達を、沢山の妖怪達が囲んでいる。目を鋭くさせて、メツチャ睨んできます。超恐いっす。

山吹さんは、俺達とは別の部屋で眼鏡男子達と話をしてる。

部屋に居る妖怪達は、俺達が妙な動きをしないように見張ってるのだ。

俺は恐怖に体を震わせ、なるべく目を合わせないように顔を下に向けてる。

「ヤベーよ、完全に囲まれてるよ。メツチャ睨まれてるよ、ガン見なんですけど……。ヤクザみたいに、メンチ切ってるよ。胃に穴が空きそうだよ……」

「こんな下級妖怪相手に、怯えてるんじゃないよ」

「心配無用だ。我々には、マリア様のご加護がある」

「何でアンタ達は、そんな余裕でいられるの？ どうして？」

ビビりまくる俺とは対照的に、狂骨としょうけらは全然余裕だ。

敵地の真ん中で、囲まれてるつてのに、全く動じてない。

ひょっとして、この数とやり合っても勝てる自信があるのか？

どんだけ？

お前等が耐えられてもな、俺が限界なんだよ。今にも周りの妖怪どもの容赦無いプレッシャーで、押し潰されそうなんだよ。心臓なんて早鐘のようだし、冷や汗が止めどなく出てる。精神的に辛くて、倒れそうだ。

——山吹さアアアあん！ カムバック！

俺は心中で叫び、山吹さんが早く戻ってくる事を願った。

その時だった。通路側の襖が開いて、誰かが入ってきた。

「皆さん、お待ちせしました」

「山吹さん！」

「お姉様！」

山吹さんが戻ってきて、俺は安堵から涙目になる。涙で視界が滲んで、山吹さんの姿がぼんやりと見える。この地獄から俺を救い出

しにきた、女神のようだ。

もう帰ろう。こんなおつかねえトコから、さっさとオサラバしましょう。

そう思っ、俺が立ち上がった時だった。

「あ、あの、ぬらりひょん様とリクオが、貴方の事を呼んでましたよ」

「……は？」

山吹さんの言葉で、俺は絶望のどん底に突き落とされた。

——オイイイイイイ！ マジでかアアアアアアアアア！
？ てて、敵のダブル大將が俺をお呼びだとオオオオオオオ！？
コレ、明らかにヤバ過ぎだろう。山吹さんは奴良組の身内みたいなもんだから、まだ大丈夫だけど、俺関係ないじゃん。完全な部外者で敵側じゃん。下手したら、襲われる可能性があるじゃんかよ。マジ恐えよ。

小刻みに震える俺に、山吹さんが微笑みを向けてくる。

「そんなに怯えなくても大丈夫ですよ。お二人共、優しい方ですから」

いや、そりゃ身内には優しいでしょうけど、他人で敵側に居る俺にまで同じ対応とは限らないでしょう？ ああ、ヤバイ、ショックのあまり卒倒しそうだ。

ついさっきまで女神に見えてた山吹さんが、今は魂を迎えに来た天使に見えた。

部屋を出た俺は、ぬらりひょん達が待っている部屋の扉の前に立っていた。

ああ、嫌だよ、帰りたいよ。帰りましようよ、山吹さん。つかあ、あの二人は俺に何の用があんだよ。俺なんかと話たって、面白くも何ともないよ？俺を潰したって、何の得にもならないよ？そんな無駄な事をするより、もっと有意義で大事な事があるハズだ。

はあ、と溜め息をつく。いい加減、もうやめるか。ココで突っ立って、帰りたい帰りたいと心の中で連呼しても何も進展しないし解決しないんだ。もう覚悟決めて、中に入るしかない。

ええい、南無っ！

意を決した俺は、襖を開けた。

中には、デカ頭爺さんと眼鏡小僧が居た。

「おお、若造。また会ったのお」

「ど、どうも」

ニヤリと笑ったのは、デカ頭爺さん改め奴良組初代総大将・ぬらりひょんだ。背がちっこくて、頭も変な形になってるヘンテコ爺さんなのに、妙な威厳が感じられる。魑魅魍魎の主だったのは、伊達じゃないってか。

「ほれ、そんなトコに立つとらんで遠慮なく座れ座れ」

「は、はい。失礼します」

ぬらりひょんに促され、俺は二人の前に用意されてる座布団に座った。

目の前に座った事で、更に緊張感が増す。ヤベツ、トイレ行きたくなってきた。

腹の調子が悪くなったのを感じた時、ぬらりひょんの隣に座る眼

鏡小僧が口を開いた。

「初めまして。先日、奴良組三代目を継ぎました奴良リクオです」
「あ、ああ。こちらこそ、初めまして。」こ丁寧にどうも

礼儀正しいリクオに、俺も頭を下げた。

やっぱり、この眼鏡小僧がリクオのようだ。でも、どう見ても京都の奴とは別人だ。ちよつと気になるけど、今は質問出来るような空気じゃないから、頭の片隅にでも置いておくか。

互いに挨拶を済ませると、ぬらりひょんが笑みを崩さず言った。

「まずは、息子の嫁を護ってくれて礼を言う」

「い、いえ、そんなお礼なんて……」

謙虚な様子で対応する。

今のところ、二人から敵意や殺気のようなモノは感じられない。
頼むぞ、このまま平和なまま終わってくれ。

「鯉伴の件は、あの娘から全部聞いた……。ワシが狐の呪いに気付くのが遅かったばかりに、あの娘には随分と辛い想いをさせてしまった……」

笑みが消えたぬらりひょんの顔に、僅かに後悔の色が浮かんた。

ところで、今ちよつと気になるワードが出たぞ。話に出てきた『狐の呪い』って何よ？ 前に、山吹さんが過去を語ってた時に、羽衣狐が動揺してたけど、ソレと関係あるのか？ まあ、ソレは今度本人に訊いてみよう。

それよりも気になる事があるので、勇気を振り絞って口を開いた。

「あの、ちよつといいですか？」

「何じゃ？」

「その……山吹さんは、どうかなるんですか？　何か、罰を受けるとか……」

恐る恐ると言った感じで訊いたのは、山吹さんの処遇についてだ。組の大將を殺されて、お咎めなしなんて事は無いと思う。

しかし、ぬらりひよんの口から出たのは、意外な答えだった。

「ああ、あの娘の事なら心配はいらん。三代目のリクオの権限で、お咎めなしじゃ」

「え？　マジっすか！？」

驚きのあまり、敬語を忘れて身を乗り出す。

「確かに、あの娘は鯉伴を手にかけた……だが、ソレは晴明と山本の陰謀に利用され、操られてやった事じゃ……。それに何より、あの娘自身が自分の行為を悔み、苦しんでおる……。これ以上、あの娘に辛い想いをさせる訳にもいかんからな……」

奴良組の決定を聞いて、俺は思った。

良い奴等じゃんってな。

リクオは、顔も見た事無い実の母親でも無い山吹さんの事を、許してくれたんだ。組の総大将としちゃあ、甘い考えかもしれないけど、何か目の前に居るリクオらしい判断だと思った。見た感じ、優しそうな性格の奴だからな。

ホッと安堵すると、ぬらりひよんが話しかけてきた。

「それでな、お前さんにもう一つ話がある」

「え？　何ですか？」

「リクオ」

ぬらりひょんは、隣に座ってるリクオに声をかけた。

ソレに無言で頷き、リクオは真剣な顔で俺と向き合った。目が合った瞬間、ちよつと気圧された感じがした。ただの優男かと思っただけ、仮にも妖怪の大將なんだな。

「実は、貴方にお願ひがあるんです」

「お、お願ひ？」

「はい。これから奴良組は、地獄から甦る清明との全面抗争に入ります。清明を倒す為に、貴方の力を貸してほしいんです」

「はあ！？」

おいおい、何を言うのかと思えば、ホントに何言ってるんだ？ 馬鹿言っちゃいけないよ、リクオ君。

「いやいやいやいや、おかしい！ 絶対おかしいよ！ いや、京都に居る陰陽師に頼むとかなら解るけど、何で俺？」

俺は陰陽師で無ければ妖怪でも無い、普通の平凡な人間だ。漫画の主人公のような、特別な力がある訳でもない。そんな俺の協力を得ようだなんて、理解に苦しむぞ。言つとくが、俺メチャクチャ弱いぞ。喧嘩も数えるくらいの経験で、相手もそんな強く無い。しかも結果は引き分けた。

疑問に思ふ俺に、リクオが答える。

「式條城の戦いで、貴方は塵地蔵を倒しました。あの時の閃きは、きつと清明を倒す力になります」

「いや、あんなの偶然思い付いただけだし……それにトドメを刺したのは、羽衣狐だからね？」

あの時のリクオと今のリクオが同一人物かどうか知らんが、もし見てたんならそれ位解るだろう？

「それだけじゃありません。その前にも、土蜘蛛と闘って退けたじゃないですか」

「女狐が言つとつたぞ」

——羽衣狐エエエエエエエエエエエエ！ 何余計な事喋ってくれとんじやああああああああああ！

リクオに続いて言つたぬらりひよんの言葉に、俺は内心にシャウトした。

山吹さんだけでなく、羽衣狐も話に参加してやがったようだ。あの女狐、何因縁の相手の前に出てんだよ！ よく争い事が起きなかったな！

頭をグシャグシャと掻き乱し、俺は一旦リクオから顔を逸らす。その時、いや待て、と考え直す。俺も晴明の野郎をブツ倒そうと思つてたから、コレって何気にチャンスじゃね？ 俺だけじゃ明らかに力不足だが、奴良組と手を組めば力を得て野郎を倒せる可能性は上がる。晴明に勝つなら、戦力は多い方がいい。

俺は別に、人を見る目がある訳じゃない。でも、コイツは信用出来るだろう。少なくとも、俺よりは良い奴だ。

俺の中で答えは決まった。

「分かりました。こんな俺なんかでよければ、協力します」

「ありがとうございます」

リクオは嬉しそうな笑顔で、礼を言ってきた。

場が少し和んだところで、少しリクオ達と雑談をした。話を聞くと、リクオは妖怪と人間のクォーターで、妖怪の血は四分の一しか流れてないらしい。そのせいで、妖怪の姿になれるのも一日の四分

の一だそうだ。俺が式條城で見たリクオは、妖怪に変化したリクオだったのだ。

そして、俺の背中を斬り付けた刀の件も解った。アレは祢々切丸と言って、陽の力がこもった妖怪だけを斬る剣なんだってさ。だから、人間の俺は斬られずに軽傷で済んだんだ。いや、人間に生まれて良かった。霊長類最高。

それから、京妖怪と奴良組の敵対関係だが、微妙な感じになっている。晴明を産むと言う宿願が果たされた今、とりあえずは敵対する気は無いそうだ。リクオ達は京妖怪にも協力を仰いだみたいだけど、母親である羽衣狐は断ったそうだ。まあ、当然だろうなと思ったが、話には続きがあった。俺が晴明と戦いたいと思って、奴良組と手を組んだ場合は、俺に協力すると言ったのだ。奴良組の傘下には入らないけど、俺が戦うなら協力するみたいな形だ。ね？ 微妙でしよう？

まあ、そんな話をしてる間に、随分と時間が過ぎてしまった。

「今日は泊まっていけ。京妖怪と奴良組ワシラの親睦を深める宴会を開くからのう」

はあ、と俺は誘いに頷いた。

何か断り辛い雰囲気だったから、押し切られるように頷いてしまった。

番外編：本家（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの四季さんからの質問。

『「ちょい質問…蛇達の京妖怪から、どんなリンチをくらった？
やっぱり、それぞれ畏で？それとも普通に半殺し？

見舞品として…埼玉県の菓子、十万石饅頭を二箱（計24個入り）
を送る』

俺「畏と普通の半殺しの合わせ技だったよ。マジ半端なかった……
狂骨の蛇に締め付けられ噛みつかれ、がしゃどくろに叩かれ、しょ
うけからはバカデカい十字架で頭を何度も叩かれ……よく生きて
たな、俺……。」

ああ、饅頭ありがとう。いやゝ、酷い目に遭った後や疲れた後
には、やっぱり甘い物だよな。……あれ？ 中身が無い……？」

羽衣狐「饅頭なら妾が食べたぞ」

俺「ファッキン！」

質問ありがとうございました！
質問は、引き続き募集中です。

番外編：宴会

時間はあつという間に過ぎて、夜になった。

奴良組の大広間には、大勢の妖怪達が並んで座ってる。その中には、京妖怪の姿もある。ぬらりひよんの計らいで、両者の親睦を深める為に宴会を開く事になり、羽衣狐が京より呼び寄せたのだ。皆それぞれの席に座り、目の前には奴良組が用意した酒や料理が並べられ、宴会の準備が整っている。

大広間の奥に位置する上座には、三代目のリクオが座して一同を見渡してる。

「晴明を倒す為に、俺達奴良組は京妖怪と共同戦線を張る事になった。今宵は、俺達の仲を深める親睦の会……だから……」

一旦言葉を切り、リクオはニヤリと笑って続けた。

「因縁も何も忘れて、とにかく飲んで暴れる！」

うおおおおおおおおおおお！

大広間が揺れてしまいそんな大声を上げ、妖怪達は騒ぎ出して宴会が始まった。皆騒ぎたくてウズウズしてたようで、弾かれたように飲み出して、一気にテンション上げて盛り上がってる。

「酒が足りね〜ぞ〜！」

「おりゃおりゃ！ 裸踊りじゃ〜！」

「馬頭丸〜！ 俺にお酌しろ〜！」

「何でボクが!?」

「京妖怪、飲み比べせんか？」

「上等じゃコラー〜！」

あっちこっちから声が飛び交い、飲み比べが始まり、お祭り騒ぎになって大広間はメチャクチャになっていく。京妖怪も奴良組も関係無く入り混ざって、酒が回った赤い顔でおおいに盛り上がっている。

「いや、打ち解けんの早くね？」

妖怪達が騒ぐ様子を、俺は上座から見渡して呟いた。

昨日の敵は今日の友って諺があるけど、いくらなんでもオメー等は打ち解けんの早過ぎ。四百年続いてきた因縁は何処に行った？オメー等の辞書には、『わだかまり』って言葉は無いのか？酒の二、三本で吹っ飛んじゃうもんなの？俺の感覚や認識がおかしいの？

やっぱ、妖怪の世界はよく解らん。俺は苦笑いを浮かべて、酒を飲む事しか出来なかった。まあ、別にいいけどね。喧嘩はまっぴら御免だが、こういう両者楽しんでの馬鹿騒ぎならいいんじゃないの。正直、京妖怪と奴良組がぶつかるんじゃないかって、宴会が始まるまで内心冷や冷やしてたんだけど、杞憂に終わって良かった。

しかし、それはそれだ。この場合は、どうも苦手だ。お猪口の酒を口に含んで、俺は思った。

——ダメだ……ダメダメ……。この空気、騒ぎ空間、超苦手だ……。他の奴等のように、陽気に入り込んで一緒に楽しむ事が出来ない……。元々、他人と接する事……。コミュニケーションが苦手だから、上手く混ざる事が出来ないんだ……。その結果、誰とも話さず関わらず、浮いた状態になる……。つくづくダメだ、俺は……。

子供の頃は普通に、周りの友達と一緒に騒ぐ事が出来て楽しんでいた。けど、大きくなっていくにつれて、何故か他人と接しないようになっていった。結果、他人の輪から外れて、騒ぎの場では隅っこが定位置みたいになってしまった。性格の問題だから、簡単になお

せないのが難儀なんだよな。ああ、自分の性格が恨めしいぜ。

今夜の宴会で、唯一の救いは席が上座だって事だ。もし、連中のだ真ん中にも座ってたなら、一人縮こまって明らかに浮いた存在になってる。席が離れた上座で、本当に助かったよ。

「よお、アンタは連中と一緒に騒がないのか？」
「ん？」

ちびちび酒を飲んでると、横から声をかけられた。

俺の隣には、リクオが座ってる。と言っても、今は妖怪の姿に変わってるけどな。その姿は、京都で見たリクオそのものだった。目つきが鋭くて、度胸ありそうで、カッコ良くて、非の打ちどころが無い。コイツの隣に居たら、俺の地味度が更に増すじゃねーか。まあ、別にいいけどね。

「いや、俺はこういうの苦手でさ」

「そうかい。まあ、酒なら幾らでもあるから好きなだけ飲んでくれ。ほら、酌してやるぜ」

「お、おお。悪いな」

酒瓶を差し出され、俺はお猪口に酒を注いでもらった。

「つか、お前も普通に酒飲んでるけど、確か中学生くらいだよな？」
「酒飲んじや駄目だろ？」
「いや、今は妖怪だから人間の法律に引っ掛からないのか？」
「まあ、いいや。俺には関係ねーし、ルールは破る為にあるってどっかの誰かが言ってたしな。」

リクオから酌してもらった酒を飲みながら、俺はコイツを見る。目を閉じてクールに酒を飲む姿は、実に画^えになる。俺が飲んでもこっちはならない。これが、普通とイケメンの超えられない差か。

妙な敗北感と悲しみを抱いて、俺は前に向き直る。上座と広間の温度差は、かなり大きい。輪に入らず静かに酒を楽しむ俺とリクオ

に対して、京や組の妖怪達のテンションは最高に盛り上がった。門の前で会った、笠のイケメン坊さんこと黒田坊は、何やら狂骨と口論してる。あっ、狂骨のビンタが黒田坊の顔にヒットした。アレは痛いぞ。俺も何回か喰らった事あるからな。それで別の所じゃあ、デカイ図体の青田坊がしゅうけらと向かい合って飲み比べをしている。何でも、京都でしゅうけらがブチのめされた相手が青田坊で、二人の間で少なからず因縁があるそうだ。んで、宴会の場で飲み比べ対決してんだな。こっから見た限りじゃ、しゅうけらが限界を迎えそうだ。アイツ、酒強く無いからな。基本アホだし。

「おいおい、人間！ 酒があんま進んでないじゃねーか！」

広間の騒ぎに気を取られてると、不意に声をかけられた。

いつの間に居たのか、納豆のような頭をした奴と小鬼みたいな奴が側に立ってた。

コイツ等も奴良組の妖怪なのか？ と疑問に思いながら俺は口を開いた。

「いや、日本酒は初めてだから……」

「何だよ、酒もロクに飲めねーのかよ！ 情けねーな！」

納豆小僧に続いて、他の小妖怪も笑い出す。

小馬鹿にする小妖怪共に、俺は怒りで歯を食いしばる。

——ああ？ テメー等、こっちが下手に出てりや勝手な事言いやがって……。特に納豆小僧！ テメーの頭の中に詰まってる納豆プチまけて、グチャグチャ踏み潰してやろうか？ おお？

しかし、小物相手に怒るのも大人げないと思い、俺は怒りの矛を鞘に抑え込む。

その時だった。

「貴様等！ その人間を愚弄する事は許さんぞ！」

騒ぐ妖怪の中から、一際デカい声が上がった。

俺を含めた一同が視線を向ける先に、一人の京妖怪が居た。

——ありゃあ、白蔵主^{はくそうす}じゃねーか。

白蔵主。何て言ったらいいのかな……アレだ、顔が微妙に髑髏のような感じで、額から二本の角が生えてる見た目恐い妖怪だ。デカイ図体に見合った怪力の持ち主で、オマケに空まで飛べる何気に凄い奴だ。過去に羽衣狐に拾われて、以来、羽衣狐に仕えている。

広間の大半の注目が集まる中で、白蔵主は腕を組み、堂々とした態度で言い放った。

「その人間は、我等京妖怪の象徴である羽衣狐様を身一つでお守りした恩人である！」

「いや、最終的には俺が羽衣狐に助けられたんすけど……」

「その人間は、我等のような力は無くとも、知力を駆使して羽衣狐様を護られてきた立派な方だ！」

「あの、すいません。やめてくれませんか？ そんな大層な人間じゃないんで、後ものつそい恥ずかしいんで、やめてくれません！」

「普段は腑抜けているが、いざとなれば卑怯汚い最低な人間の本性を発揮し、策略に長けた悪党の如く……」

「ちよっ……やゝめゝろゝよゝ！ アンタは俺を庇いたいのか、陥れたいのかどつちなんだよ！？ 分かったよ！ 飲めばいいんだろ！ 俺が酒を飲めば、全て解決だろ！？」

白蔵主のいらん言葉に俺は、頭を抱えて悶えた。

何で宴会の席で、こんな辱しめを受けなきゃならねーんだよ！？

白蔵主に悪気は無いと思うけど……あの野郎、後で覚えてろ！

くっ、皆の視線が痛い……！ もう嫌だ！ 宴会嫌い！ 僕もう阿部君の家に帰る！

心中で嘆いてると、リクオが軽く肩を叩いてきた。

「アンタも随分と大変そうだな」

「うつせーよ、リクオ！ オメー同情するなら酒付き合えや、コラッ！」

「おいっ！ ちょっと……待て、落ち着け……がぶっ！？」

「クール気取ってんじゃねーよ、イケメン三代目がアアアアア！」

怒りに任せて、俺はリクオの口に酒瓶を突っ込んだ。少しだが酒を飲んだ事もあって、今の俺に躊躇と言う言葉は無かった。

「リクオ様がやられたぞ！」

「おお、いいぞ人間！」

「やれやれ！」

暴拳とも言える俺の行動に、奴良組の小妖怪や京妖怪達が煽るように盛り上がる。

ヤッベ、何か吹っ切れたせいでテンション上がってきた。

「よーし、酒の追加お願いしまーす！ 一滴でも残した奴はアレな、死刑だからな！ 切腹しろよ！」

目の前にある酒を一気に飲み干して、俺のテンションは更に上がる。酔いが回ってきて、良い具合に気持ち良くなってきた。

「お酒お持ちしました〜！」

丁度いいタイミングで、新しい酒が来た。

持って来てくれたのは、髪が長く白い着物を来た女の子だった。模様みたいなグルグルな目が特徴の可愛い娘だ。

「ん、ありがとう！ キミ、可愛いね。名前は？」
「ええっ！？ あ、ありがとうございます。えと、私は雪女の氷麗ひるいです」

俺の言葉に動じて、氷麗は頬を赤くして目を見開いてる。
可愛い反応をするじゃないか。

「氷麗さんは、彼氏とか居るの？」

「はええっ！？ か、彼氏、ですか？ い、いえ……居ませんけど……」

おお、おお、顔を真っ赤にさせちゃって、ホントに可愛いなあ。
酒の力って凄いよね。普段なら言えない言葉を、酔っていると恥ずかしげも無くサラリと言えちゃうんだから。しかも、今飲んでる酒はかなり強いから、酔いも激しくあつという間に出来上がってしまった。

俺が氷麗に絡んでると、まだ近くに居た納豆小僧が声を上げた。

「おおっ！ 人間が雪女を口説いてるぞ！」

「マジでか！？」

「ひゅーひゅー！ そのままくっついちまえー！」

広間のあちこちらから、冷やかしの声が上がる。

——ふっふっふっ！ 普段の俺なら腑抜けて出来ないが、酔った今の俺ならイケる！ 酔いによって目覚めた俺は、例えば相手が魑魅魍魎の主であろうと止める事は出来ないぜ！

最高にテンションが高まり、皆の期待を一身に背負い、氷麗に更なる追い打ちを仕掛けようとした時だった。

「フッフ……人間よ……！ 妾^{わらわ}の前で浮気をするとは、いい度胸じや……！ 死ぬ覚悟は出来ておるうな……！」
「へえ……！？」

背後から聞こえた声に、思わず声が裏返った。

酔いが一気に覚め、テンションは下がり、熱の代わりに大量の冷や汗がドツと額から流れ出る。背中に悪寒を感じながら、後ろを振り返ろうと首を小刻みに動かす。見てはいけないと本能が訴えても、油の切れたロボットのようなきこちない動きで振り返り、ついに後ろを見てしまった。

ソコには、黒を身に纏った女王様が居た。腰に手を当て、見下すような目で威圧感を放っている。

「は、はは、羽衣狐エエエエエ！？」

——ば、馬鹿な！？ な、何故、羽衣狐が大広間^{ヨコ}に居るんだ！？ 確か別の部屋で、ぬらりひょんと二人で飲んでるんじゃないかったのか！？

異様な迫力を放つ羽衣狐を、俺は戦慄の表情で見上げる。完全に酔いは吹き飛んで、いつものビビりに戻ってしまった。薄い笑みを浮かべる羽衣狐が、魂を狩りに来た死神、いや、悪魔のように見えた。

さっきまで騒いでた妖怪達も、羽衣狐の登場に静まり返っている。
ざわ……ざわ……ざわ……。

その時、俺は悟った。

コ・ロ・サ・レ・ル。

「た、頼む……！ いや、お願いします……許して下さい……！ 殺さないで……！」

尻をついたまま後ずさりながら、俺は本気で命乞いをした。
酒に溺れるなってよく聞くけど、こういう事なんだなと実感した。
もっと早く気付いていれば、女王様の逆鱗に触れる事も無かっただ
ろう。

死を悟り、半ば自分の人生を諦めた時だった。

「ああ、ごめんなさい。まさか、そこまで恐がられるとは思ってま
せんでした」

「へ……？」

羽衣狐の顔が、一変して笑顔に変わった。

その笑顔は、まるで悪戯が成功した子供のような顔だった。訳が
解らず、俺の頭の中はいまだ混乱している。

羽衣狐は、静かに俺の前に座った。

「ふふふ、驚かせてごめんなさい。氷麗が困ってる様子だったから、
つい羽衣狐の真似をして注意を」

悪戯っ子のような笑顔で、羽衣狐——いや、山吹さんが言った。

「は、はは……」

俺は力の抜けた笑いを漏らし、苦笑いを浮かべる。

何はともあれ、助かった。

しかし、俺が悪いとは言え、山吹さんも注意の仕方を考えて欲し
い。雰囲気とか本人ソックリで、マジで殺されるかと思ったもん。

もし、本物に見つかってたら……おお……死亡確定だぜ。

奴良組の屋敷にある小さな一室。

大広間で宴会が賑やかに開かれてる頃、二人の妖あやしが酒を飲んでい
た。

羽衣狐とぬらりひょん。四百年前の大坂城にて対決し、長き因縁
を持ち続けてきた二人だ。

「まさか、こうしてアンタと酒を飲む日が来るとは夢にも思わな
ったのお」

「ふん……」

羽衣狐は依代である山吹の体を抜け、本体でぬらりひょんの相手
をしている。

酒の相手をしてから羽衣狐は厳しい顔つきをしているが、ぬらり
ひょんは不敵に笑っていた。

「相当気に入ってるようじゃのう、あの人間」

「だから何じゃ？」

「なに、大坂城で闘り合ったアンタからは想像し難いから、気にな
つてのお」

羽衣狐も、一度は人を愛した妖怪だった。しかし、人間に裏切ら
れ、襲われた事で憎悪の感情が芽生えた。晴明復活の事もあり、人
間を力を得る為の餌としか認識してこなかった。

それが、現代で劇的に変わった。

お猪口の酒を一口含み、羽衣狐は言った。

「真まこと、異な人間じゃ……。妾を妖と知って好いてきたのだから、お
かしな男よ……」

「じゃが、お前さん、そんなアイツに惚れたんじやる？」

ニヤニヤと笑うぬらりひよんの顔を見て、羽衣狐は表情を陰くさせた。

何だか自分の心を見透かされたようで、不愉快で悔しかった。

「お前には関係なかるう……」

「相変わらずつれん女狐じゃのう」

「黙れ、老いぼれめ」

からかうようにぬらりひょんは笑い、羽衣狐は不機嫌そうに眉根にシワを寄せる。

大広間での賑やかな宴会とは反対に、口数は少なく、静かに酒を飲むだけだった。

*

「うばええええええええええええ！」

現在、俺は屋敷の隅っこで盛大に吐いてます。

完全に酒に溺れてしまった。種類にもよるが、こんなに酒が強いとは思わなかった。ビールなら何本か飲んでも平気なんだけど、やっぱり別モンなんだな。

「大丈夫ですか？」

俺の背中を擦り、気遣ってくれるのは山吹さんだ。
ホント、優しいなあ。

「だ、大丈夫ねす……もう、大分吐いたんで……っ！ あつ、やつぱダメっす……うおええええええええええええええええ！」

ち、ちくしょう！ 吐き気が収まらねえ……！ 腹の底から込み上げてきて、どうにもならねえ……！

見えづらいが、俺の顔の真下には汚いゲロの池が出来上がってる。自分で作つという何だが、気持ち悪。

「き、決めた……。俺え、決めたよ、山吹さあん……。今夜限りで……俺は、日本酒は、飲まない……。全部ビールで済ませる……。！お、俺には、日本酒はまだ早かったんだ……。！」

「そ、そうですね。そうして下さい。出来れば、飲まないのが一番なんですけど……」

弱り切った俺を見て、山吹さんが苦笑いを浮かべる。

大分樂にはなつたけど、まだちょっと気持ち悪いな。けど、ここからは水とか軽めの飲み物で済ませれば、問題はないだろう。でも、しばらくは夜風に当たってようかな。

山吹さんに支えられながら俺は、フラフラとした足取りで縁側に向かい、腰を落とした。ふう、と一つ溜め息をつき、夜空を見上げる。夜空に浮かぶデカい月が、俺達を照らしてる。

「綺麗な月ですね」

「そうですね」

隣に座る山吹さんと一緒に、月を眺める。

俺は月から目を離して、チラツと隣に視線を向ける。月明かりを受けて、夜空を見上げる山吹さんの微笑みが綺麗に照らされて、幻

想的な雰囲気演出しているようだった。正直、月より綺麗で見惚れちまう。視線に気付かれる前に、俺は月に顔を戻した。

それから、空いてる俺の横に目をやった。

これで羽衣狐も居ればな、と思った時だった。

「人間……ソコで何をしておる……？」

不意に声をかけられ、廊下の先に目を向けた。

ソコには、右手にお猪口を左手にデカい酒瓶を持った、羽衣狐が居た。

「羽衣狐……アレ？　もしかして、酔ってます……？」

歩み寄ってくる羽衣狐は、顔は赤く、足はフラついていた。

「ほれ、人間。酒を持って来てやったぞ……。妾に付き合っがよい」
「えっ……！？」

羽衣狐の誘い、俺は頬を引き攣らせた。

——ちよっ……待ってくれ！　今さっき吐いたばかりで、俺の体はもう限界なんだよ！　それに、もう日本酒は飲まないって誓ったばかりなんだ！

「あの、羽衣狐。彼は、先の宴会で飲み過ぎて、今夜はもう無理をさせない方が……」

俺のピンチに、山吹さんがやんわりと羽衣狐を説得する。

しかし、据わった目で羽衣狐は俺達に迫ってくる。

「何じゃと……？　貴様ら、妾の酒が飲めぬと言っのか……？」

「い、いや、別にそういう訳じゃ……」

「妾は……妾は先ほどまで、汚らしいジジイと飲んでおつて、お前を恋しく想っていたと言うのに……。お前と酒を飲む日を、心から楽しみにしておつたと言うのに……」

「冗談つすよ、羽衣狐様！ もう、すぐ本気にしちゃうんだから、羽衣狐様は！ 付き合いますよ！ 喜んで、朝までお供させていただきますよ！」

——断れねエエエエエエ！ 目の前で泣かれたら、何か俺が悪いみたいで断れねえじゃねーかアアアアアア！

結局、羽衣狐の酒にも付き合つた俺は、またゲロを吐いた。
もう嫌だ！ 僕もう福岡さんの家に帰る！

*

嘘予告？。

「コレは、俺の意地……！ 追い詰められた人間の、最後の賭けだ
っ……！
喰らえっ……！」

「面白い……！ ああ、実に面白い人間だ……！ こんな人間は久しぶりだ……。
連れてくるのだ、ココに……地の獄——地獄になあ……！」

舞台は、現世から地獄へ——。

敵は地獄を支配する帝王——閻魔大王！

極限の選択

『三色』

「どれだ……？ どれが正解なんだ……！？」

「これはお前の器量を量るゲームだ……！」

「妾も行くぞ！」

恐怖の地獄遊戯

『地獄鬼ごっこ』

「お前、リクオを知ってんのかい？」

「あなた……！」

「ココで負けるようじゃ、晴明の野郎には一生勝てねえ……！」

最凶の番人 モンスター

『ケルベロス』

「戻ってくれ、土蜘蛛！」

「闘いは、力が強いだけじゃ決まらない。ソレを証明してやる……！」

人生を取り戻したければ

勝負に勝ち

生還せよ！

「俺は奴良組二代目総大将だった男……奴良鯉伴だ！」

『アヤカシ 地獄録篇』

「お前は敗者なんだよっ！」

「もう負けない……！ 絶対に勝つ……！」

本気にするとガツカリします。

番外編：宴会（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ライトさんからの質問。

『質問です。主人公は奴良組から主要陣からどんな印象を受けているのでしょうか？』

門前ではセコい姿を見せていますが、あの戦いだけを見ていたメ
ンツからは結構高い評価をされていると思うんですけど。』

リクオ（夜）「あの時は、敵ながら大した奴だと思ったぜ。体張つて大将護ろうとしたり、一人で塵地蔵に挑んだりしてよお……俺は結構気に入ってるがな」

氷麗「あの時は、ただただ驚くばかりでした。だって、陰陽師以外で、しかも普通の人間が居るだなんて思ってもいませんでしたから」

黒田坊「式條城の時と門前の時とは、まるで別人のようだったな。門前の時は、本当にセコく小さく見えたものだ」

質問ありがとうございます！

質問は、引き続き募集中です。

番外編：拝啓（前書き）

今回で最終回です。

番外編：拝啓

奴良組でのドタバタ宴会が終わって、数日が経った夜である。

俺は眠い目を擦り、口を大きく開けて欠伸をしながら屋敷の廊下を歩いていた。相変わらず薄暗くて、妖怪が棲む屋敷独特な雰囲気がある。

普段ならもう寝てる時間なのだが、呼ばれたのだから仕方ない。誰にと訊かれれば、相手は羽衣狐だ。何でも話があるから、夜になったら自分の部屋に来てほしいと言われたんだ。正直、何の話か心当たりは無いけど、あまり深く考えずに言われた通りに行く事にした。

少し歩いて、羽衣狐の部屋の前に着いた。俺と羽衣狐の部屋は、同じ階で距離も近いのだ。

部屋に立った俺は、軽くノックをした。

「入るがよい」

「失礼しまゝす」

中から羽衣狐の返事が聞こえ、俺は扉を開けた。

羽衣狐の部屋は、殆ど黒一色の異世界のような空間になっている。

羽衣狐が闇を好んでるからか、やたらと黒が多いんだよな。

いつもと同じ光景だが、一つだけ違う点があった。

「あれ？ 山吹さんじゃないんですか？」

「妾自身では不^{わらわ}服だと言うのか？」

「いや、そういう訳じゃないんですけど……」

部屋に居る羽衣狐は、珍しく山吹さんの体から出た本体の姿だった。

大体、羽衣狐は山吹さんの体に憑依して過ごしている。本体を見せるなんて、奴良組本家での宴会の時以来じゃないか？

「ちょっと意外と言うか、珍しいなと思って……」

「そうか」

理由を聞いて、とりあえずは納得してくれたようだ。初っぱなから不機嫌になられたら、たまないからな。

「それで、話って何ですか？」

「う、うむ……それはのう……」

俺が尋ねると、言い難い事なのか、羽衣狐は視線を左右に動かして言葉を濁す。

まあ、夜中に呼び出すくらいだから、他人に聞かれたくない言い難い事なんだろう。無理に先を促さないで、俺は羽衣狐の方から言ってくるのを待った。

ややあつて、羽衣狐が意を決したように口を開いた。

「実は、山吹の事でのう……」

「山吹さん？」

これまた予想外の話題に、俺は片眉を上げた。

「山吹は、奴良組の二代目と子が成せず、組を離れたと言ってたであらう？」

「まあ、そうですね」

「じ、実はのう……」

羽衣狐は視線を逸らして、また言葉をさ迷わせる。

おいおい、ちょっと様子がおかしくないか？ 具合が悪いつて感じじゃないけど、大丈夫か？

俺が少し心配してると、羽衣狐が続きを口にした。

「アレは、妾のせいなのだ……」
「は？」

どういう事ですか？ と言おうとしたが、その言葉は喉に流し込んだ。思い返せば、気になる点はあった。

山吹さんが自分の過去を語ってた時も、羽衣狐は様子がおかしかった。それにぬらりひょんも、『狐の呪い』と言うワードを口にしていた。

「四百年前、ぬらりひょんに宿願を破られた妾は、奴に呪いをかけたのだ……『決して妖とは子を成せぬ』と言う呪いをのう……。あの時は、とにかく邪魔をした奴が憎くて、呪わずにはいられなかったのじゃ……」

呪いの内容を暴露した羽衣狐に、俺は頬を引きつらせて苦笑いを作った。

——「つへえ、酷^{ひど}え呪いかけたんだな、アンタ……。それじゃあ、事情を何も知らない山吹さんが、自分のせいだと思って出ていったのも無理ないわ。」

チラッと羽衣狐が、俺の反応をうかがってきた。

「……軽蔑したかえ……？」
「えっと……まあ、正直ちょっと引きました……」

そりゃアンタねえ、随分とえげつない呪いつすよ。
ぬらりひょんは、瑛姫って人間と結婚したから図らずも呪いを回

避して、鯉伴を生む事が出来た。けど、その時は羽衣狐の呪いに氣付いてなかったから、山吹さんは組を出て、鯉伴は人の女と結婚をしてリクオを生んだと。流れはこんな感じだろう。瑛姫の事は、奴良組本家でぬらりひょんから直接話を聞いてた。

呪いのせいで、ぬらりひょんの血がどんどん薄まっていったんだ。いや、マジでえげつないわ。

「そうか……」

少しショックを受けたのか、羽衣狐はしょんぼりと俯いた。
「いやいや、普通引きますって。」

でも、ストレートに言い過ぎたかな？ もっと、こう、オブラートな感じに出来たらよかったんだろうけど、俺、そういう氣遣い苦手なんだよな。

氣が利かない自分に反省していると、羽衣狐がおずおずとした口調で訊いてきた。

「……嫌いに、なったか……？」

「え？」

反省を中断して、羽衣狐と向き合う。

「酷い女だと思って……妾の事、嫌いになったかえ……？」

声にいつもの迫力が無く、暗いけど顔も不安そうに表情が曇ってるのが見えた。

ソレは、俺が初めて見る羽衣狐の顔だった。

正直、意外だった。あの羽衣狐が、不安に思ってるんだ。しかも、『俺に嫌われる事を』だ。不遜な羽衣狐の事だから、そんな事気にもしないと思ってたけど、そうじゃなかった。

意外に思うと同時に、ちょっと嬉しくも思った。何だか、改めて羽衣狐の気持ちを知らる事が出来たような気がしてさ。だから俺は、正直に答えた。

「いいえ。嫌いになんて、なってないですよ」
「え？」

俺の答えを聞いて、羽衣狐の目が丸くなった。構わず俺は続ける。

「そりゃあ、呪いの事はちょっと引きましたが、嫌ったりしませんよ」
「ほ、本当かえ……？」

震える声で、羽衣狐が確かめてくる。

「はい」

俺は迷わず頷いた。

つか、嫌いになるなら、人間の肝喰ってる事を知った時点で嫌いになってますって。他にも、人間を迷いなく虐殺したり、最高の悪党ぶりを見てきましたからね。

でも、嫌いにはなってない。だって、しょうがないじゃん。惚れちゃったんだから。

「俺は、羽衣狐が好きです」

初めて俺は、言葉をつつかえずに言えた。まあ、やっぱり恥ずかしさはあるけどね。

「そ、そうか……そうか……」

羽衣狐は、胸の前に両手を置いて、何度も頷いてる。
パツと顔を上げると、パタパタと速足に近付いてきて、俺に抱きついてきた。

いきなり抱きつかれて、俺は困惑する。

「は、羽衣狐!？」

「妾も……妾も、愛しておる……! 愛しておる……!」

羽衣狐は、涙声で想いを訴えてくる。

やれやれ、と俺は思った。呪いの事を打ち明けたら、俺が嫌いになると思つて、ずっと不安でいたんだな。さっきの告白は、羽衣狐がスゲー勇気を出してやった事なんだ。

正直、羽衣狐が自分から告白してくれて嬉しかった。自分の汚い部分を他人に明かすつて、スッゲー勇気が要る事じゃん。

だから、俺は嬉しかった。素直に教えてくれて、嬉しかった。

「羽衣狐」

「なん——っ!？」

声をかけ、羽衣狐が顔を上げたところで、キスをした。

我慢出来なかつたつてのもあるけど、嫌いにならないつて意味もこめて、キスをした。こんな事する柄じゃないんだけどな。羽衣狐のせいで、おかしくなっちゃったのかもしれない。

「ん……んふっ……!」

「はあ……ん……!」

しかも、ただのキスじゃない。口の中で互いの舌を絡め合う大人

なキス——ディープキスだ。
気持ち良い。

羽衣狐の舌が、舐めるように絡んできて、俺の舌を刺激する。キスだけで、凄く興奮してきて、何だか頭がとろけそうな変な気分になってきた。

口を離すと、いやらしい唾液の橋が出来た。重力に従って、すぐに切れたけどね。

「羽衣狐……！」

「人間……！」

互いに息を少し荒げて、見つめ合う。

すると、羽衣狐が着物を脱ぎ始めた。一瞬驚いたけど、止めはしなかった。寧ろ、早く脱いでほしいと心中で急かした。

一枚一枚、ハラリと着物が床に落ちていく。

そして、最後の一枚も、本人の手が脱がされた。羽衣狐は、一糸纏わない姿で俺の前で立ってた。初めて見る羽衣狐本人の裸に、俺は息を呑んだ。山吹さんにも負けない綺麗な体型で、胸の膨らみも大きく、女にとって理想な形をしている。

月明かりに照らされた羽衣狐の肢体を見て、俺の興奮は高まり、顔が熱くなっていく。

羽衣狐は、いつもの調子に戻ったのか、妖しい笑みを浮かべている。

「さあ、人間よ。妾にどうして欲しいか、言うてみよ。妾は何でもしてやるぞ……？」

吐息がかかる至近距離で、羽衣狐が訊いてくる。

服越しに、二つの膨らみの柔らかい感触が伝わってくる。

ゴクリツ、と唾を飲み込み、俺は口を開いた。

「……して、下さい」

「ん？ 何じゃ？ 小さくて、よく聞き取れなんだ。もう一度言うておくれ？」

頼むから、意地悪しないでくれ。

恥ずかしい気持ちを押し殺して、俺はもう一度言った。

「は、羽衣狐の……好きにして下さい……」

「ふふふ。よく言えたのう。あいわかった……妾が、たんと可愛がってやろう……！」

羽衣狐に手を引かれ、漆黒のベッドに連れられる。
ソコで俺と羽衣狐は、互いの愛を確認し合った。

拝啓、お父様、お母様、ついでに弟よ。
俺は、妖狐と一緒になれて幸せです。

完。

番外編：拝啓（後書き）

『アヤカシ質問コーナー』

投稿者： ミスターサーさんの四季さんからの質問。

『では質問、主人公の名前はいつ分かるんだ？

最後に羽衣狐、人間の肝は二度と食わないよな？

・・・主人公君、妖怪になりたくなったらウチに来なさい
妖怪化になる刀を開発した是非一度、モ——試し切りさせて』

俺「いやゝ、名乗る程の者じゃないんで」

羽衣狐「人間の肝は、もう食べぬ。晴明を産んだ今、食べる必要は無い……何より、人間に嫌われるような事はせぬ」

俺「四季さん。妖怪になりたくないって言ったのに、何で妖怪化の刀を出すん？ それに最後の方、“モルモット”って言うおとしたよね？ 言おうとしたよね？」

どうも。作者の赤夜叉です。

今回の話で、『アヤカシ』第一部は終了となります。第二部ですが、原作では百物語組なるモノとの抗争が始まりそうで、しかも過去編で話が途中と言う事もあり、オリジナルストーリーでいこうと思ってます。京妖怪は、京妖怪で別に話をしよう。ただし、嘘予告の内容とは限らないので、過度な期待はしないようお勧めします。では、またいつかお会いしましょう。

沢山の応援・感想・質問ありがとうございました！
では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8891t/>

アヤカシ

2011年6月23日22時01分発行